
夢・幻（うたかた）の花

水嶋ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢・幻の花 うたかた

【Nコード】

N4246D

【作者名】

水嶋ゆり

【あらすじ】

時は幕末。11代將軍家斉公の御世に現れた爽やかな風のような男、鎬木数馬。その青春を彼を取り巻く友人との絡みを描くストーリー。

御高祖頭巾の女

旧暦3月のある夜。

桜の香りに誘われて^{かたみの香}鏑木数馬はふらつと屋敷を抜け出した。

徳川の御代も^{みよ}11代家斉公の世となれば幕府は安泰・・・いや、必ずしもそうではなく、筆頭老中松平定信が出した寛政の改革以降、武家だけではなく庶民の暮らしも慎ましくなった。だがそれでも尚、各地で起きている暴動は幕府のお偉方の頭痛の種となっていた。

数馬の生家、つまり鏑木家は將軍家より目付け職を任せられる旗本3500石の家柄で、現在は鏑木静馬、数馬の兄が継いでいた。冷や飯食いの数馬は次男であり、他家へ養子に行くか、武士を捨てるかの二者択一を迫られる身分であつた。しかし兄静間は生来身体が弱く、家督を継いでからは一層具合が思わしくなく床に伏せがちになつていた。そのせいか早々と自分亡き後は数馬に家督を譲ると表明していた。

それでも当の次男坊はそんなものには一向に頓着がなく、用人の佐々岡が心配するほどのやんちゃな男であつた。また、千葉道場でも免許皆伝で敵なし。と思えば、昌平坂学問所でも他にに類を見ないほどの秀才でもあつた。それは寛政の3博士。柴野、尾藤、岡田をも唸らせるものだつた。それに加えて眉目秀麗。ちよつと位悪さをしてその整つた笑顔を見ると、まあいいか。という気持ちにさせてしまう何かをも備えていた。

「柔。今宵は暖かいな。日に日に風が温んでくる。」
独り言のように呟く数馬にどこからともなくスツと黒い影が近寄つた。

「旦那。あの角を曲がつた所でお武家のお女中が難儀してやすぜ。」
柔と呼ばれた影のような男はそれだけ言うともたスツと離れていつ

た。

「ふむ。俺に助けてやれってことか。こんな夜に無粋なことだ。」
とはいうものの、人が困っているのに黙って見過ごすのは男が廃^{すた}るとばかり柔の言った角を曲がってみた。なるほど3人のやくざ風の男に絡まれている御高祖頭巾の女がいた。

「無礼者！」

懐剣をかざしているものの相手はそういったものには滅法強い連中だ。一向に効き目がない。それどころか、あれよ！という間にその手を捻^{ひね}られ汚らしい手がその胸元に入ろうとしていた。

「うぬら！何をしておる！」

突然背後から大声を出された連中は、ビクツとしたように振り返り、一瞬たじろいだがすぐ応戦にでた。

「何だとお！さんぴん！怪我したくなかったら黙ってすっこんでろ

！」

「生憎^{あいにく}だが難儀している人を見殺しには出来ない性質^{たち}でね。」

「なに！」

その中の1人が刀を振り翳すと、

「たわけ！」

声もろとも懷から出した扇子でその手を叩き刀を落とした。次の瞬間、その刀を取り上げ振り向きざまに残った2人の足を払った。

「殺^やられた！殺^やられた！」騒ぐ奴らに

「峰打ちだ。桜の花に免じて今宵は許してつかわす。さっさと消えろ。」

事もなげに答える数馬。

「覚えてやがれ！」

捨て台詞を残して去ろうとする連中に、「忘れ物だ。」と奪い取った刀を投げつけた。

「全くせつかくの花見が台無しだ。」

袖の埃^{ほこじ}を払いながら呟いて振り返ると、その女が震えながらこちら

を見ていた。

「怪我はないか？」

数馬の問いに言葉を発する事が出来ないらしく、ただ頷くばかり。

「どのような仔細か分らぬが、このような夜更けにお女中が1人で供も連れず歩いているのは関心しません。送って進めるゆえいずれのご家中かな？」

ところが娘は、

「い・いいえ。大丈夫でございます。た・ただ今は危ないところを助けていただきありがとうございます。」

深々と頭を下げると数馬に背を向け歩き出した。しかし自分の行く方角が判らないらしく、間もなく立ち止まってしまった。それを後ろから見ていた数馬は、そのまま行ってしまうかと考えたが、深い事情がありそうな娘を放つてもおけず近付いて声をかけた。

「こんな夜更けに提灯も持たず供も連れず歩いておったのでは先程の輩やからの格好の餌食にされてしまいますぞ。屋敷は聞かぬからそなたの名前と、どこへ行こうとしていたのかだけ聞かせてくれ。次第によつてはそこまで送り届けてやろう。」

初め、口をつぐんでいた娘はさっきの光景を思い出したのである。すがりつくような目で数馬をみた。やがて意を決したように話し出した。

降って沸いたようなお荷物

「お察しの通り、屋敷は故^{ゆゑ}あつて明かせませぬが、わたくしは茉莉^{まり}と申します。　　実は人を捜して宇都宮まで参ろうとしておりました。」

「宇都宮！また随分遠くまで。」

（こりやあ大変な娘を拾つてしまつたぞ。）内心後悔したが後の祭り……

「宇都宮は遠いのですか？わたくしは千住の先あたりかと思つておりましたが。」

そういう娘の狼狽が手に取るようにわかつた。しかし宇都宮がここに位置しているのかも解からず出立するとは……この娘、頭が少し足りないのか？と思つてみたが、

「お女中。あ、いや、茉莉殿。宇都宮が奥州街道をさかのぼり、そうですね。ここからだとは30里は歩かねばならぬ。そこまでのようにしていかうとしたのです？それに気を悪くするかも知れぬが、そなたの行かんとしていた方角では千住にさえたどり着けぬ。そちらでは内藤新宿に行つてしまうぞ。」

30里。それを聞いただけで茉莉と名乗る娘はフラツと倒れ掛かつた。その身体を咄嗟に支え数馬は側に控えているであろう糸八を呼んだ。

「お前ずつと見ていたなら助けても良からう。」

皮肉たつぷりの言葉も糸八には通じない。

「旦那も満更じゃなさそうだったんでね。」

「ふん。まあいい。この女中、とんでもない娘らしい。聞いての通りだ。とにかくここでこうしていても始まらない。どこか泊まるころはないか。木戸はもう閉まつているから今からはどこへも行けなishina。一晩休めば宇都宮まで行こうなんてえ気は失せるだろう。」

糸八と話するとき、数馬は知らず知らずべらんめえ口調になつてしま

う。しかし何故か彼はそれが気に入っていた。

「今からつたつて旅籠はたしはもう戸締めしてやすぜ。このところのご時世じゃ、どこも早々と暖簾を仕舞うちまう。」

さすがの糸八も当惑している。

「かと言つて屋敷に連れ帰るわけにもいかんし。兄上のご様子と思わしくねえんだ。これ以上の厄介はかけられねえ。うーん。どうしたもんかなあ。」

数馬が思案に暮れているといつ氣を取り戻したのか、茉莉がはつとしたように数馬の腕の中から離れた。

「ああ、氣がついたかい。おめえさん、やっぱり行くのは止した方がいいと俺は思う。いや、送っていくのが嫌なわけじゃねえ。ただ誰を捜して行くのかわからんが、ただ宇都宮つてだけじゃ捜しようがねえ。ここはひとまず屋敷に戻つてあんたのご主人に相談してみるんだな。」

数馬の言葉に茉莉という娘は途端に態度を硬化させた。

「あなた様に話したのは間違いでございました。さきほどのご親切には感謝いたしますが、これにて失礼させていただきます。」

くるつと踵きびすを返し5、6歩足を踏み出したものの、30里という距離がその心を躊躇させるのか再び歩みが止まってしまった。

なんてえ強情な女中だ。主人の顔が見てみたい。そう思いつつ数馬はその娘に近付いた。

「だから言わんこつちやない。送つてやりてえが、屋敷の名を明かしちゃくれねえんだから仕方ねえ。どつか泊まるところを考えて・・
・ああ！駄目だ。さっぱり見当がつかねえ。」

顔に似合わず数馬は正直なところがあつて自分達が今置かれている現状を即座に口にした。本当に困惑しているのがその表情から見て取れる。その姿にようやく信用する氣になったのか、茉莉は自分の知り合いが日暮里にいる、そこを訪ねれば泊めてもらえるだろう。と言った。

「日暮里か。ま、仕方ねえ。そこしかないとすると行くしかないな。

「
そう言つて茉莉の歩く速度を念頭に置きながら数馬たちは日暮里に
向かった。

老婆

「お察しの通り、屋敷は故あつて明かせませぬが、わたくしは茉莉まりと申します。　　実は人を捜して宇都宮まで参ろうとしておりました。」

「宇都宮！また随分遠くまで。」

（こりやあ大変な娘を拾ってしまったぞ。）内心後悔したが後の祭り……

「宇都宮は遠いのですか？わたくしは千住の先あたりかと思つておりましたが。」

そういう娘の狼狽が手に取るようにわかった。しかし宇都宮がここに位置しているのかも解からず出立するとは……この娘、頭が少し足りないのか？と思つてみたが、

「お女中。あ、いや、茉莉殿。宇都宮が奥州街道をさかのぼり、そうですね。ここからだとは30里は歩かねばならぬ。そこまでのようにしていかうとしたのです？それに気を悪くするかも知れぬが、そなたの行かんとしていた方角では千住にさえたどり着けぬ。そちらでは内藤新宿に行つてしまうぞ。」

30里。それを聞いただけで茉莉と名乗る娘はフラツと倒れ掛かった。その身体を咄嗟に支え数馬は側に控えているであろう糸八を呼んだ。

「お前ずつと見ていたなら助けても良からう。」

皮肉たつぷりの言葉も糸八には通じない。

「旦那も満更じゃなさそうだったんでね。」

「ふん。まあいい。この女中、とんでもない娘らしい。聞いての通りだ。とにかくここでこうしていても始まらない。どこか泊まるころはないか。木戸はもう閉まつているから今からはどこへも行けなしな。一晩休めば宇都宮まで行こうなんてえ気は失せるだろう。」

糸八と話するとき、数馬は知らず知らずべらんめえ口調になつてしま

う。しかし何故か彼はそれが気に入っていた。

「今からつたつて旅籠はたしはもう戸締めしてやすぜ。このところのご時世じゃ、どこも早々と暖簾を仕舞うちまう。」

さすがの糸八も当惑している。

「かと言つて屋敷に連れ帰るわけにもいかんし。兄上のご様子と思わしくねえんだ。これ以上の厄介はかけられねえ。うーん。どうしたもんかなあ。」

数馬が思案に暮れているといつ氣を取り戻したのか、茉莉がはつとしたように数馬の腕の中から離れた。

「ああ、氣がついたかい。おめえさん、やっぱり行くのは止した方がいいと俺は思う。いや、送っていくのが嫌なわけじゃねえ。ただ誰を捜して行くのかわからんが、ただ宇都宮つてだけじゃ捜しようがねえ。ここはひとまず屋敷に戻つてあんたのご主人に相談してみるんだな。」

数馬の言葉に茉莉という娘は途端に態度を硬化させた。

「あなた様に話したのは間違いでございました。さきほどのご親切には感謝いたしますが、これにて失礼させていただきます。」

くるつと踵きびすを返し5、6歩足を踏み出したものの、30里という距離がその心を躊躇させるのか再び歩みが止まってしまった。

なんてえ強情な女中だ。主人の顔が見てみたい。そう思いつつ数馬はその娘に近付いた。

「だから言わんこつちやない。送つてやりてえが、屋敷の名を明かしちゃくれねえんだから仕方ねえ。どつか泊まるところを考えて・・
・ああ！駄目だ。さっぱり見当がつかねえ。」

顔に似合わず数馬は正直なところがあつて自分達が今置かれている現状を即座に口にした。本当に困惑しているのがその表情から見て取れる。その姿にようやく信用する氣になったのか、茉莉は自分の知り合いが日暮里にいる、そこを訪ねれば泊めてもらえるだろう。と言った。

「日暮里か。ま、仕方ねえ。そこしかないとすると行くしかないな。

「
そう言つて茉莉の歩く速度を念頭に置きながら数馬たちは日暮里に
向かった。

稲

数馬は客間に通され、それまでとは打って変わったもてなしを受けた。茉莉は別の部屋に通されたものとみえる。

しばらくして老婆が現れ、それまでの無礼を謝罪した上で茉莉を助けてくれた事に対し改めて丁寧な礼を述べた。

「わたくしは茉莉様のご母堂様付きの乳母で稲と申します。お嬢様が生まれ、母君様が3年後にお亡くなりになられるまでお側に仕えておりました。お嬢様がお困りのときわたくしめを思い出してください。さつたのは大変嬉しゅうございますが・・・」

チラッと茉莉のいる方を見た。やはり当惑しているのだろうと数馬は話題を変えた。

「お稲さん。あんたはさつきから茉莉さんをお嬢様と呼んでいるようだ。」

と、一旦言葉を切り、冷たくなった茶をすすった。

「はい。さるお旗本のお嬢様でございます。それがこのようなことをなさるなんて・・・」

「乗りがかった船。と申しては軽すぎる言葉かも知れぬが、茉莉さんの捜しておられる御仁がどれだけ大切なお人が存ぜぬが、ここはあなたの力で止めさせる方向に持つていったほうが賢明だと思う。」

差し出がましいようだが宇都宮は深窓のお嬢様が1人で行けるようなところではないですぞ。」

「はあ。ですがお嬢様は一旦言い出すとテコでも動かない方ですから・・・」

困っている。明らかにこの気丈な乳母は困っているのだ。

「だが今も申したが、到底1人で行けるような・・・お！そうだ。」

そなたがお屋敷に連絡し、そちらから尋ね人を捜して貰えば良い。」
ポンと膝を叩く数馬。もとい、風太郎に稲は悲しそうな目を向けた。

「それができればお嬢様もこんな危ない橋を渡ったりしますまい。」

公に出来ぬ事情があるますればこそ、思い余ってお屋敷をたった1人で抜け出したのでございましょう。」

茉莉の心情を思つてか、小袖で目頭を拭う稲。それに同情しなくもなかつたが、そこは女の浅知恵と、今一度提案した。

「なれど事情を説明すれば解かつて下さるお方もおられよう。――

とにかく茉莉殿はそなたの手元に渡した。某（それがしの役目はこれまででござる。長居いたしたがこれにて失礼する。馳走になった。」

と大小を持ち、立ち上がりとうとする数馬に稲は裾すそを掴むばかりに詰め寄つた。

「もし！お願いでございます！お嬢様のお供をして宇都宮まで行つて頂けませぬか！富良殿にもご事情があるのは重々承知しております。なれど乗りかかつた船と、何とかご一緒に！お願いでございます！」

「馬鹿な事を！そなたまでたわけた事を申すでない！主家が進んで危険な目に遭うのを見過ごすばかりか煽つてどうする！ここは年の功で茉莉殿を引き止めるのが筋ではござらんか！」

年の若い数馬に叱咤され、一旦は承知したように見えたが、突如、稲は何かを思い切つたように居住まいを正した。

「……事情を。お嬢様がたつた1人でお屋敷を抜け出してまで人捜しにでられたのか、その理由をお話しいたします。」

家出の理由

「わたくしも先程お嬢様から聞かされるまでついぞ忘れており
ました。」

そう前置きして稲が話したことは――

最近、茉莉とさる家中の人物との間に縁談話が持ち上がった。

ところが茉莉には幼い頃からの許婚いいなずけがいた。しかし5年ほど前、その相手が剣の修行を理由に突然出奔。そのまま現在に至るまで音沙汰なしの状態であった。そのため周囲は茉莉の年齢の事もあり、婚姻を履行するのは不可欠だと考え始めた。その矢先新しい縁談話が持ち上がったため、茉莉の家ではその話しに乗り気になった。ところが当の本人が自分は婚家の定まった身だからと誰の助言も聞こうとしない。そこで父親である当主が改めて許婚の家からその話は白紙に戻す、という念書を貰い茉莉に見せた。相手の家でも元々死んだものと公儀に届け出てあったので、いとも簡単に念書を出す事に承したのだった。それで茉莉も納得したかに見えたのだが、出入りの商人からその許婚にそっくりな人物を宇都宮で見かけた、という情報がもたらされた。その話を父と兄がしていたところを偶然聞いてしまった茉莉は、いても立つてもいられなくなり、とにかく本人に会ってその心意を確かめ、その方に事情があるなら自分はそこに留まり一生添い遂げたい。それだけの想いだけで家を出た。――

「……その御仁の実家で他界した、ということとで扱ってあるのであれば、尚更茉莉殿は宇都宮に行つてはいかと存ずるが。」
腕組みをしながら聞いていた数馬がそう言った途端、ガタツと物音がした。稲が障子を開けるとうな垂れて泣いている茉莉の姿があった。

「お嬢様！しつかりなすつて下さいまし！ ええ！分りました！そ

れほどまでに新之介様の事をお捜し申したいのなら　　このばあやがお供いたしましょう！そして新之介様に会ってその後の事を考えましょう！」

何と！これはとんでもない事を言い出す婆さんだ！

「稲殿。あんたまでそんな浅はかな事を言っでどうするのだ！・・・仕方ありません。あなたのような年寄りにこのお嬢様を守ってかの地へ行ける道理がない。この話、お引受いたそう。但し、大勢で押しかけてはその新之介殿とやらも困るであろう。ここは某に茉莉殿を任せて頂きたい。夫婦者として旅すれば街道は何とかなるだろうし、行く先々で何らかの方法を取り、状況を知らせるゆえ、手形など送り届けて貰えまいか。」

「富良殿！それではご承知下さるのでございますか？！」

稲が喜びの声を上げた。茉莉も喜んでるのが分る。改めてその顔を見ると、誰をか云わんや、傾国の美女と詠われた楊貴妃を想像させる程の美しくさだ。数馬は内心新之介という男に嫉妬を感じた。そういえば俺にも縁談があつたなア、とまだ見ぬ花嫁と目の前にいる娘を比べてしまう。

「但し、そなた達が某の申し出を受けて下さるのであれば、の話でござるが。」

「ええ！勿論でございます。お頼みいたすからには路銀は全てこちらでご用意いたします。それゆえなるべく早く出立を！」

「ならば明日では如何かな？」

「はい！異存はございませんぬ！」

「しからは明朝迎えに参る。それでは某はこれにて失礼致す。」

颯爽と立ち上がる数馬に茉莉が頭を下げた。

「道中は長い。・・・今宵はゆるりと休まれよ。」

感謝の気持ちで震えるその小さな肩に優しく声を掛けると、数馬は稲の庵を辞去した。

数馬の口実

数馬が帰宅したのは既に丑の刻を回っていたのだが、火急な用だからと兄、静馬の寝室に押しかけた。

「どうしたのだ。このような時刻に。」

最近では臥せていることが多い静馬だったが、数馬と対峙する場合に限ってはいつも上機嫌で布団を背に起き上がる。弟のおとぎばなしのような話を聞くのが唯一の楽しみになっていたからだ。

「兄上。かような時刻に申し訳ございませぬ。実は」

と先程までの話を聞かせた。初め可笑しそうに笑っていた兄が、段々険しい表情になっていった。

「かような理由でその茉莉という武家娘を宇都宮まで送り届けなければならぬのです。乗りかかった船、と申しましようか。そこで家をしばらく留守にしたいと存じまして、深夜も顧みずお願いに上がった次第です。」

「・・・話はわかった。だがそちが長期に渡って家を空けるのは困る。儂に、もしものがあらば即、お前に家督を継いで貰わねばならんからの。そちが留守の間、という事にもなり兼ねぬ。」

「兄上！何を仰るのです！そのような弱気では病に食われてしまいますぞ！道中飛脚にて逐一報告いたしますれば、兄上も某が帰宅した折の四方山話を楽しみにお待ちくだされ。」

「しかし・・・そちの縁談も進んでおるしの・・・なるべく在宅して貰いたいのじゃ。」

「兄上。その件に關しまして訊ねたき議がございます。某、縁談がある旨は佐々岡から聞きましたが、具体的なことは一切分りませぬ。兄上がご存知のことを教えて頂けませぬか。」

「と申しても、儂も大目付の鳥居様の仲立ちで相手は勘定方のご息女。ということだけでは全く分らぬ。はつきり分ったなら真つ先に知らせるつもりではおったのだがな。」

「ということは鳥居様のご沙汰を待たねばならぬ、ということですね？」

「沙汰、などと縁起でもない。」

「某にしてみればそれでもまだ良い表現だと存じますが・・・とにかく用が済み次第すつ飛んで帰って参りますれば、何卒、旅に出るお許しを戴きとうございます。」

「うーむ。ところで数馬。その娘御、別嬪じゃったか？」

突然静馬がニヤニヤして聞いた。

「兄上！ さすが兄上。察しの通り。かなりなものですぞ。」

私も若い頃はいろいろ遊びりましたが、あれほどの美形にはついぞお目にかかったことはありません。初めはここが少し弱いのか、とも思いましたが、なかなかどうして賢い娘でございました。」

「そうか・・・ならば行くがよい。行つてその茉莉という娘御を助けてやれ。」

「はい！ では木戸が開くと同時に出立いたしますれば、これにて御免。」

そう言い残して去つて行く後ろ姿を見てポツリと静馬は呟いた。

「儂も1人前の男として妻を娶つてみたかった。」

出立

朝。夜も明けないうちに数馬は家を出た。旅支度といつてもいろいろ持つと荷物になるし、世の中が騒がしくなっている昨今、金目の物を持っていればスリや追いはぎなどの格好の餌食になるので路銀はその都度調達することにした。

「御免。」

庵の木戸で案内を請うと、昨夜の下男が出てきた。もう顔見知りの間柄になったせいかわ彼（市助というらしい）はすんなり数馬を客間に通した。

程なく稲に伴われた茉莉が旅支度をして現れた。薄く紅を差した姿が昨夜に増して美しい。

「富良殿。朝餉あさけの用意をいたしましたのでお召し上がりくださいませ。」

稲の言葉と共に女中が膳を運んできた。

「かたじけない。実は腹ペコだったのです。 おや？茉莉殿は？」

「わたくしは別室で頂きます。」

鈴を転がすような声で茉莉が答えた。すると数馬は手に持った箸を置き真つ直ぐ茉莉を見て怒ったように言った。

「これからはそういうことは止めて貰えまいか。仮にも私達は夫婦ということで旅に出るのです。その都度別な部屋で食事を摂っていたら周囲に疑って下さいと言っている様なものだ。練習の意味も込めてここで一緒に食事をしていただきたい。」

「は・はい！申し訳ございませぬ。」

慌てたように稲自身が茉莉の膳を運んできた。ところが中味が違う。数馬には二の膳間であるのに対し、茉莉のは一汁一菜。つまり主食に汁碗、あとは香の物のみであった。

「……稲殿。手数をかけるが某の膳も茉莉殿と同じくして頂きたい。先程も申しましたが、夫婦として旅するのですから膳の中味も同じでなければ怪しまれる。もし夫婦者でないことが露見すれば直ちに2人の素性が調べられる。そうなたら確実にあなたの父上はあなたを引き戻すでしょう。勿論某もただでは済まぬ。自分1人だけならどんなことになるうと構わぬが、某にも家があるから迷惑を被るのは非常に困るのだ。だからなるべく目立たぬよう気を付けて貰いたい。」

そうは言っても茉莉のこの美貌では目立たぬようにするのが難しいだろうと数馬は思った。

「は・はい。」

引き戻される！その言葉が効いたのか、数馬の膳から皿が1品、2品と下げられた。

「……では頂きましょう。」

準備が出来ると茉莉を促し箸を取る。しかし中味が少ないだけに間もなく終わってしまった。

「夜が明けてきましたな。では出立いたそうか。」

「はい。」

稲は細々（こまこま）と茉莉の面倒を見ようと上がり口まで付いて来たのだが、それでは何もらないと数馬に止められ、茉莉は1人で草鞋を履き、笠を被らなければならなかった。今までしたことのない事をしなければならなので、手つきも鈍く不器用だ。イライラするほど時間がかかって数馬はじっと待っていた。ようやく出来上がると大げさに褒めた。

「では稲殿。行つて参る。」

「どうかお嬢様を宜しゅう……」

頭を下げる稲の肩が震えていた。茉莉もつられて小袖で涙を拭いている。

「旅立ちに涙は禁物ですぞ。さあ2人共、笑ってください。」

「は・はい。」

数馬は茉莉を促し、春とはいえまだ肌寒い外へ出た。

いざ 宇都宮！

稲の家を出てから一時^{いつとき}、2人はお互いの胸のうちを探るようにただ黙って歩いていた。歩幅も小さく歩みも遅い茉莉に合わせて、自然と数馬の方もゆくり歩くようになる。従ってなかなか距離を稼ぐ事が出来ないのだが、短気なところもある反面、そうとわかつたらいつまでも待つことの出来る数馬であつた。今日は千住まで。とあらかじめ心積もりをして茉莉に声をかけた。

「茉莉殿。今日は千住で宿を取ろう。」

「千住？でございますか？」

「左様。今宵は早めに休んで明日また早く出かけよう。」

「富良様。もそつと足を伸ばすことは出来ませぬか？」

数馬の提案は茉莉には不満だつたようだ。

「そなたの気持ちも解からぬではないが、初日から頑張つてもあとが続かなくてはお話にならぬ。気ばかり焦つても身体が云う事を利かなくなりかねぬゆえ、これから先は朝早めに出て、途中休みながら陽のあるうちに宿を取ろうと思う。」

「なれど少しでも歩かねば・・・宇都宮は遠いのでございまいしょう？」

「ふむ。なるほど。宇都宮は遠い。そなたの話は至極もつともな事。」

と一応茉莉の意見を尊重し、思案するように眉をひそめたが、やがて「いいや。初めから無理をして身体など壊したのでは元も子もない。やはり早目に宿を取るという方向でいっては貰えまいか。」身体を壊したのでは元も子もない。そう言われやつと納得するとまた黙って数馬の後を付いて歩き出す茉莉。最初から彼女の歩調に合わせているので左程辛くはないようだ。

「茉莉殿。黙って歩いていても面白くない。これから俺達は一応夫婦ということで旅をするのだから、お互いの事を知っておく必

要があると思う。少々訪ねても宜しいか？」

「はい。」

「あなたは許婚殿、つまり新之介という御仁をどの程度知っているのです？」

「どの程度。と申されましても……わたくしは一度もお会いしたことはありませんゆえ……ただ父と新之介様のお父様が新年の宴にて取り交わしたものと聞いております。」

「なんと！酒の席で一身上の大事を決められたというのか！」

そのような大事な事を酒宴の席で決める、ということなど嫡木家は考えられなかったので心底数馬は驚いた。もつとも自分の知らないところで縁談が進んでいる、というのも五十歩百歩ではあるのだが。

「それであなたは承知なされたのか？」

「父も兄も申し分ないと申しましたし……わたくし達女子にとつて縁組は家と家との結びつきだけに存在するものですから……承知するなどというものでは……」

「それなら何ゆえ新しい演壇に躊躇するのです？」

いくらそれが当たり前だという世の中であっても、数馬はそういふしきたりに対して常日頃憤りを感じていたため、茉莉の意見を質^{ただ}してみたくなった。

「あなたはお父上やご兄弟が良いと言うから嫁に行くのか？自分の意見というものはないのか？」

「わたくしは　できる事なら今回の縁組はお断りしたいのです。たとえ酒宴の席であつても一度そうと決まったからには何としても新之介様をお捜し申して存念を伺いたいです。妻に迎える気がないのであれば、はっきりと引導を渡していただきたい。そうせねば私の気持ちが収まりませぬ。」

杖を持つ手に自然と力が加わるところを見ると、茉莉の決意は並々ならぬものであることが窺える。

「では妻には出来ぬ。と言われたならその後は何とする。」

「その時は 墨衣すみころもに身を染めたいと存じます。」

「なんと！出家なさるといふのか？！」

「はい。父の勧める相手のお方に事情を話し、わたくしとのことはなかったものとして頂く所存です。」

「相手の男がどのような方かは存ぜぬが、黙もくしていれば分らんでしよう。それをわざわざ公表せずとも良いのではないか？」

「いいえ。それではそのお方に申し訳が立ちませぬ。理由わけありの娘を貰ったとあとから判ったのでは死んでも死に切れませぬ。」

「うーむ。」

唸ったまま数馬は黙り込んでしまった。徳川の世も200年も続くと少しづつ乱れてきて、武家娘といえども借金かの形に商人に嫁かす者も現れてきている今日この頃、茉莉のような娘がいることは希少価値に値するかもしれない。増して11代様は殊の外、好色であらせられ愛妾を何人も侍らせお世継ぎには困らないという話も聞く・・・

その後2人は前にも増して言葉少なに足を運んでいた。

糸八という男

さすがここから先は奥州と、一寸先もわからぬ地への宿場町千住。江戸の風情もこれまでと町は活気に溢れている。数馬と茉莉が足を踏み入れると、数馬はともかく笠を被つていても茉莉は一目でそれとわかるほどの気品と色気を放っていた。そのため早速二人は注目を浴びた。雲助連中の汚らしい掛け声をどうにか振り切つて一夜の宿をある旅籠はたしに求めた。表向きは他の客と変わりなかったが、実際は非常に手厚くもてなされた。

旅支度を解き部屋でくつろいでいると、数馬はふと糸八という男が不思議な存在に思えてきた。この旅籠も糸八の手配で世話になる事になったのだが、草鞋を脱ぎ手水を使っていると、主あるじから「糸八さんにはいつもお世話になっていきます。楠木様のお噂は常々うかがっております。」と耳打ちされたからだ。

そもそも数馬が糸八と出会ったのは彼が放蕩をしていた頃、糸八がその道の掟に背いたとかで袋叩きにあい、大川に投げ込まれたところを救ったのが始まりだった。その後何くれとなく面倒をみているうちに数馬の護衛だといわんばかりに影のように寄り添うようになった。はつきり糸八の前身を聞いたことはなかったが、何代目かのねずみ小僧ではないかと感じるのだ。確かに糸八を助けて以来、ねずみが現れないのも頷ける。もしかするとんでもない悪党を拾つてしまったのか？と時折、背筋が寒くなる事もあるが、彼がいると何かと便利だし巷ちまたの情報をいち早く教えてくれるので、その存在を快く思う事のほうが多かった。

初夜

さてつらつらとそんな事を考えていた数馬の目に、部屋の隅でじつと身体を固くして座っている茉莉の姿が映った。まあ、会って二日目の男を信用しろ、というのが無理からぬ話なのだが、そんなことでは明日からの旅が思いやられる。

「茉莉殿。そんな所にいたら話が遠くてかなわぬ。もそつと近くに寄ってくれぬか。それから何度も言うようだが、俺達は夫婦者という事になつてゐる。これから夕餉ゆづけの膳を持つてくる女中に怪しまれてもかなわんからもつとくつろいで貰いたい。」

「風太郎様。」

道中、数馬に指摘されて茉莉は富良様ではなく名前で呼ぶようになっていた。

「わたくしこのような所は初めてでございますのでどうして好いやら・・・」

「ふむ。・・・では。」

パンパンと手を打つと、愛想良く顔を出した女中に何やらヒソヒソ耳打ちし、しばし待つ。

再び現れた女中が手にしていたものはサイコロ2つと湯のみが一個。何をするのだろう？と訝いぶかる茉莉にニコツと笑いかけ、右手にサイコロ、左手に湯のみを持ち、エイや！とばかりにサイコロを振った。カラコロカラン。サイコロは涼しげな音を出してすっぽりと湯のみの収まった。

「名づけてチンチロリン！」

昔取った何とやらで、数馬の振ったサイコロは湯のみを外すと2つとも1の目を出していた。そんな芸当？を一度も見た事がなかった茉莉は大喜び。それから何度もやってくれとせがみ、ついには自分でやってみたいと言ひ出した。その頃はさっきの緊張感はどこへやら、2人はすっかり打ち解けていた。

夕食もその延長で、数馬の若い頃の話が茉莉にはとても新鮮だったらしく、鈴のような笑い声が部屋から漏れていた。だがそれも風呂に入るまでの事。一足先に風呂に入った数馬が寝巻きに着替えて部屋に戻ると、茉莉はまた部屋の隅に固くなつて座っていた。何故だろう、と思ふと傍らを見ると、二組の布団が並べて敷いてある。ああ、なるほど。と無言のまま布団を離し置いてあつた衝立をその間に置いた。

「これなら良からう？俺はもう寝るからあなたも風呂に入ってくる
といい。」

「いいえ。わたくしはこのまま休ませていただきます。」

「着物を着たまま寝ると言うのか？ハア・・・何度も言わせないで貰いたいな。これからずつとそうして旅をするわけにはいかんだ。帯を解くのは良人の前。という気持ちは解かるがそういう女子に手を出すような気持ちは微塵もないから、寝るときはちゃんと着替えてくれないか。」

そう言うなり数馬は一方の布団に入り怒つたように寝てしまった。

1人残された茉莉はホウツとため息をつくとしばらく悩んでいた様子だったが、女中が用意してくれた手ぬぐいを持つと心細そうに廊下に出た。その一部始終を身体で感じていた数馬は（勿論ハナから寝てなどいなかったのだが）痛いけな後姿に助けてやりたい衝動に駆られた。だがここで助けては茉莉のためにならないと心を鬼にしてじつとしていた。それでも気になるのか、そつと布団を抜け出し後をつけた。

初め、所在なげに廊下を2、3度往復していた茉莉だったが、部屋付きの女中を見つけると、『もし』と声をかけた。ひと言二言何かを聞いているふうだったが、自分の行く方向を示されると丁寧に御礼を言つて立ち去った。女中が不満げに見送つたので、数馬は茉莉に気取られないよう女中に近づき小銭を握らせた。

「うちの奥方は世間知らずですまんな。」

ひと言付け加えると、ただでさえ数馬の顔を見てボーっとなつてい
る女中は、尚更ボーっとなつてしまった。その女中をそのままに更
に茉莉の後をつけると何とか風呂場にたどり着いた。ひとまず安心
と一旦は部屋に戻ろうかとも考えた数馬だったが、帰りがまた心配
と結局茉莉が風呂から上がったてくるまでじつと陰に潜んで待つてい
た。

それほど長風呂というわけでもなかったが、数馬はすっかり湯
冷めしてしまい、このままじゃいかん！とまた湯船に入った。

いい気分で部屋に戻ると既に茉莉は戻っており、1人小袖を涙で濡
らしていた。驚いてその理由を訊ねると、どうやら数馬に置き去り
にされたと思い込み途方に暮れていたのだそうだった。

「いや、すまぬことをした。少々今宵は冷えるとみえて寒くなつて
きたものだから、また風呂に入りに行つていたのだ。決してそなた
を困らせようとしたのではない。申し訳なかった。」

茉莉の身が心配でしたことが却つてアダになつてしまい、数馬は畳
に頭を擦り付けるようにして謝つた。ところがそれを見た茉莉は逆
に驚いてしまった。生まれてこの方、殿方に土下座されたことなど
なかったからだ。

「風太郎様！面を上げてくださいませ！わたくしが勝手に思い込ん
でしまったのです。わたくしの方こそ謝らなければなりませんのに
！」

オロオロする茉莉を見て、素晴らしく魅力的な笑顔を見せた数馬は
（当人は全く気付いていないのだ）

「じゃあ悪者同士、布団に入りましょう。勿論布団はこのまま離し
ておいてその間に某の着物をこうして掛ければ安心してあなたも眠
れるでしょう。それではお休み。」

と今度は本当に寝てしまった。

残された茉莉は布団に入ったものの、昨日からの自分の思い切った
行動や、隣でスヤスヤと寝入っている風太郎という一風変わった、

しかし何故か安心できる男のことを考えながらじつとしていると、旅の疲れも手伝って、いつしか深い眠りに落ちていた。

騒動

明け六つの鐘が鳴って間もない頃、日下部家では娘の茉莉の姿が見えないと大騒ぎになっていた。現当主は茉莉の父である日下部主水^{もんど}であるが、いずれは嫡子である宗太郎が継ぐことになっていた。茉莉と兄宗太郎は3歳違いで年が近いこともあり、とても仲の良い兄妹であった。にもかかわらず、宗太郎には茉莉の不在の理由が全くわからなかった。心配事があるとどんな些細な事でも相談に乗っていたのに！その身を案ずるよりも怒りで身体中が震えていた。茉莉付きの侍女数名に自ら詰問したが、全員昨晚、夕餉の膳以降茉莉の姿を見た者はおらず、その声さえも聞いた者はいなかった。それを誰も不思議に感じなかったのは、最近の茉莉の様子からすれば致し方ないことのように思えた。縁談が持ち上がったからの茉莉は笑顔を見せなくなり、妙に塞ぎこむことが多くなって食事の時以外は部屋に籠ったきり外に出なくなっていた。ただ侍女の1人のお路^{みち}という娘が部屋の中で着物を脱いだり着たりしているところを、また別の侍女お牧^{まき}が草鞋のようなものを一心に履いている姿を見た、と証言した。そういったところから判断すると、茉莉は何らかの理由で自ら屋敷を抜け出したのではないか、ということが推測された。ただ外に出たことのない茉莉が自分の行きたい方角を知っていたとは考えられないので、やはり誰かが手引きしたと宗太郎は判断した。一体誰が？！

自ら搜索に乗り出した宗太郎が頭脳を最大限に回転させ得た結果は、

・元、日下部家に仕えていた稲の存在だった。だがもしそうなら正々堂々と連れて行けるはず。隠れる必要などないのだ。それでは稲ではないのか？・・・ただ茉莉のことだから最後は稲に頼らざるを得ないのではないか、と宗太郎はとにかく稲の住む庵に向かう事に決めた。

稲（２）

大の男達が本気で馬を駆けさせたのだから、瞬く間に宗太郎を隊長とする茉莉搜索隊１０名は日暮里にある稲の庵に着いた。

予想はしていたものの、徒党を組んで雪崩込むように入ってきた男達を見た稲は、腰を抜かしそうになった。だが宗太郎と茉莉を育て上げた経験から動揺は表に出さず、堂々と宗太郎と向かい合った。

「若様。これは一体どうしたことでございます？」

「い・稲！茉莉を匿っているだろう！すぐこれへ出せ！」

自分を育てた、云わば母親のような存在の稲に睨まれ宗太郎は威圧するように声を荒げた。

「若様。何を仰っているのかこの婆ははには分りませぬ。お嬢様がどうなさったのです？」

「姿が見えぬのだ。かどわかしに遭ったとも思えぬ節があるゆえ、もしかしたらと思いここに参ったのだが・・・」

シラを切っているとも知らず宗太郎は途端に元気がなくなった。

「それではお嬢様がご自分で外に出られたと仰るのですね？で、供の者は？」

「それが誰も知らぬのだ。

ただここへ来るまでの道を茉莉

が覚えていとも思えん。きつと誰かが手引きをしたとしか考えられぬ。のお稲。そなた何か心当たりがないか？縁談も進んでおるにお奉行に何と申し開きすれば良いか・・・」

「若様。その件につき、少々お尋ねしたい事がございます。」

稲は居住まいを正し、宗太郎にも落ち着くよう言った。供の者にはひやく労いの意味も込め、熱い酒を振舞った。

縁談

「さて、若様。お嬢様の縁談と申されるのは如何いかなお話なのでございますか？さきほどお奉行と仰いましたが、勘定奉行、千葉帯刀様からのお話なのですか？」

「ああ。父上が直接拝聴した。」

日下部家の当主である主水もんどは、勘定吟味役に就いており、その嫡子宗太郎も同じく勘定奉行所に出仕していた。何事もんどもなければ主水が引退すれば宗太郎が吟味役になるはずだった。ところがその千葉からの薦めである茉莉の縁談が破綻しようものなら、その暗黙の約定も危きつくなりかねない。それゆえ父と息子は茉莉の失踪に驚き怒り、その行方を躍起になって捜さなければならぬのだ。

「で、お相手の方は？」

「うむ。お奉行の話だと今は部屋住みの身なれど、現当主が病弱なためいずれはその後を継ぐだろうといわれているお人らしい。」

「してそのお方の名は？」

「お目付け楠木静馬殿のご舎弟、数馬殿と申される。」

「お目付け殿でございますか。してそのお方の評判は？」

「儂もいろいろ当たってみたのだが、悪い噂はとんと聞かんだ。北辰一刀流皆伝、昌平坂学問所でも羽がらすを黙らせることのできる唯一の人物らしい。しかも眉目秀麗にして大目付様の誉れ高く、それを鼻にかけることもせず、気さくで義に溢れているとの評判だ。」

眉目秀麗という言葉は、稲の脳裏に富良風太郎を思い出させた。だがまさかそのような筈はない。いくらなんでもそんな偶然……しかしあの名前はいかに偽名だったし……それにあの気品と態度は到底一介の素浪人とは思えない。もしあのお方が楠木数馬様なら、茉莉は要らぬ人捜しに出かけたものではあるまいか。あのお方なら安心して茉莉を任せる事ができる。稲は長年の勘からあの男……富

良風太郎と楠木数馬を同一人物と決め付けた。こうなるとそうあつて欲しい、がそうに決まっている！そうだ！という風に断定してしまうのが世の年寄りの常なのであるうか？稲も例外ではなかった。楠木様とご一緒なら何もかも安心、とホツと胸を撫で下ろした。

「稲。何か知っておるな？！」

心の動揺を見透かしたかのように宗太郎の目が光った。

川越まで

朝、六つ半に目を覚ました茉莉が風太郎の不在に気付いたのはしばらく経ってからであつた。荷物は置いてあるのできつと戻つて来る、と朝餉^{あさけ}も食べずに待つていたのだ。

やつと戻つて来たと思つたらすぐ出立するという。帳場での清算は既に済んでおり、何やら包みを受け取ると茉莉をせきたてるように宿を出た。何も話さずじつと考え込みながら歩く後姿を見つめながら茉莉もまた黙つてその後を歩いていた。

どの位歩いたろうか、茶店の幟^{のぼり}が見えたところで数馬が急に振り返り、極上の笑顔で話しかけてきた。

「あそこで一休みいたしましょう。」

ずっと黙つたままひたすら歩き続けていたので、茉莉の足は昨日の疲れも加わつて相当参つていた。数馬の申し出は天から仏の言葉だつたのだが、あまりにも突然だつたため驚きを隠せない茉莉だ。

縁台に腰掛け、茶とだんごを2つずつ頼むと数馬は朝、宿屋の帳場から渡された包みを広げた。中味は何なのだろう、とずつと気になつていた茉莉だつたが、聞くに聞けず好奇の眼差しでじつと数馬の手を見ていた。

広げた瞬間再び極上の笑顔。茶店の娘がポーツとなつてお盆を落としたのも頷けた。数馬がその包みに手を伸ばし取つたものは……真つ白な握り飯であつた。

「朝飯はまだだったのでしょう？これを食べなさい。実は俺も腹ペコだつたんだ。さつきからずつと茶店を探していたんだが、随分遠くまで来てしまった。さあ、食おう！」

言うが早いか、数馬は握り飯をパクパク。だんごをペロリ。茉莉が飯を残すと見るやそれも平らげてしまった。背も高いし（本人は5尺9寸と言っているが<約177cm>）茉莉は肩を並べてみて兄

宗太郎よりも大きいのではないか？と思った。兄は5尺8寸だから実寸風太郎は6尺はゆうに超すだろうと思われた。その身体を維持するのだからこの食欲も頷ける。それにしても・

「風太郎様。もしや今朝からの不機嫌は？」

「え？某不機嫌それがしでしたか？！ ああ、それはすまぬことをいたしました！決してそういう訳ではなく・・腹が空いて仕方がなかったのです！」

目の前で拝まれるように謝られたのではどんな悪さをしても許してしまうだろう、と茉莉は思った。

「そうだったのですか・・」

安心したのか茉莉の目には薄っすらと涙が光った。と、少し離れた所に座っていたやくざ風の男が笑いながら声をかけてきた。

「旦那。今朝の事も言っちゃった方が良くねえですかい？」

見かけは悪いが何やら風太郎とは顔馴染みらしい。（無論糸八であることは言うまでもないが、まだ茉莉はその存在を知らなかった。）

「うん？ああ、そうだな。」

朝、今朝の話なんだが、俺と糸

あ、まだ言ってなかったな。この男は糸八といって俺の、まあ友達なんだ。この糸八と今日向かう川越の在所について調べてきたんだが、最近そこら辺りで百姓を先導して一揆を起こそうとしている輩やからがいるという話を小耳に挟んでね。噂の真偽を確認しようと思つとばかし足を伸ばしすぎて旅籠はたこに戻るのが遅くなって、あんたに心配かけてしまった。朝いなかったのはそういうことだったんだ。」

「一揆？そのような恐ろしい事が？・・」

「最近あちこちで聞くぞ。御老中の改革も一部の人間のみで、民百姓の窮地を救うまでにはならなかったとみえる。」

茉莉から貰っただんごを頬張りながらポツリと付け加えた。

後世に名高い松平定信が行なった寛政の改革も実際は失敗だった。天明の大飢饉後、田沼憲政を引き継いだ彼は、政策的には享保の改革同様農業中心とそれに伴う農村維持。田沼時代の運上金、並びに冥加金みょうがきんの廃止。南鐐二朱銀の徹底化などを行なった。しかし思

い切った節約を強いたためにかえって事態を悪化させた。実際は失敗だったのにあたかも成功したかのように取り沙汰されているのは、ひとえに老中としての定信より人間松平定信としての評価であろう。ゆえに評価は改革そのものと勘違いされてしまったことだ。加えて定信が八代將軍吉宗の孫であったこともその理由の1つに相違ない。

話を元に戻そう。茉莉の失踪で大騒ぎになっているとは全く知らない数馬たちは、茶店を出るとのんびりと北へ向かった。今度は時折笑い声を交えながら。

川越宿

2人と1人。謂わずと知れた数馬、茉莉、少し離れて糸八が予定より少し遅れて川越に着いたのは暮れ六つの頃だった。さすが江戸から離れた田舎で、胡散臭いのやら浪人やらがそんじょそこらでたむろしていた。3人が宿場町にかかるうとしたとき、2、3人の百姓が血相を変えて数馬たちの脇を駆け抜けていった。すかさず糸八がその後を追う。いつものことながら糸八の行動力には感心させられる。きつと何らかの情報をもたらしてくれるに違いないと期待し、一馬は今夜の宿を探すことに専念することにした。

運よく2件目で人の良さそうな主人のやっている宿に2人は草鞋を脱いだ。昨日、今日と歩き通しだったので茉莉は足が痛そうだった。どれ、揉んでやろうと数馬は着物の上から丁寧に揉み解ほくしてやった。さすがに素足に触れることは憚はばられたからだ。男といえは父と兄しか知らない茉莉にとって数馬の行動がいちいち目新しく感動的であった。増してすこぶる美男子なのだ。天は二物を与えないとか、色男金と力はなかりけり。などという言葉はこの風太郎という不思議な魅力を持つ男には存在しないように思えた。

数馬の按摩は上手くツボを押さえていたので茉莉の足はすっかり良くなり、夕餉ゆづけが終わり風呂から上がった頃には痛みは全くといっていいほどなくなっていた。昨晚と同じく布団を離して仕切りを作つてやると、「お休みなさいませ。」と茉莉のほうが先にスヤスヤと寝てしまった。ようやく信用されたか、とホッとため息をつくとき、障子の向こうに人影が見えた。

「糸か、入れ。」

茉莉を起こさないように声の調子を落とす。

「へい。」

音もなく障子が開き、すっと糸八が滑り込んできた。

先導者

「首尾は？」

「あの百姓達は高田という名の庄屋に入って行きやして、その主と見られる男と一揆の相談を始めやした。」

「一揆？お前一体何を聞いてきたんだ？」

ニヤツと笑いながら数馬は糸八の顔を見た。

「ちいつとばかり昔の癖が役に立っただんでさあ。いや、そんなことよりね、旦那。その庄屋にや江戸から来たっていう侍くずれの浪人がおりやして、どうもそいつがこっちの方の指導をしているようなんで。」

と糸八は刀で切る真似をした。

「ふうむ。で、そいつの身元は分ったのか？」

「百姓達は先生とか呼んでいましたが、主の高田孫兵衛は天宮さんと呼んでおりやした。」

「なに？天宮？本当にそう言ったのか！してそやつ風体は！」

天宮といえば茉莉の尋ね人、天宮新之介ではなからうか！

「へえええ！だんなあ！そんなに怖え顔しないでおくんなせえ！役者ばりの顔で怒られると一層怖ええや。」

「ああすまぬ。して人相風体は？」

「へえ。年の頃なら22〜3。旦那よりちつとばかり劣るが、なかなかの二枚目でござんした。何より目元が涼やかなのが印象的でした。」

「糸。その天宮という男に渡りをつけてくれぬか？何としても逢うてみたい。」

「へ？何を仰るんで。今からじゃ遅いですぜ。明日も早立ちなさるんじゃ。」

「いや。ひょっとしたらここで用が足りるやもしれぬのだ。お前のことだ。既に百姓の2〜3人と顔なじみになっただろう？」

「へえ、お察しの通りで。よそ者には気を緩ゆるさねえ百姓も酒の力に
やかなわねえ。ちつとばかり振舞つてやったらいろんな事をしゃべ
つてくれやした。ようがす。明日の朝その天宮つてえ浪人に会える
よう算段して来まさあ。じゃあつしはこれで。ごめんなすつて。」
と再び音も立てず障子を閉め、糸八は出て行つた。

（うつむ。これは容易ならぬ事態になるやもしれぬ。）もしその男
が新之介だったとすれば、たとえ死んだとして扱われている身であ
つても勘当されたわけではないし、生きていることが分つたら当然
雨宮家はただでは済まないだろう。増して一揆の首謀者ということ
で断罪にでもなれば、雨宮家の取り潰しは免れまい。ただでさえ幕
府の財政は困窮しているのだ。問題のある旗本は即刻処分されるに
違いない。それは幕府の格好の理由になりうることだった。これは
何としても未然に阻止しなければならぬ。もしそれが無理であれ
ば、新之介が関わつたという事実だけでも抹消しなければならぬ。
いずれにしても糸八の報告次第ということになりそうだ。数馬はそ
の人物が茉莉の捜し求める新之介ではないことを願つた。

謎の行動

じつと糸八の帰りを待っていた数馬は、朝になったことにも気付かず茉莉の声で我に返った。

「ああ、朝か。おはよう、茉莉さん。」

まず朝の挨拶をしてから改たまった顔をした。

「早速なんだが、今日の予定を変更させてもらいたいんだ。野暮用ができてね。今日は一日この旅籠はたごで休む事にしよう。あんたも2日間歩き通しだったから足が棒のようになってるだろう。急で悪いがそうしてくれ。どれ、俺はひとつ風呂浴びてくるから、もし糸八が来たなら待たしておいてくれ。」

そう言い残すと数馬は手ぬぐいを肩に掛け、部屋から出て行った。残された茉莉は驚いたものの確かに数馬の言う通り足が棒のようになっていたので、一日でも休めるというのは心底ありがたかった。でも何故急に予定を変更したのだろう？昨夜自分が床に入るまではそのような素振りさえ見せなかったのに。その後何かが起きたのだ。それに風太郎は床に入った形跡が全くなく、じつと座ったまま何かを考えていたようだった。

ほどなく糸八を伴って数馬が戻って来た。だが何やら急いでいる様子。そそくさと着替えると茉莉に向かってちよつと出かけて来るから自分が戻って来るまでは決して外に出ないように、と言い残し再び糸八と共に出て行った。もとより東西南北の分らない茉莉には、仮に好きなどころに出て行っても構わないと言われても、ただじつと部屋で待つつもりでいた。ともかく糸八という時の風太郎の行動は謎だらけである。

対面

「して・・会えるのか、その人物に？」

歩きながら数馬は口を開いた。

「抜かりはありやせん。そのお人はこれから為吉つてえ百姓の家に
行く事になってるつてんでそこで待たせてもらう事になってやす。

為吉には旦那のことは天宮さんの友達だと言ってありやすから、そ
のつもりでいておくんさい。あ、こつちです。」

糸八に案内されながら数馬は田んぼの畦道あぜみちのような道を通り抜け、
あばら家のような家の前に立った。

「ごめんよ。」

気安く声をかけて中に入る糸八の後に続いて入って行った数馬の顔
を見た為吉夫婦は、驚いて腰を抜かしてしまった。役者絵から抜け
出してきたような男が入ってきたからだった。

「あ・あああ。」

言葉も出ない。

「旦那。旦那も罪なお人だねえ。あつしやあもう慣れっこになつて
いるから何とも思わねえんだが、初めて旦那を見る者にとつちやあ
天と地がひっくり返るような心持に違えねえ。」

「糸。こればかりは俺の責任じゃねえ。．．．ところで為吉と
いったな。俺ア天宮さんの江戸時代の友達なんだが、天宮さんは本
当にこれからここに来るんだな？」

「あ・ああ。」

言葉の出ない2人はただ頷くばかり。

「ちつと待たせて貰うぜ。」

そう言つと大小を脇に置き、上がり框かまちの腰掛た。身振りで上がれと
いう為吉夫婦に、天宮が来たならすぐ外に出るからそのまま世間
話を始めた。一揆の事とか米の出来具合とかの話は一切せず、この
機械はどう使うんだ？とか、これは何だ？とか、家の中にあるもの

を話題にするので為吉夫婦もすぐ打ち解けてしまった。条八は数馬のそんな気さくな所がむしろように好きだった。鍋木家の次期当主になられるお方なのに気取ったところがこれっぽかしもねえ。俺ア旦那がいらねえと言っても死ぬまでくつついているぞ。と変な感傷に浸っていると、

「おはよう。」

の声と共に1人の男が入ってきた。

「先生！おはようございます。あの・・・先生の・・・」

と為吉が言い終わらないうちに数馬が2人の間に立ちはだかり、「
久しいのお。」と言いながらその男を連れて外に出た。

新之介の事情

始めはなすがままにされていたその男も、為吉の家から少し離れるとさつと身を翻し、敵意を露わにした。

「なにやつ！」

「俺は風来坊の富良風太郎。あんたは天宮新之介殿でござろう？」

「きさまっ！なにゆえ拙者の名を！」

「わけあつてあんたを捜して宇都宮までいくところだった。」

「わけ？なんだ！」

「ああ。あんた。茉莉という娘御を知っているだろう？」

「茉莉？」

突然懐かしい名前を出され、敵意の表情は消えたものの相変わらず手は刀の柄を握ったままだ。

「その茉莉殿があんたを捜してこの宿場に来ている。行きがかり上俺がここまで連れてきたが、あんたがその娘を引き取ってくれるならお役ご免で俺はこのまま江戸へ戻ろうと考えている。どうだね？」

「茉莉殿がここへ。なにゆえ？」

驚く新之介に数馬は事の仔細を語った。話が終わると新之介は肩を落とし、自分のこれまでの5年間を語り始めた。

確かに茉莉とは許婚の仲であったこと。これは茉莉が日下部家の娘として生を受けたときに父と茉莉の父である主水もんどとの間で決められた事で、5年前までは自分もそうなると思っていた。ところがその頃行なわれた御前試合である男に負けたことがきっかけとなり武者修行に出る決意をした。その後、各地を放浪するうちに宇都宮にたどり着いた。そこで世話になった庄屋の主から川越の友人を助けて欲しいと懇願され、1年前にこの地に来た。百姓達の話聞くうち、成り行きから武器の使い方や手習いなどを教えるようになった、ということだった。

御前試合……その言葉にふと数馬は思い当たることがあつ

た。そうだ。あれは確か5年前・・・若気の至りで道場の仲間と賭けをして遊び半分でその試合に出場。あっさり優勝してしまったのだ。そういえば決勝の相手はまだ十代の若者だった。あの時は自分の正体がバレるのを恐れ、終始覆面をして出場していた・・・その時の相手が目の前にいる男だったのか・・・

図らずも茉莉の現在の境遇を作ってしまった原因が自分にあつたことは何とも不思議な因縁・・・と驚きと同時に罪深いことをしたなと思わざるを得なかった。

「それでは茉莉殿のこと、引き受けて貰えるかな？」

その思惑を全く見せず数馬は聞いた。ところが新之介の顔が急に曇った。

「いや。それが・・・富良殿と申されましたな。こうなったのも何かのご縁。話を聞いてください。」

と新之介が言うには、

1年前から世話になっているこの庄屋、高田孫兵衛には可奈という娘があり、自分は当初から可奈に身の回りの面倒を見てもらっていた。するとどちらからともなく自然にそういう間柄になった。もう少ししたら赤ん坊も生まれるので、これを機会にさっぱり侍を捨て、町人になろうと決めたのだ、ということだった。更に手数料をかけて申し訳ないが、茉莉をこのまま江戸に連れて帰って新しい相手と一日も早く祝言を挙げて幸せになつて貰いたい旨、伝えて欲しいと頼まれてしまった。

一揆の首謀者は？

「何を言われる！それでは茉莉殿の一念はどうなるのだ！あんたを想つて深窓のお嬢様が家出をしてまでここに来たんだ。それはただあんたに会いたい、会つて話を聞きたい。それだけだったのに！それにそんな大事な事は俺の口から言えない。ちゃんと会つてご自分の口から説明して貰いたい！」

「・・・それは出来ない。」

「なぜだ！」

「私には今が大事な時だからです。」

「一揆の事か。」

「なぜそれを！」

一度は気を許しかけた新之介であつたが、数馬の言葉に再び形相が変わつた。

「落ち着け。あんた、侍を捨てると言つたが、あんたの所業如何ではお家を取り潰されることもあるということを知つておいた方が良いのではないか。一揆の片棒を担いでいるとなれば、たとえ死んだとされる身であつてもあんたの父上はただでは済まん。実は生きていたのだから。それを考えたことがあるか？家来もいるだろう。彼等には家族もあるだろう。その者達をいっぺんに路頭に迷わせることになるのだぞ。」

数馬の説得に一瞬怯んだものの、突然新之介は刀を振りかざした。そういうこともあるうかと気を配っていた数馬は、その切っ先を余裕をもつてかわし、側に落ちていた棒切れを取ると正眼に構えた。その構えを見た新之介は、あ！と小さく声をあげ「あの時の！」と叫んだ。

「しまった！」

数馬の後悔先に立たず。ばれてしまった。

「おのれ！一度ならず二度までも！」

刀を振り数馬目がけて突進する新之介。

「ばか者！5年前の腕をそのまま持ち続けていたならいざ知らず、今のおぬしの腕では俺には絶対勝てないぞ！」

持っていた棒切れで新之介の小手を取ると、刀を落とされた新之介はガクツと膝を折った。

「……良いか新之介。おぬしは一揆の片棒を担いではいけない。むしろ血気に逸る者達を止める側にならねばならぬ。これからその娘御と本気で夫婦になる心積もりがあるのなら尚更だ。」

いつの間にか新之介を実の兄弟のように思えてきた数馬は、教え、諭すような口調になっていた。だが対峙している新之介にしてみれば、憎き相手。黙って左様か、というわけにはいかない。数馬の隙を付き、サツと落ちた刀を取ると再び切りかかってきた。だがその實力は前述の通り。数馬の足元にも及ばなかった。

「たわけ！ぬしは一個の勘定に囚われて多くの百姓を犠牲にするつもりか！俺への恨みは機会を改めろ！さすればいつでも相手になつてやる。だが今はおぬしの行動によってどれだけの民が命を落とし、実家にどれだけの損害を与えるか熟慮してみるのだ！俺

は決して逃げはしない。落ち着いたら『つるや』という旅籠に来てくれ。但し、その時は茉莉殿と対面するという気持ちで来て欲しい。

「
そう言つて立ち去ろうとした数馬に新之介が叫んだ。

「貴様の名前は！」

「俺か。そういえばあの試合では名無権座衛門と名乗ったんだ。悪かったな。そのせいでおぬしはこんな風になつてしまった。茉莉殿しかりだ。俺の名前は嫡木数馬。覚えておいてくれ。」

背中を向けたまま答えると、2、3歩歩きかけたが、あつ！と何かを思い出したらしく、新之介に向かってあの満面の笑みを見せ、改めて口止めをした。

「すまんが茉莉殿には俺の正体を言わんでくれ。俺の名前は富良風太郎。頼むよ！」

まだ敵愾心をむき出しにしている新之介の肩をポンポンと叩く真似をして数馬は立ち去った。

言い訳

旅籠^{はたし}に戻る途中数馬は糸八に日下部家の情報を探って来るよう命じた。黙って1人娘が行方知れずになったのだから、何か事件^{こと}が起きているだろうと踏んだからだ。もちろん本家に行っても門は閉ざしたままだろうから、稲の元へ行くよう付け加えた。稲は糸八の存在を知らぬはずだからと懷紙に一筆したためそれを持たせた。

1人『つるや』に戻ると、部屋から複数の楽しそうな声が聞こえてきた。何だろうと障子を開けると、茉莉が女中相手にチンチロリンをやっていた。それが賭け事とは知らない茉莉は、何度もやって見せていた。女中達も単にお遊び程度でやっていたようで、数馬はホツと胸を撫で下ろした。(これからはきちんと教えなければならぬ。)そう思いつつ・・・

「おかえりなさいませ。」

きちんと三つ指をついて挨拶する茉莉に、これ幸いとばかりに女中達はそそくさと出て行った。

「うむ。　　食事は？」

「はい。先程頂きました。」

「そうか。それでいい。ところで今は何をしていたんだい？」

数馬の質問に茉莉は可愛らしい笑顔を見せて、

「風太郎様に教えていただきましたチンチロリンをお秋さんとおきみさんとやっておりました。2人ともとても喜んでくれました。」

嬉しそうに語る茉莉を見てとても叱る気になれなかったが、言うべきことは言わねばならぬ。

「茉莉さん。いいか。これだけは覚えておいてくれ。あんたがやっていた遊びは庶民が手軽に出来る賭け事なんだ。あの女中達はあるが何も知らないお姫様だから黙って相手をしていたようだが、本来は金子^{きんず}を賭けてやるもの。簡単にやろう、などと誘ってはいいけな

い。分ったかね？」

「まあ！わたくしとんでもない事を！

申し訳ございませぬ。

ああ！あの2人に何とお詫びしたら良いのでしょうか！」

オロオロする茉莉に対し、数馬はとても優しい気持ちになった。

「あんたって人は・・・本当に優しいんだな。何にしても分れば結構。女中達と仲良くなるのは良い事だから、いろいろ話をしてみるといい。どの位になるか分らんが、しばらくここに逗留することになるから、退屈しのぎになるかも知れぬ。」

「逗留？なにゆえでございます？」

途端に茉莉の態度が強張り、数馬に詰め寄った。

「なにゆえ？あんたは気にならんのか？黙って出てきたあんたを捜してご実家の父上や兄上がどうしているかということ。俺は家に断って出て来たし、男だから少々留守にしても特にどうということはないが、あんたは女だ。増して武家娘が黙って家を出て来たとなれば、ただでは済むまい？今頃は血眼になって捜しているのではないのか？　そう考えて糸八を稲さんの処ところに使いに出したんだ。

だから糸八が戻って来るまでここに逗留しようと思う。」

糸八を使いに出した事は本当の話なのでそう言ったが、それもいつまでの時間稼ぎになるのやら。だがそんな不安も茉莉には汲み取れないほど数馬の言葉は自信たっぷりだった。

茉莉もそう言われればもつともな話なのでしぶしながら承知した。

「そうと決まったら俺はこの宿場を歩いてみようと思う。あんたも何かした方がいい。俺と一緒にでは目立ってしまうし、怪しげな連中がいるから、外に出るのは控えた方が賢明だ。」

茉莉が目立つ、というのは的を得た言葉だったが、新之介が茉莉と一緒にしないと断言した今、数馬はむしろに茉莉を他人の目に触れさせたくはなかった。

「はい。お秋さん達にお針を教えて欲しいと頼まれましたので、早速そのようにいたします。」

茉莉には数馬の葛藤が分らない。素直にその言葉に従った。

「ならばそうしなさい。俺はちょっと出かけてくる。もし客人があったならこちらから会いに行くからと所在を聞いておいてくれ。あ、決してあんた1人で対面してはいけない。追っ手かも知れんからな。」

「はい。」

その返事に満足し数馬は宿を出た。目的は一揆の阻止である。

稲の心

数馬の書状を携えた糸八が稲の庵に着いたのは翌日のことだった。自分は富良風太郎の使者である旨を伝えると、いかにも長年武家屋敷に仕えました。といった風体の老婆が現れた。

「糸八と言いましたね？」

「へい。」

「富良様からの書状を持っていると聞きましたが。」

「あなた様がお稲さまで？」

「そうです。」

「富良の旦那から稲というお方へ直接手渡すように言いつけられましたのでご無礼いたしやした。へい。富良の旦那からこの書状を預かって参りやした。」

稲と名乗る老婆は糸八の出した紙をサツと取って一読すると、さっきまでの怖そうな態度からは想像できないほど優しくなり、糸八に上がって休むように命じた。返事があるから持つて行って欲しいということらしいが、常日頃そんな扱いを受けた事がない糸八は、女中や下男のもてなしに心なしに落ち着かない様子だ。

半時ほど待ったろうか。稲が手紙と風呂敷包みを糸八の眼前に差し出した。

「糸八さん。これを富良様へ渡して下さい。こちらの包みは逗留するに見合うだけの金子きんすです。もし不足ならばまたあなたを使いに寄こして頂ければいかようにもご用立ていたしますとお伝え下さい。」
稲は詳しい説明はしなかったが、数馬の走り書きをとて喜んでくれるように見えた。糸八は早くその場を立ち去りたくてうずうずしていたので、手紙と包みを受け取ると挨拶もそこそこに庵を後にした。その後姿を見送った稲の目にうつすらと涙が光っていたのを見た者はいなかった。

宗太郎の災難

同じ頃。日下部家では茉莉の行方を追って稲の元へ駆けつけたものの、何の収穫も得られず無駄足を踏み意気消沈して戻った宗太郎が、父、主水もんどから小言を言われていた。お前の監督不行き届きだとか、注意が足りないとか、果ては次期当主としての手腕まで問われる始末でさんざんな目に遭っていた。しかしどう言われようが全く心当たりのない宗太郎には全く返す言葉もなく、ただ両こぶしに力を込め悔しそうに頭こづを垂れるしかないが、また、勘定奉行から見合いの日時を、更に年を重ねるにつけ気が短くなっている奉行は、婚礼の日をも決めたいらしく、主水もんどの背中を始終せつついていた。それゆえ主水もんどにしてみれば娘の不明を嫡男の宗太郎のせいにしてしまうのも仕方のないことであつた。「稲も稲だ。主家が大変な目にあっているのに何の音沙汰もなく、宗太郎のみを帰して寄こすとは！」と、主水もんどの怒りは宗太郎だけに留まらず、隠居し別宅に居を構える乳母の態度にも及んでいた。それでも宗太郎にとって茉莉は幼少の頃から何でも打ち明けて話し合ってきた2人きりの兄妹である。その妹が自分にひと言の断りもなく家を出たのは裏切り行為としか取りようがない。まして父からは間無しの小言三昧。可愛さあまつて憎さ100倍。こうなったら茉莉が戻ってきたならきつと叱りつけ、必要なら殴つてでも言う事を聞かせた上で、しばらく座敷牢に入れた後有無を言わさず鍋木家へ輿入れさせてやる！と心に誓うのであつた。

ある思惑

（多くの民百姓が犠牲になるんだぞ。それに可奈という娘と一緒にになりたければ、茉莉殿のことをはつきりさせなければいけない。）数馬の言葉が新之介の耳元から離れない。自分は元よりどうなっても構わない。しかし数馬の言う通り一揆を起せば罪もない百姓やその家族が巻き添えを食う。それから父、新太郎の顔を思い浮かべた。自分がいなくなってから苦勞をかけたと思う。その父に追い討ちをかけるように更に辛い思いをさせてしまう。・・・数馬に諭されて新之介は何のための一揆なのか、と目標を失いかけていた。天明の大飢饉以降百姓達の口にするものといえば、水とほんの一握りだけの食料だけ。それもひえや粟を食える者はまだ良い方だった。大概の者達は雑草や木の根などを食していたのだ。口減らしに生まれたばかりの赤ん坊は殺され、年頃の娘を持った両親は娘をビタ銭程度の金で女衞せけんに売り飛ばす。しかしそれでも尚、餓死者は後を絶たなかった。そういう現実を目の当たりにしてきた自分だったからこそ、百姓達の先頭に立って武芸指南をしてきたのではないか。それを今更やめろ、と言われて引き下がるか！と勇気を奮い立たせた。・・・すると今度は可奈のふつくらした顔が浮かんだ。何も知らず身重の身体でやもめの父と自分の世話をしているのだ。その可奈の泣き顔は見たくない。ああ！俺は一体どうすればいいんだ！！

（ここは？・・・何故ここに来てしまったんだろう。）ふと我に返って立ち止まると、数馬の宿泊所である『つるや』の前に立っていた。ちよつとためらった後、暖簾を割って入って行くと、新之介の顔を知っている主がにこにこ顔で出て来た。

「おや、先生。今日は一体どのようなことで？」

「こちらに富良風太郎という旅の侍が宿泊していると聞いたんだが。」

「あ、んれマア！あのお2人と先生はお知り合いかの？」

あの2人とは数馬と茉莉のことに違いない。

「そうだ。」

「ンだども、旦那様の方はさつき出かけられたです。奥様はうちの女中共にお針を教えてくださるちゅうんで残っておられるがの。いやあ、大した奥様だあね。どこかのお嬢様には違えねえのに、あつしらみてえな者にも気軽に声をかけてくださる。それに力カアには内緒ですが、えらい別嬪さんでなあ。あつしゃあ顔を拝むたんびにポーッとなってしまうです。もつともうちの力カアも旦那様のお顔を見るたんびポーッとなってますがね。」

顔馴染みという気軽さから、つい主の話し方も営業用ではなくなる。
「奥様？　そうか。」

数馬が旅をし易いよう夫婦と偽っているのだらうということはすぐわかった。でなければこのまま茉莉を自分の手元に残して帰るとは言わないだろう。

「では奥方お一人のところにお邪魔しては悪いな。ちと待たせて貰っても良いか？」

「へえ。んではこつちの方へどうぞ。」

と新之介は帳場へ通され、お茶代わりにと茶碗酒を振舞われた。

密談

一時ほどして数馬が『つるや』に戻って来た。そして新之介の顔を見ると、さも懐かしそうに声をかけた。

「ご亭主。勝手を申して済まぬが、部屋をちよつと貸しては貰えまいか。内々で新之介殿と話したいことがあるのだが。」

「部屋でございますか？へえ。ではこちらへ。」

2人は隅の部屋へ通された。狭いが内緒話するには絶好の空間だ。2人きりになるとまず新之介が口を開いた。相変わらずその目は怒っている。

「茉莉殿といつ夫婦になった！」

「気になるのか？」

数馬はその状況を楽しんでいる様子だ。

「そ・そういうわけではないが・・・恐らく旅をし易くするための偽りであろうと思った。」

「ふむ。そうではない。と言ったら？」

「どういう意味だ。」

「そういう意味だ。」

「おぬし！人を馬鹿にしておるのか！」

「おいおい。そんなに短腹では事を仕損じるぞ。別におぬしをからかうつもりなどない。どのみちおぬしには可奈さんという娘がいるのだから、茉莉殿が誰と夫婦になつても文句は言えまい？事実、茉莉殿には縁談があるのだからな。」

「相手が問題だ。あんたじゃ納得できない。」

「なぜ？」

「なぜって」

「新之介殿。いや、新之介。それは単なるヤキモチというものだ。俺がおぬしに試合で勝ったものだからその腹いせに自分のものだった茉莉殿を渡したくないだけなのだ。もっと現実に目を向ける。だ

がそんなに気になるなら教えてやろう。おぬしの睨んだとおり、俺と茉莉殿とは偽りの夫婦だ。まだ三日目の新婚だがな。はっはっはっは！」

そう言つて高笑いする数馬にふとつられて新之介も笑つてしまった。「おぬし、笑つた方がいい顔になるぞ。先刻のようなしかめ面では役人に捕えて下さいと言つているようなものだ。して決心はついたのか？」

「……あんたが指導者なら良かったかもしれない……」

「俺はおぬしのように強い人間ではないからな。家や家族が大事なんだ・とりわけ現当主の兄は身体が丈夫ではないから、今も訃報が届くのではないかと心配で仕方がない。だから卑怯者とののしられようともそういつた争い事に組しないと決めている。……それよりもこの辺りの情況は先刻見てきた。そしておぬしの言う正義も納得するものがあると感じた。だからこそ頭を使うのだ。やみくもに騒動を起こしても全員が捕縛されてみる。残つた者達は一層惨めな思いをする。年貢の取立てが今以上に厳しくなることは明白だからな。そうなつたらまた一揆を起こせばいいのか？そうではないだろう。そんな事を繰り返しても無駄骨を折るばかりだ。」

「ならどうすれば良いと言つのだ！」

「それよ。甘藷かんしょという植物を知っておるか？」

「甘藷？知らぬ。それがどうした！」

「まあ落ち着け。青木昆陽という人物が薩摩で栽培に成功したということで、薩摩芋さつまいもというそうだが、甘みがあつてなかなか美味しい。それをこの地で作つてみてはどうか？その御仁が出版して薩摩芋の栽培の条件というものを讀んだが、ここに合っているように思う。もちろん寒暖の差はあるだろうがな。」

「その薩摩芋というものはすぐできるのか？！出来んだろう！植物だものな！百姓は今、食うや食わずの貧困にあえいでいるのだ。そんなものを待つている余裕も時間もないくらいにな！」

「ではどうする？今食えないからと他の地の者達に呼応するかのよ

うに騒動を起こして結果は？首謀者はことごとく捕えられ断罪にな
っているではないか！今まで企てた計画が成功した村があつたか？
良いか新之介。長い目で世の中を捉えるのだ。現在の情況について
は俺が何とかしよう。」

「何だつて！何とかするつて出来るのか？！そんなこと無理だ！」

「知ってるか？俺の兄は目付け役だ。」

そう言うとな数馬はニヤリと笑い、片目をつぶつてみせた。

目付け！その役職に新之介は愕然となつた。あろう事か公儀の者に
計画が露見してしまったのだ！新之介はスーツと意識が遠のくの
を感じた。

目付登場！

「なに？お目付が面会を？」

上代家老、大津頼母は天地がひっくり返るのかと思った。

「なにゆえじゃ！」

「内々にご家老と話がしたいとたつたお1人で参られております。」

「してお目付に間違いないのか？偽者であるまいな。」

「確かに相違ございませぬ。嫡木家の印籠を拝見いたしましたゆえ。」

家来の言葉に家老の大津頼母は途端に色めきたった。

「何をしておる！早くお通し申せ！」

「はっ！」

わざと旅支度をし、大津頼母の前に現れたのは。謂わずと知れた、兄静馬になりすました数馬である。一通りの挨拶を済ませると、とばかりに膝詰めになった。

「本日まかりこしたのは他でもござらぬ。ご当地に一揆の噂あり。との上申があつたためござる。大目付殿も今更藩を取り潰すのは僣びないと申され、某に内々で調査をし、その気配あらば煙のうちそれがしに消し止めよ。と命ぜられた。その詮議のためござる。」

堂々とした物言いにすっかり大津は騙されてしまった。

「一揆？！何としたことを！そのような不穏な動きが当藩にあらうはずがございませぬ！」

明らかに狼狽している。しかしありえないという言葉には裏がありそつだ。

「されば某それがしご当地に参り少々調査いたしたところ、火になりそうな者達を発見いたしましたぞ。」

「何と！嫡木様！その首謀者の名をお教え頂けまいか！この通り。」
土下座して頼む大津。それをじつと見ていた数、いや静馬。静かな

口調で言った。

「大津殿。某^{それがし}は何も捕えよ。と申しておるのではない。むしろその逆でござる。その者達に一揆を起こす気を失くさせれば良い事。そのためには藩を挙げての援助が必要だ。」

「は？・・・と申されますと？」

「そもそも一揆というものは食えぬ。というところから始まるもの。食えぬ。を食えるに変えればどうか？人間腹一杯だと悪い事は考えぬものだ。某^{それがし}の申す事わかつていただけかな？」

「はあ。某^{それがし}には一向に・・・申し訳ございません。嫡木様の仰るところが難しく某^{それがし}にはわかりかねます。もう少々わかりやすく教えて頂けませぬか？」

「これは失礼いたしました。つまりだ。ご当地で甘藷の栽培を推進したらいかがかと提案したいのだ。」

「甘藷？甘藷と申しますと薩摩で取れる芋のことでござるか？」

「左様。さすが大津殿。その芋でござる。某^{それがし}、栽培に成功した青木昆陽なる人物が書いた書物を以前読んだことがありましてな、それによるとこの地は薩摩よりかなり北に位置してはいるが、気候・風土など百姓に聞いたところではその栽培に適しているのではないか、と思われるのです。いかがでござろう。一考の余地があるとは思われぬか？」

いつの間にか大津は数馬の術中に嵌っていた。ずいっと数馬の方に身を乗り出すと、

「それを栽培すれば我が藩は安泰・・・？」

「左様。某^{それがし}、大目付殿には川越の一件は単なる噂であつた、と報告いたしておきますゆえ、その代わり芋が収穫できるまでの間、百姓達の面倒を藩を挙げてみていただきたいのだ。藩の財政が苦しいのはわかるが、一揆が起きれば藩そのものがただでは済まないと考えれば辛抱もできるのではないか？藩主自ら質素・儉約を心がければ、民・百姓も納得してくれるはず。但し、その間も幕府の息のかかった者を間者として送り込んでおくから、少しでも百姓が苦しい目に

あつていと報告があつた場合、某自ら陣頭指揮に当たつて当藩の取り潰しに赴く所存。いかがであらう、協力してくれぬか？」

「　　わかり申した。嫡木様のご提案、川越藩家老大津頼母。一身をかけてお約束いたします。・・・しかしなにゆえ我が藩にそれほど肩入れして下さるのです？」

「何もご当地だけではない。先ごろからの一揆を上様は憂えておられ、何とか未然に防ぐ手立てはないものか。と日夜策を練つておられるのだ。それを受けて某達も奔走し、企ての噂のあるところに直接赴き、当地に合つた処置を提案している。というわけでござる。」

「左様でござつたか。嫡木様。この件、きつとお約束いたします。それゆえ大目付様には良き計らいをお願いいたします。」

「あいわかつた。では！」

力強くそう言つと、サツと身を翻し川越城を後にするにわか目付の数馬であつた。

手腕の間われる立て札1枚

翌朝『つるや』の前は早くから大勢の人で賑わっていた。通りに面した部屋で寝ていた数馬たちは何事か！と急いで外に出てみた。人々はある立て札を見て騒いでいたのだ。数馬もそれを読もうと人をかき分けた。それは川越城主、浅井能登守の名で記されてあった。『藩を挙げて甘諸作りを推進する。その収穫までの期間は一切の面倒を川越城主浅井能登守が責任を持つ。速やかに甘諸作りを始めよ』以上の内容だった。それを見た人々が口々に噂をし合っていた。甘諸って何だ。というのが一番多かったが、立て札を読み聞かせた浪人が声高に説明した。村人達とはにかくその芋を収穫するまではお殿様がオラ達の面倒を見てくれる。それだけは理解したらしく皆大喜びの様子だ。

（大津殿。恩にきる。）数馬はホツと胸を撫で下ろした。正直言つて突然姿を現したエセ目付けの申し出を家老の大津頼母が受けてくれるかどうか心配だった。と、スツとその側に編み笠を被った浪人が近寄り、そこにいた人達には分らぬよう数馬をその場から連れ出した。そして人気のないところまで来ると、突然編み笠を取り、その場にひれ伏した。薄々気付いていたが、浪人は新之介であった。『かたじけない！これで百姓達は飢え死にを免れる！私はあなたに剣で負けた。だがそれ以上に人間として追いつく事が出来ない！何^{れがし}れがし

卒某を斬つて下さい！」

「そうか。では。」

とばかりに数馬の手にキラツと光った刀がバツサリと斬ったものは・

「これでおぬしは侍ではなくなつた。百姓の新之介として可奈さんと共に幸せに暮らすのだ。」

鬚^{まげ}を切られた新之介は数馬の腕に今更ながら感服した。

「鍋木殿！あなたなら茉莉殿を幸せにできる！」

「おお！その件があつた。だが俺にはそれはできない。何しろ俺にも縁談があるのでな。いいか、新之介。今のお前を茉莉さんに見せるのだ。そして自分にも守らなければならぬものがある。だから茉莉さんも自分の事は早く忘れ、これからのことを考えるように、と正直に言うのだ。良いな。」

「はい。承知いたしました。」

今や新之介は数馬の言いなりだった。

対面

その足で数馬と新之介は髪結いに立ち寄り、その後『つるや』に戻った。浪人鬻から町人鬻に変貌した新之介はどことなく落ち着かない様子だったが、つるやの主人は驚きを表に出すことなく2人を迎えた。部屋では茉莉が既に着替えており数馬が帰ってくるのを待っていた。

「茉莉さん。あんたに会わせたい人がいる。」

とりあえず数馬が先に中へ入り、その旨を告げた。

「会わせたい人？」

「うむ。天宮新之介だ。」

「えっ。」

茉莉が落ち着く間もなくその人物が入ってきた。それは町人鬻の茉莉にとっては全く見知らぬ男であった。男は下座に座り、平伏して名乗った。

「昔、天宮新之介と名乗っておりまして。今は庄屋の入り婿、新之介でございます。ご新造様にお目にかかることができたこと、まこと実に光栄に存じます。」

その男は天宮新之介と言った。しかし茉莉は石のように固まったまま不寐にもまじまじとその男を眺めている。その光景を見た数馬が声をかけた。

「どうしたい。茉莉さん。あんたの待ち焦がれていた新之介殿だよ。そんなにじろじろ見たら新之介が気の毒だ。ああそうか。」

俺がいたんじゃ積もる話もでんか。じゃ俺は席を外すからゆつくり感動を味わってくれ。」

呆然とする茉莉だったが数馬の言葉に頬をポツと赤らめ、気がついたように目線を外した。

そんな2人を残し数馬はすっと立ち上がると、後ろを見ることがなく

外に出て行った。廊下では野次馬根性丸出しの女中達がヒソヒソと内緒話をしながらその部屋を見守っていた。

迷い込んだ吉報

「旦那。」

ブラブラと所在なく歩いていた数馬の耳に、聞き覚えのある声が届いたのはそれから間もなくのことだった。

「糸か。随分遅かったなあ。待つてたぞお。」

ここにも1人待ち焦がれていた男がいた、とクスツと笑ってしまう数馬だった。

「すいやせん。稲さんからこれを預かつて来やした。」

糸八は一通の手紙と重量感のある袱紗ふくさを差し出した。

「すまないな。」

それだけ言つと数馬は袱紗の中味をあらためもせず無造作に懷に突っ込み、手紙を大事そうに開いた。糸八を全面的に信用している証拠である。だからこそくすねたりできないのだ。と糸八は思った。

「取り急ぎご連絡候。」

と一旦は声に出して読み出した数馬だったが、次の文字に目がいって途端黙り込んでしまった。そしてサツと読み終えろと糸八の方へ向き直り、ちよつと困つたような顔を見せた。糸八は何か悪い知らせだと思い、そんな手紙を運んでしまった自分をのしりたくなつた。だが……

「糸。あの稲はなさんには俺の正体がばれていたよ。それからあのお嬢さんの家では神隠しにあつたとかで大騒ぎになつていそうだ。」

「神隠し？あのお嬢さんはご自分でお屋敷を出られたんでやしょう？書き付けも何も残して来なかつたんですかい？」

「そうらしいな。」

「なんて人騒がせなお姫様だ。それで旦那の正体がばれたつてのは一体どういふわけなんです？」

「日下部宗太郎。お姫様の兄上の話だと、お姫様の新しい縁談の相手つてのが鎗木数馬という人物なんだとよ。」

「かぶら・・・えっ！つて旦那のこつてすかい？」

「ああ。それであの稲^{ばあ}さんはお嬢様と旅に出た富良というおかしな侍がそうだと決めつけ、俺にカマをかけてきやがった。」

「こりゃ驚きだ！こんな偶然があるんですかい。じゃ何ですか？旦那はご丁寧にも恋敵を自分の花嫁になるお人と捜してたつてわけですか？いやあ、なんてえこつた！」

「俺もびつくりしてしまったよ。まさか俺の縁談の相手があのお嬢さんだったなんて。」

「旦那。まんざらでもねえって顔ですぜ。」

「柔！・・・ま・まあな。あれだけの別嬪^{べっぴん}だ。嫌なわけはないだろう。性格もいいしな。少々気が強いが、これからの女子^{おなこ}は自己主張ができればならぬ。あれくらいで良いのだ。」

「旦那。鼻の下が長くなつてますぜ。」

「からかうな！だがな、このことは当分の間内緒にしてくれ。勿論あのお姫さんにもな。」

「なぜです？」

「うーん。俺にもわからん。が、内密にしてくれ。頼むよ。」

数馬に頼むと言われ、嫌だと言える人間がいるだろうか、と柔八は思った。

「へい。合点で。このことは口が裂けたつて言うもんでねえです。」

「すまん。」

そう言つと数馬は手紙を柔八の持っていたキセルに押し付けた。間もなくぼうつと火がつき、あつという間に燃えてしまった。

茉莉と新之介

茉莉は新之介と向かって会ったのはこれが初めてであったが、心に抱いていた印象と全く違っていたので、当惑するばかりで何も話すことができない。じつと目を閉じても浮かぶのは風太郎の顔ばかり。目の前にいるはずの新之介の顔を思い描けずにいた。それを察して新之介は平伏したまま話し出した。

「……茉莉様が驚かれるのも無理はありません。私もあまりに急な展開で驚いているのですから。というのも先刻、私は侍を捨て、この地に骨を埋める覚悟をしたばかりだからです。庄屋の娘と所帯を持ち、百姓として一生を送りたいと思います。……あなた様には新しい縁談があると富良様から伺い、私の口からはつきりその話を受けて下さいと申し上げるためにここへ参りました。どうかその方とお幸せになれますよう、心より願っております。」

「し・新之介様。」

ようやく茉莉の口から言葉が出た。

「いいえ。手前はもう百姓。どうぞ新之介とお呼び下さい。」

新之介は訂正を申し出たが、茉莉はそのまま続けた。

「ひとつお尋ねしても宜しいですか？」

「なんなりと。」

「あなた様が家を出られた理由をお聞かせ下さいませんか。」

その途端、新之介の肩がビクツと震えた。

「……それは……5年前……の事……でございます。……御前試合がございました。当時、手前は道場は元より向かうところ敵なし、といった状態で天狗になっておりました。ところが決勝戦で覆面をした男にいと簡単に負けてしまったのです。相手は遊び半分で出場していた侍でした。手前は出鼻をくじかれたような気持ちになり、その日のうちに剣の修行と称し出奔いたしました。」

「……そうだったのですか。……ではわたくしとの縁談を嫌ってい

たのではないのですね？」

「いいえ！決してそのようなことはありません！あの日まで手前はあなた様との婚礼を一日千秋の想いで待っておりましたから、婚礼のはなむけの意味も込めた試合だったのです。」

その言葉にじつと下を向き涙をこらえていた茉莉は何かを決意したように顔を上げた。

「では今はその娘さんを好いておいでなのですね？」

「はい。かけがえのないほどに。」

「・・・わかりました。わたくしはここに参ってはいけなかったのですね。新之介様。そのお方を大事になさって幸せにして差し上げて下さいね。」

「はい。」

新之介の身体が小刻みに震えているのを茉莉は何故か冷静な気持ちで見ていた。

眠れぬ夜

その夜。数馬は夕餉ゆうけの席で差し向かいになった茉莉を新たな想いで眺めた。

（この娘は自分のものになる運命にあつたのだ。昨日何故か新之介と2人きりにしたくないと思ったのはあれは嫉妬だったんだ。）
その視線を感じたのか茉莉の顔が問いたそうな表情になった。

「あ・いや。何でもない。．．．ところで新之介との話はどうかたのです?」

考えていたこととは違う言葉が出た。それもずっと気になっていたことには違いないが。すると茉莉は膳をずらし、座りなおして三つ指をついた。

「改めて風太郎様にお礼を申し上げます。あなた様にはひとかたならぬお世話を戴きました。新之介様の存念を伺い、あの方はこの地に骨を埋める覚悟でおられるとわかりました。」

「左様か。．．．それであなたはどうかなさる?」

「わたくしは．．．家に戻ります。」

「それでご家族の勧める縁談を受けるのか?」

「仕方ありません。武家の娘はそういう星の下に生まれているのですから。」

「相手がどんな男でもですか?」

数馬は段々ライラしてきた。そんな気持ちで自分の元に来て欲しくなかったからだ。来るからには納得した上で嫁して欲しい。そう願っていた。

「風太郎様?どうなされたのです?」

「そなたはそれでいいのか!自分の気持ちというものはないのか!?」

「わ・わたくしは．．．わたくしにも望みはありました。ですがそのようなことはもうどうでも良いのです。どうせ婚期の送れた娘な

ど貰ってくれる方などありませぬゆえ。」

「あなたは幾つになられる？」

「19でございます。」

「ふむ。俺は28だ。しかしまだ妻帯しておらぬ。」

「殿方には婚期はありませぬ。ですが女子おなごの19といえば縁談すら遠くなります。」

「そう言ってしまうえば身も蓋もないが。とにかくそのような考えは早く改めることだ。」

「いいえ。わたくしの人生はもう終わったも同然・・・」

「馬鹿なことを言うでない!!」

数馬はとうとう耐え切れなくなり怒って部屋を出て行ってしまった。結局その夜は2人ともそれぞれの想いを胸に別々の場所で寝付けないう夜を過ごした。

帰郷

翌朝。数馬はどこからともなく戻つて来て、無言のまま旅支度を始めた。茉莉には用が済んだから帰る、とだけ伝えた。元より茉莉もそのつもりであつたから朝餉あさげが済むと休む間もなく『つるや』を後にした。

朝から曇つていた空が昼を境にとうとう泣き出してしまった。

初め、笠を被つてしのげる程度だったのが段々ひどくなり、雨宿りしなければならぬほどになった。運よく道から少し離れた所に祠ほこりがあつたため、2人はそこに逃げ込んだ。雨はしのげたものの春とはいえ水に濡れた身体はどんどん熱を奪つていく。茉莉の身体は寒さでガタガタ震えだした。しかし暖を取るものは一切ない。数馬は黙つて茉莉の身体を抱き寄せた。ハツと抵抗したものの力では数馬にかなわない。そのまま身を任せはしたが一向に震えは治まらない。それどころか熱も出てきたようだ。ちよつと躊躇ちゅうちょしたが、数馬は突然茉莉の帯を解き始めた。熱でぼうつとなつていた茉莉だったが、これには必死で抵抗した。

「あんたのためだ！ 静かにしないと手間がかかる！ 何を心配しているのかわからんが、悪さをしようなんて思つちやいないから安心しなさい！」

あつという間に茉莉は腰巻1本にさせられた。数馬はサツと自分の着物を脱ぐとそれで茉莉の身体をくるみ、自分の身体に引き寄せた。「どうだ。暖かいだろう？ しばらくこうしていて雨が上がったら早目に宿を取ろう。たぶん糸がちゃんとやってくれている。」

数馬の優しい言葉に力なく頷くと、茉莉はそのまま深い眠りに落ちた。昨夜の寝不足が祟つたのか、数馬もまたつられるようにそのまま寝入ってしまった。

糸八の活躍

「旦那。」

糸八の声でハツと我に返った数馬は、自分がどんな格好でいるか突然思い出し人知れず赤面してしまった。知らぬ間に外の雨は上がっていた。

「糸か。宿は大丈夫か？」

「へえ。万事抜かりはございせん。」

気を使つてだろうか、糸八は中に入つて来ない。

「そうか。糸、ひとつ頼まれちゃくれねえか。」

「何です？改まつて。」

「さっきの雨でこのお嬢さんと俺の着ていたものがびしょ濡れなんだ。ひとつ走り古着を買つて来ちゃくれねえか。それから大八と布団と医者をな。」

「え？身体の場合でも？」

「ああ。このお人が熱を出したようでは歩けねえ。大至急手配してくれ。」

へえ！とばかり糸八は素早くその場を走り去った。

どのくらい時間が過ぎたか。さほど経っていないような気がするのだがようやく糸八の声がした。

「手筈は整いやした。」

「そうか。ではまず着物をくれ。」

糸八が差し出した品物は、数馬用には着流しであつたが、茉莉のものといつたらなかった。まるで御殿女中が着る、絵に描いたような矢絣であつた。

「糸。おめえ、こんなもんどつからめつけて来たんだ？俺のはまあ良いとして、この女中……まあいいか。茉莉、茉莉。さあこれを着るんだ。」

手際よく女物を着せてしまふ数馬の腕は剣の方ばかりではないらしかつた。加えていつ間にか呼び名から”さん”が消えている事に桑八は気付いた。

すっかり用意を整えると、まだ熱のある茉莉の身体を抱くようにして祠ほらから出て、布団の敷いてある大八車にその体を横たえ、数馬自らそれを引き始めた。すかさず桑八は数馬の手から梶棒を取ると、ニヤツと笑った。

「旦那。色男にや力があつちやいけねえ。あつしが引きやすぜ。」

「俺ア色男じゃねえぞ。ま、おめえの方が上手いのはわかるが。なら任せるがそおつと引いてくれよ。」

「合点で！」

第八車に娘を乗せた奇妙な2人連れが蕨に宿を取ったのは、それから程なくしてのことだった。

井上 直

旅籠はたしに着くと主は若い男と談笑していたが、奇妙な三人連れがその客だと知るやその男を伴って用意していた部屋に案内した。

「こちらは偶然宿泊されていた井上 直殿すぐると仰る新進気鋭のお医者様でございます。お若いが腕は確かでございますので安心して診て頂いてください。」

「休養中のところ申し訳ござらん。某富良それがしと申す者。これは家内の茉莉。連れの衆八でござる。旅の途中の事とて急な発熱で難儀しておりました。何卒よろしくお願いいたします。」

ここで本名を明かす事はできないと、あえて富良と名乗ったが、その医者はそんなことにはお構いなく男達に席を外すように命じると早速診察に取り掛かった。

たつぷり小半時もかかったろうか、ようやく直が部屋すむから出てきた。その間じつと目を閉じていた数馬は彼の姿に慌てたように言葉ことばをかけた。

「医師せんせい！茉莉は、妻の容態は！」

数馬の慌てぶりに始めてにつこり笑うと直は大きく頷いた。

「大丈夫ですよ。疲労が重なった上に先刻の雨。それが原因で風邪を引かれたようです。2、3日養生すれば元通りになられる。」

「そうですか！良かった！」

ヘナヘナとしやがみ込む数馬。

「富良殿はよほど奥方が大事と見ゆる。特效薬とは言えぬが薬を煎じて差し上げるゆえ、私の部屋までご足労願えますか？」

にこにこ話しかける直に数馬は人知れず暖かいものを感じ、

「はい。もちろん伺います！」

と即答した。

意外な接点

直すなおの部屋は心なしか薬のにおいがした。滞在してからの期間が気になった数馬は直の宿泊期間をそれとなく尋ねてみた。

「いいえ。今日で5日目です。偶然となりに泊まった客が癩じまへを起こしまして診察したのが縁で・・・何とも言えず居心地が良いのですよ。この宿は。」

「医師せんせいのような方がいて下さって本当に助かりました。改めて礼を言います。」

「いやあ、せんせいだなんて。直すなおで良いですよ。私も修行中の身ですから、せんせいだなんて呼ばれると他人事のような気がして・・・あの・・・先程から気になっていたのですが、お尋ねしても宜しいでしょうか？」

「は？どのような事ででしょうか。」

「あなた様はもしや、鐔木数馬様ではありませんか？」

「え?!」

「いや。間違ったのなら謝ります。」

「間違つてはござらん。某それがしは鐔木数馬でござる。しかしなにゆえ某それがしの名を？」

「やはりそうでしたか。実はあなた様の兄上、静馬殿は私の患者なのです。本来私の兄が診ていたのですが、事情があつて私が診るようになりました。それで何かとあなた様の話題が出ておりましたので、お名前だけは存知上げておりました。なるほど静馬様にそっくりであられる。もっともあなた様の方が精悍せいかんな顔付きですが。先刻は富良と名乗られたのには何か仔細があるのかと黙っておりました

が、やはり何か理由わけがあつたのですね？」

「左様。ちと訳ありで名を偽っているのです。」

「ではあのお女中は？」

「家内というのも偽りで、さる旗本のご息女です。」

「そうでしたか。」

「実は某^{それがし}いまだに本名を明かしていないのでこのことは内密に。」

「わかりました。ですがお2人はなかなか似合いの夫婦に見えますぞ。いつそのこと本当の夫婦になられては？」

「結構な話ですな。」

「私、静馬様よりあなた様のことをいろいろ伺っておりますが、なるほど聞きしに勝る人物とお見受けいたしました。そうそう、縁談があると伺いましたが、その後どうなりました？」

「そのようなことまで兄は話していたのですか。」

「ええ。心身共の患者ですから、静馬様は。」

「実は世の中にこんな摩訶不思議なこともあるのか、と自分でも驚いているのですが」

と数馬は自分と茉莉の経緯^{いきわづ}から真実までを掻い摘んで話した。

「なんと！驚き千万！似合いと私が感じたのもあながち勘違いではなかったのですね？なるほど・・・」

感心したように頷く直に数馬は少々照れたように付け加えた。

「ですから余計に今、本名を明かしたくないのです。」

「そうだったのですか。もし差し支えなければあの方のお名前を教えてくださいませんか。」

「なんの。差支えなどありませんよ。兄と昵懇の間柄と伺った上はあの娘御は日下部主水殿のご息女。茉莉殿でござる。」

「日下部！ 勘定吟味役の日下部様？」

「左様。」

「また奇遇な事！ご嫡男宗太郎殿は、やはり私の患者です。同い年ということもあり大変気の合う友人でもあります。最近^{きんごう}気鬱の病で薬を調合したばかりでした。何でも妹御が行方知れず・・・あ！もしかして！」

「え？それでは日下部家では大変な騒ぎになっていたのですか？」

「それはそれは天地がひっくり返ったような大騒ぎですよ。表向き

は何もないように振舞っておられますが、宗太郎殿も妹御の件でお父上からいろいろ言われたらしく、それで病が出た、と思われま

「それがし某茉莉殿をお返しいたす折は、腹を切る覚悟でいなければなりませんね。」

その言葉とは裏腹に、数馬はそれを楽しんでいるように直には感じられた。

「数馬殿！冗談ではないですよ！宗太郎殿は先導した者は誰であろうと決して許さないと怒り心頭の様相でしたから。」

「ふむ。それは困った。いや、実に困った。」

だが一向に困っていない様子だ。

「それに宗太郎殿には別な問題もあるし・・・」

「別の？何です？」

「あ、いや。それは・・・」

慌てる直に数馬は興味なさそうに呟いた。

「たいした事ではないのか。」

「いや。それが」

「いやいやそれは聞かないでおこう。お家の恥になる事もあるうし。」

「あなた様に聞いていただけのなら、宗太郎殿も秘密を打ち明けることに何ら支障はないと思うでしょう。宗太郎殿の病を治すには原因を断ち切らなければなりません。ですが医者私ではどうにもならないと・・・もし数馬殿のお知恵を拝借できるならと、私とい

たしましても非常に助かるのですが。」

「ふむ。・・・わかりました。それがし某でお役に立てるのなら拝聴いたしましょう。」

直（すなお）の話

「実は、宗太郎殿のご友人が先頃外国から帰ってきました。帰って来た、というより帰された。と言った方がいかもしれませんが、船旅をしているうちに嵐に遭い、漂流の挙句、露西亜に到着。シベリヤというところだそうです。上陸したものの仲間はことごとく亡くなり唯一その方だけが残ってしまった。苦勞の末やっと帰国したもの、ご実家からは既に死亡届が出されているため家には戻れない。残っていた新妻と共に細々と暮らし始めたのも束の間、帰国したのが御公儀の知ることとなり、本人と妻は幽閉されそのまま江戸まで護送されました。その上ご当主はその方を庇った罪で厳しく詮議されているらしいのです。今ではその方は一日も早く死んだ仲間の元へ行きたいと仰っていると。・・その話を主水殿もんどから聞かされた宗太郎殿は内密にその方と連絡を取り面会なさいました。その方が仰るには自分はどうなっても構わないが、妻と兄の身を守って貰えないかと宗太郎殿に頼まれたそうです。死んだものと諦めていた友人が生きていた、と感激の余り2つ返事で引き受けてしまった宗太郎殿でしたが、勘定奉行所に出仕している身の上ではそれだけの力がないと1人で悩んでいたのです。」

直は一旦そこで言葉を切り、ぬるくなつたお茶をすすった。数馬は先を促すようなことはせず、じつと目を閉じ直すなおの話を聞いていた。直も又、自分の間合いを取って話し出した。

「そんなところに今度は妹御の失踪です。どうにかならない方が不思議というもの。私も誰ぞその方面に知り合いはいないかと訊ねられ、少々難儀していたところなのです。」

「いささか厄介な問題ですな。・・・某それがし一存の考えではどうにもならない。ここは兄に相談してみましよう。この件はお急ぎなのでしょうね。」

「ええ。なるべく早く解決を。と宗太郎殿は考えておいでです。」

「わかり申した。・・・してそのお方のお名は？」

「九頭竜隼人殿と。」

「九頭竜殿か。あいわかった。では兄に早速連絡を取りましょう。」
そう言つて立ち上がった数馬だったが、あ！と何かを思い出したように再び座った。

「何か？」

「肝心な薬を頂くのを忘れていた。」

「あ！そうでした。私もすっかり忘れておりました。」

「お互い何かに夢中になると他の事を忘れる性質たちですか？ はははは！」

豪快に笑うその顔を見て、直すなおはこの人に打ち明けたことは間違いではなかったと心底思つた。

静馬の力

熱でうなされている茉莉に薬湯を飲ませると、数馬は兄静馬に九頭竜隼人なる人物について調べて欲しい旨手紙を書いた。もちろん飛脚は糸八である。火急の用件だからと念を押しすぐ江戸へ向かわせた。糸八も心得たもので韋駄天の如く走って行った。

（あとは兄上からの手紙を待っていれば良い。）数馬は糸八を見送ると、薬が効いてスヤスヤ眠っている茉莉の枕元に腰を下ろした。

一方静馬は数馬の手紙を受け取ると、すぐ行動を起こした。九頭竜隼人なる人物が幽閉された経緯を調査すべく大目付鳥居備中守を秘密裏に訪問し、事の次第を説明した。

鳥居は静馬・数馬両名の父の友人であり、今回数馬の縁談を持つてきた人物であった。そういう気安さも手伝って静馬は自ら鳥居の門を叩いたのである。

「……確かにそれらしき人物が紀伊から連行されたことは事実である。……しかし……いかに自ら望んだことではないとはいえ、外国へ行った人間を幕府が見逃すはずはないしのお。通念からすれば当人は生涯幽閉。匿った九頭竜家当主は切腹。お家断絶は免れんだろう。むろん内儀も同じじゃ。静馬。おぬし、なにゆえそれまでして九頭竜隼人を助けたいのじゃ？おぬしは生まれつき身体が丈夫ではないのに、なにゆえ他人のために尽力するのか？」

「小父上。……私亡き後、数馬が嫡木家を継ぐ事は周知のことでございます。私は幼少の頃より数馬が羨ましくてなりませんでした。今もそうです。ですから私は今、数馬に誇れる事をしたいのです。こういう兄もいたのだと数馬に覚えておいて欲しいのです。数馬は表舞台に立って光を放つ男です。ですが私はそれができません。たとえば身体が丈夫であっても、人を惹きつける力がないのです。そういう男が唯一できる事と申せば、あとに残る者の為に何か心に残

る仕事ことをするしかありません。お願いです！小父上。九頭竜家を窮地から救うため、お力をお貸し下さい。嫡木静馬一生のお願いです！

畳に額を擦り付けるように土下座する静馬に鳥居は静かに言った。

「お前がそれほどまでに言うのなら手を貸さぬでもないが・・・さいころの目がどのように出るかわからぬが、お前が一生の頼みと言うからには余程の事じやろう。力の限りその男を救う算段をしよう・・・そういえば当の数馬は如何いたした？見合いの日取りを決めねばならぬというに。一向に姿を見せぬとは。」

「はっ、抛な所ところない事情がございまして・・・少々旅たびに出ております。

」

「旅？いずれへじゃ。」

「はっ！蕨わでございます。」

静馬は顔を上げる事ができずじつとしていた。脇の下に冷や汗が流れ出してくる。まさか見合いの当人達が一緒に旅をしているとは、さすが旧知の鳥居にさえ口にすることができない。とはいうものの、静馬でさえ数馬の手紙を見るまでは数馬と行動を共にしている娘が見合いの相手だったとは知らなかったのだから、何を言われようとこれ以上知らぬ存ぜぬで通すしかなかった。

「まあいいだろう。日下部家との縁組はもう決まっている。今更見合いなどせんでも・・・そうじゃ！先に婚礼の日取りを決めるが得策というもの！おぬし！嫡木家の当主なのじゃからここで儼と決めてしまおう！なに、数馬が四の五の申しても逃げられんようからめ手から攻めるのじゃ。」

どれ、暦、暦、と。」

暦を探すために立ち上がった鳥居にホツとする静馬だったが、新たな悩みを抱えてしまった。数馬の承諾を得ぬまま婚礼の日を決めなければならなくなってしまったからだった。

静馬からの手紙

韋駄天の如く走り去った糸八が再び数馬の下に戻って来た。胸にはしっかりと兄静馬の手紙を携えている。それを受け取り、ざっと読んだ数馬はちよつと困ったような顔をした。しかしすぐいつもの表情に戻った。だが糸八はその困った顔が気になりつい口に出した。

「旦那。一体どうしたんです？」

「何が？」

「何だか浮かねえ顔をしてなさる。」

「お前の目は誤魔化せんな。兄上から俺の居ぬ間に婚禮の日取りを決めてしまったと言つて来た。それも来月の事らしい。」

「来月？ ひええ！ 殿様もなかなかやるねえ。」

「兄上1人で決められたのではないだろう。たぶん鳥居の小父貴の差し金だ。今回の頼みを聞いてやる代わりに出されてた交換条件だと思う。」

糸。せつかく戻って来たところ悪いんだが、また頼まれちゃくれねえか。」

「へえ。何です？」

「日下部家が今どうなっているか探りを入れて来てくれ。というよりお嬢さんの兄、宗太郎殿のことをできるだけ詳しく調べて貰いたいんだ。時間はあまりかけられねえが。そうだな、落ち合う場所はあの稲さんの庵にしよう。これは必要経費だ。」

そう言つて懷から出した包みは、糸八が稲から預かった袱紗だ。手に取るとずつしりと重い。糸八はあの時の感触を思い出し、おそらく数馬はその包みを一度も開いてはいないだろうと感じた。

「へえ。でも旦那はいつここを立つんで？」

糸八はその包みをしっかりと懷にしまいながら聞いた。

「うむ。茉莉さんの熱が下がるのを待つてすぐにでも立とうと思つているのだが。」

「旦那。まさか歩いての道中じゃあねえでしょう？ それじゃああん

まりお嬢さんが可哀相だ。」

「桑。おめえ、あのお嬢さんに情が移ったんじゃねえのか？悪いがな、あの人は俺の嫁さんになるんだぜ。ちィーっとはかし遅かったなあ。」

ニコツと笑いながら片目をつぶって見せる数馬に、桑八はフーツとため息を漏らした。

「馬鹿言っちゃいけやせんぜ。あつしゃあ人としての道理を言ってるんです。」

「ん？　　そうか、すまん。嬉しくってつい軽口を言っちゃった。この通りだ。」

自分の火を素直に認める数馬に、再び心酔してしまう桑八であった。

直（すなお）の部屋

静馬の手紙の内容を掻い摘んで直に話すと、彼は茉莉の狀態次第ですぐ出立しようと言い出した。それほどまでに直の心中は逼迫ひつぱくしていたのかと、今更ながら驚く数馬だった。

「それにしても宗太郎殿は江戸の人、隼人殿は紀伊の人。この2人の接点はどこにあるのです？」

「はい。昔、九頭竜家の江戸屋敷は日下部家の近くに位置しており、隼人殿は御生母様と江戸におられたのです。2人が知り合ったきっかけは、宗太郎殿が九頭竜家の柿を取ろうとして咎められ、九頭竜家の家臣に仕置きになりそうになったところを隼人殿に助けられたのです。それが縁で仲良くなられたと聞いております。お互い子供で近隣に友達がいなかったという境遇が惹き合ったのでしょうか、大名と旗本という身分の差は、幼い2人にとつては何の障害にもならなかったのでございましょう。以後、隼人殿が紀伊に帰国したのちも文のやり取りをしていたそうです。ですから隼人殿が漂流していた数年間は宗太郎殿もその安否を気遣っていらしたようです。そこに今回の話ですから名状し難い想いがあるのでしょうか。」

「そうだったのか。縁とは不思議なものようのお。・・・ところで茉莉殿の容態はいかがです？直殿の診みたてではいつ出立できますか？」

「熱は下がっていますから・・・早ければ明後日にでも大丈夫かと。」

「明後日？！では馬車を準備いたそう。あなたも同道していただけるかな？」

「もちろんです。」

「それでは某馬それがしの手配をいたすゆえ、これにてご免。」

そう言つて数馬は直すなおの部屋を出た。直もまた宿の清算を頼みに帳場へ赴いた。

江戸へ

馬車の中で青白い顔で目をつぶっている茉莉の顔を見ながら数馬は一昨夜の事を思い出していた。宿の主人に江戸までの馬車の手配を頼んだ後、部屋に戻り茉莉に明後日の旅立ちを告げた。一瞬驚いた表情をした茉莉だったが、今では数馬のすることに間違いはないと信じているのか、また、深く考えるのも億劫なのか、ただ黙って頷いた。その顔と今の顔が重なり愛しさがこみ上げてきて、その身体を支えるために回した腕におのずと力が入った。ついこの娘は俺のものだ！と叫んでしまいそうになるのを必死でこらえる数馬であつた。

「富良さん。茉莉殿は私がしつかり看病いたしますから大丈夫ですよ。」

数馬の様子を見かねて直が少々勘違いなことを言ってしまうのも無理からぬことだった。馬車のお陰でその日のうちに日暮里に着いた3人は、ひとまず稲の庵に草鞋わらじを脱いだ。帰郷の連絡をしていなかったで、稲は驚くや嬉しいやらで大粒の涙を流しながら茉莉のために別室に布団を取らせた。その後、直の診察で安心したのか、茉莉はぐっすり眠った。そこで初めて数馬は道中の仔細すなおを直も交えて稲に報告することができた。直のことは稲も知っていたので、それは宜しゅうございました、とその手を取って何度も礼を言った。

一通りの報告を終えるとそれまでの真面目な顔から一転、あの笑顔を見せ数馬は更に付け加えた。

「でな、お稲さん。俺はまだ自分の正体を言っていないのだ。訳あつてもうしばらく黙っていたいと思う。悪いんだがあんたもそのつもりでいてくれ。」

「嫡・いえ、富良様。それは一体どのような？」

不思議がる稲に直が数馬に代わって答えた。

「宗太郎殿の気鬱きうつの事と関係があることなのです。稲殿もそのこと

はご存知でしょう。」

「まあ！左様でございますか。ええ、心得ておりますとも！不肖この私、口が裂けても嫡木・いえ、富良様のことは申しませんよ！」

「頼みまするぞ。」

「・・・富良様。私1つお尋ねしたいことがあります。」

話題を変えるように稲が姿勢を正した。

「もし、事が無事成就いたしましたなら、お嬢様に真相を明かしその上で。」

「みなまで申されずとも承知いたしております。そのあかつきには必ずあなたのお考えのままにいたす所存です。」

「真まことでございますか？」

稲の言葉に深く頷く数馬。

「ですからこれから先の茉莉殿のことは一切あなたに任せたいのです。無論、宗太郎殿との間に入つての取り成しも含めてです。本来なら某が直接会つて謝罪なりしなければならぬのですが、直殿すなおの申される一件がありますので、できればこれからしばらくの間、こちらに専念したいと思うのです。だがその事であなたを辛い立場に立たせてしまうことになるのが申し訳ない・・・」

「何を仰います！そのくらいのこと！それで若様やお嬢様が助かるのであれば、老婆心ながら私、一肌脱がせていただきます！」

その言葉にはかつての精気がみなぎってきたようだった。

帰宅

その夜遅く、数馬は自宅に戻った。用人の佐々岡が数馬の帰宅を知って寝姿のまま出迎えた。

「じい。年なのだから出て来ずとも良かったのに。」

「からかうような数馬に気分を害した様子もなく、

「私が年寄り？ご冗談を！まだ40になったばかりですよ。」

「40？！おまえを見て世の中の何人が年を言い当てられるかな？」

「それはご舎弟殿のせいでござりましょう。あなた様がもう少し大人しゅうなさつて下されば、私はまだまだ闊達でいられるのです。」

「最近冷えますと足やら腰やらが痛うて・・・」

「それみい！俺のせいにするからじゃ。仏様は何もお見通しと見ゆる。ははは！ところで兄上は？」

「とうにお休みでございます。」

「そうか。では明日にするか・・・」

「いいえ。静馬様からあなた様が戻られたなら何時でも良いから知らせるように、と命ぜられておりますので、私一存で腰元に連絡させました。」

「ほう！何ぞいい知らせでもあったのか？じいはい何か聞いておるか？」

「いいえ。私は何も。それよりも早くご挨拶に参られた方がよろしいではありませんか？」

「おお！そうだった。」

と行きかけて数馬は佐々岡の方へ向き直り、優しく声をかけた。

「すまんな、じい。そなたには苦勞ばかりかける。いずれきつこの埋め合わせはするからな。」

とつさのことで何も言い返せない佐々岡だったが、その膝にポタツと水がこぼれたのを数馬は見逃さなかった。

兄と弟

部屋の前で案内を請うと静馬は待ちくたびれたようにそわそわしながら待っていた。

「兄上。ただ今戻りました。」

「おお！待っておったぞ！元気そうだなによりじゃ！して首尾は？」

「はい。意外に早く目的を果たしたのでそのまま戻りました。」

「左様か。それは上々。」

しばらくぶりの対面で静馬は夜分にもかかわらず上機嫌である。

「途中、井上 直すくに偶然出会い、手紙にしたためました事態になつてしまいました。それで兄上にお願いいたしました件はいかが致しましたでしょうか？」

「うむ。鳥居様になるべく早くと頼んでおいた。案ずることはないと思うが、お前明日にでも屋敷にご機嫌伺いに行くが良いぞ。」

「さすが兄上！ありがとう存じます。」

「しかしその九頭竜家とお前の繋がりは何なのだ？手紙にはそこまですてられておらなんだから、鳥居様の追及が厳しければ私は返事に窮するところだった。」

「申し訳ありません。実は私も直接その人物を見知っているわけではないのです。」

「そうであるうと思っておった。お前の口から今までそのような名前を聞いたことはなかったからの。」

「はい。ところで兄上に1つ訊ねたいことがあるのですが。正直に答えていただけますか？」

「何だ。」

「私の見合いの相手です。手紙にもしたためましたが、勘定吟味役日下部主水殿ご息女、茉莉殿で間違いありませんか？」

「見合いの？それがこの件と何か関わりがあるのか？」

「大いに。」

「左様か。実はお前の推察通り、日下部殿のご息女だ。」

「やはり・・・」

「知っておったのか？」

「薄々。茉莉殿には宗太郎殿という兄がおられるはず。」

「宗太郎？おお、確かに。」

「その宗太郎殿と九頭竜殿は竹馬の仲なのだとか。それで九頭竜殿から自分のことは良いから兄と内儀を助けてもらえないか、と頼まれたのだそうです。しかし宗太郎殿としては役目違いもあって難儀していたそうなのです。それを直殿すなおが聞き、事が事だけに直殿も困り果てていたという訳で、私が少々お節介を申し出たという次第です。」

「ふうむ。それは難題だな。なれど紀伊にいる九頭竜家と、江戸にいる日下部家では接点がないな。」

それは・・・と数馬は直から聞いた2人の事情を説明した。

「なるほど。そういえばそうだったかも知れぬ。・・・それでお前の見合いの相手が日下部家のご息女ではないかと気付いたのはいつのことだ？」

「それですよ！兄上。」

ポンと膝を叩き、身を乗り出す数馬。楽しそうに目が輝いているのを数馬は見た。

兄と弟（２）

数馬から日下部茉莉との繋がりを聞いた静馬は、白々と夜が明けるのも構わず話に耳を傾けていた。

「・・・世間は狭い。とはよく言ったものじゃな。それで茉莉殿はいまだにお前のことを富良風太郎だと思っているわけじゃな？」

「はい。」

「うつむ！それでいつになったら正体をばらすのじゃ？この後に及んでは本名を名乗っても都合が悪くはあるまいに。」

「実は見合いの席で驚かせようと思っております。他の者達にはそれなりの理由があるように申しましたが、実は理由などないのです。ちよつとした悪戯心いたずらが災いしただけのことです。兄上だからこそ話せる事実でしょうか。」

「お前は意地が悪いのお。それでは茉莉殿はいやいやお前と見合いをせねばならぬのか。可愛そうに。」

そう言いつつ静馬もその状況を思い浮かべにんまりとした。

「兄上こそ。私に茉莉殿との話に勿体をつけていたでしょう。本当に悪いのは兄上だ。」

「お前に言われとうないわ。」

「いかにも。はははは！」

互いの顔を見合わせ笑いあう２人。ひとしきり笑った後、思い出したように静馬が言った。

「そういえば天宮家ではご息女に婿を迎え、跡目を継がせることになったそうじゃ。」

「ほう！それはそれは。新之介には雨宮家を継ぐつもりはありませんからご当主も安心されたことでございます。いずれ新之介は百姓になると申しておりましたし、来年には子供も産まれるそうですから。」

「人の行き方というものはさまざまじゃな。私も今こうしてお前と

楽しく語り合っているが、いつどうなるかわからぬし。いや、世を
儚んでいるのではない。新之介という若者として百姓としていつまで
生きられるかわからない。お前だってもしかすると明日、心の臓の
病を起こすかわからぬのだからな。だからこそ生^{せい}を受けているうち
に精一杯やりたいことをやらねばなんのだ。」

静馬の言葉は数馬に、というよりはむしろ自分自身に言い聞かせて
いるようだった。

語り合っているうちに疲れが出たのか、静馬の顔には隈^{くま}が現れ
てきた。数馬は求めらるままいろいろな事を一気に話してしまった
ことを少々後悔した。そこで自分に旅の疲れが出たからと理由をつ
けて静馬の部屋を辞した。

茉莉の想い

一旦稲の庵に身を寄せた茉莉は、翌日連絡を受けた日下部家からの迎えで屋敷に戻った。しかし安心したのか帰宅後再び発熱してしまった。そこで茉莉を送って来た稲と直の手厚い看護を受ける事になった。

7日目になってようやく食事が摂れるまでに回復した。だがまだ起き上がる事はできない。その上時々ため息を漏らす様子に直と稲は首をかしげた。思い切って訊ねてみてもただ首を振るばかり。一向に原因がわからない。そんな様子に父、主水もんどや兄、宗太郎も戻ったなら金輪際屋敷の外に出られぬようにしてやる、と息巻いていたのが完全に当てが外れてしまった。あとは茉莉の回復をオロオロと待つ父と兄の姿があった。

更に7日が経ち、やっと起き上がれるようになった。病は既に完治しているはずなのだが、相変わらず部屋に籠もりきりで人と会うことを嫌がり、身の回りの世話をする稲、腰元2人、直以外の者とは一切会おうとしなかった。

ところがひょんなことからその原因が判明した。茉莉が戻ってから1ヶ月後のこと。診察に来た直が茉莉に富良様から手紙を預かって来ましたと告げた途端、その手から手紙をひったくるように奪い取ると、むさぼるように読み始めた。啞然とその姿を見ていた直は、ハハアと新たな手当ての方法を思いついた。

手紙を読み終えた茉莉は今までの病はどこへすっ飛んだのか、お腹が空いたので何か食べるものを下さいと言い出した。直はわかりました！とばかり部屋を出ると真っ直ぐ稲のところへ注進に走った。

「ええ？！恋煩い？」

話を聞いた稲は腰を抜かさばかりに驚いた。

「そうですよ！そうでなければ思い当たる節がありません。現に富

良様からの手紙を読んだ途端、お腹が空いた、何か食べるものが欲しい。ですよ！私の話を不審に想われるなら稲殿、ご自分の目で確かめて下さい。」

直の剣幕に疑問を感じながらも茉莉の部屋へ赴く稲。襖を開けた途端、その言葉通りの場面に遭遇することになった。

「お・お嬢様？」

恐る恐る声をかけると、

「ばあや、井上様から聞いたのね。わたくし、お腹が空いてたまらないの。何か持って来たのでしょうか？早く下さいな。」

と、以前の茉莉に戻っている。手ぶらで来てしまった稲は慌てたようにお勝手に戻り、準備していた粥を持って再び茉莉の部屋へ行った。

風太郎からの手紙

茉莉の食欲は幼少の頃から面倒を見てきた稲でさえも目を見張るものがあつた。その食欲ならば大丈夫だろうと、稲は今までのことを聞いてみることにした。

「え？なに？どうかしたの？」

「富良様からのお文にはどのような事がしたためてあつたのですか？」

「なぜそのようなことを聞くの？」

「直様も私もお嬢様の病をどうすれば治せるか、ずっと思案してまいました。どんなお薬を差し上げても全く効き目がなかったからです。ところが富良様からの文をお読みになつた途端このように元氣になられて。私達の苦労は一体何だのかと・・・」

その言葉を裏打ちするように小袖を濡らす稲。

「ごめんなさい、ばあや。でもこの文を見せるわけにはいかないのだつてこれはわたくしにとって大事な文・・・もう2人に心配をかけることはしないから許して下さいな。ね？」

愛らしい唇で『許して』と言われると、稲にしてみれば赤子の頃から育てた、いわばわが子も同然の茉莉。年のせいか稲は以前のような氣の強い乳母ではなくなつてしまつたようだ。その後ホウツと大きなため息をついた。

「仕方ありませんね。確かにお嬢様に來たお文を私が読んでも詮^{せん}無い事。これ以上聞きますまい。なれど元氣になられたことは旦那様と若様に申し上げても宜しゅうございますね？」

茉莉の言葉につい許してしまつた稲も、忠義だけは忘れていない。それには茉莉も反対せず静かに頷いた。

天変地異

茉莉の快復を知った父と兄はすぐ部屋に飛んできた。そして口々に良かった、良かったと肩を叩き合つて喜んだ後、とんでもない事を言い出した。

「茉莉。明後日、鳥居様のお屋敷で会つてもらいたい人物がいる。」

「え？父上、何ですの？急に。」

「見合いじゃ。お前がいけない間鳥居様と儂との間で決定しておいた。このような失態をしでかしたお前じゃ、異論は許さぬ。相手方はいつでも良いとのことだった。それゆえこちらから明後日と返事しようと思う。良いな。」

先程の喜びとは打つて変わり、一方的に主水は告げるとそのまま部屋を出て行つた。思わずさがるように兄の顔を見た茉莉に宗太郎は冷たく言い放つた。

「今回ばかりはそなたの味方はできぬ。お前のせいで儂はとんだとばつちりを受けた。」

父主水の後に続き宗太郎が出て行くと、茉莉は先刻の元氣はどこへやら、布団に突つ伏して泣き出してしまった。その様子を別室で聞いていた稲がすぐその傍に駆け寄つた。

「お嬢様、しっかりして下さいませ！一体どうなさつたのですか。お見合いの話はとうの昔から決まっていた事ではありませんか。新之介様とのことがはつきりした今、何を迷つておられるのです？」

さあ、ばあやに全部話して御覧なさいませ。きっと悪いようにはいたしませんから。」

諭すような言い方に心を開く氣になつたのか、茉莉は涙でぐしゃぐしゃになつた顔を上げ、ぽつりぽつりと話し出した。

東西の雄

話は少し^{さかのぼ}遡る。兄、静馬に帰宅の報告をした後、一風呂浴び充分な睡眠をとった数馬は、目付け鳥居備中守左馬介を訪ねるべく家を出た。

途中、ずっと考えていたことを実行しようと評定所へ立ち寄った。外国を見てきたという男に会ってみたかったのだ。

次期目付け役が内定している数馬の顔は評定所内でも知らぬ者はいない。それでも来訪の旨を告げると即座に面会は不可能と一蹴された。よほどその男が重罪人とみなされているのかが窺える。それでも鳥居の命^{めい}だからと押し切り、強引に会うことができた。

平伏していたその男が顔を上げた瞬間、数馬とその男の口から「ッ！」という驚きとも感嘆とも取れる声が上がった。しばらくの間、じっとお互いの顔を見つめ、心の内を探り合った。その後数馬が口火を切った。

「嫡木数馬と申します。」

「九頭竜隼人でございます。」

「初対面の男が何用か、という顔付きでござるな。」

「私には毎日が初対面でございますゆえ、少々のことでは驚かなくなりました。」

「なるほど。実は日下部宗太郎殿から間接的にですが、

あなたの助命を頼まれまして本日ここへ参ったのです。」

「宗太郎から？・・・そうですか。それで九頭竜という者がどんな男か品定めにいらしたのですね？」

「凶星です。」

「あなたは正直な方だ。それで私の印象はいかがですか？」

「幕府が上様がどういうお考えか某^{それがし}には解かりかねますが。・・・あなた程の人物がこの先現れるかどうか・・・それにこれ

からの日本は鎖国などしている場合ではないのです。蝦夷^{えぞ}には露西^{ろし}亜人^あが来ている。そんな時代に国内だけで物事を押し量^{はかり}っているはいけない。そのような時にこそあなたが必要なのです。」

数馬の口調は穏やかだがはつきりそう断言した。すると隼人は目頭を押さえ、搾り出すような声を出した。

「私は・・・心ならずも漂流し、害コツクを見てしまいました・・・そして家臣の全てを失った拳句ただ1人帰国しました。生きてはいけなないと捕えられてからはずっと死ぬ事ばかり考えておりました。」

あなたのような方がこの国にいうとは・・・」

「何をおっしゃる！あなたのような方がこれからの日本を支えるのです。いいですか、あなたのお命は某身命^{それがんめい}を賭^としてお救いいたします！その後城外でお会いすることを楽しみにしておりますぞ！」

がっちりと手を握り合う2人は、暗黙のうちにお互いの存在を認め合っていた。

静と動

熱い想いを抱きながら評定所を出た数馬は真つ直ぐ鳥居家へ向かおうとしたが、突然立ち止まり懷から紙と筆を取り出すと、サラサラと何かをしたため傍にいるであろう糸八を呼んだ。

「へえ。何です。」

「悪いな。これを日下部宗太郎殿に渡して来てくれ。鍋木数馬からだと申してな。必ず本人に渡すのだ。そのあと鳥居様のお屋敷へ案内してきてくれ。お1人で参られるよう付け加えてな。」

「へい。合点で。ところで日下部様のことですが、あのお方は小せえ時分から妹君と2人で何でも相談し合つた仲なんだそうですよ。性格は温厚で人柄も良く、奉行所内では悪く言う人はいないようです。ところが今回の一件で人が変わったように怒りっぽくなつたつてえ話です。日にちが少なかつたんであんましお役に立てるような話がなくてすいやせん。」

「そうか。いや、そこまで調べるのも難儀だつたらう。なにしろ武家を調べるのだからな。上々だ。」

「すいやせん。・・・で、お嬢さんへの文はねえんで?」

「糸よ。お嬢さんへの文はな、ちゃんとした場所でもつと上質紙に書くぞ。そうだな、におい袋でもつけてやるかな。ははは・・・おつと冗談、冗談だ。いいか糸、必ず宗太郎殿に渡してくれよ。」

「へえ。」

あ・うんの呼吸で数馬と糸八はそれぞれの方角へ向かった。

鳥居家の座敷へ通された数馬は、じつと左馬介を待った。

微動だにしないその後姿に、驚かせてやろうとそつと近づき、木刀を振り翳した左馬介。逆に見事な件捌きで左わき腹に強烈な峰打ちを当てられてしまった。

「相変わらずご冗談が好きですな。小父上。」

二ツと笑う一馬に痛さをこらえながら左馬介は上座に座った。

「お・おまえこそ・・・相変わらず・・・じゃな。」

自分でも痛みで顔が歪んでいるのがわかる。額に汗が噴出してきた。
「曲者かと思ひ、つい力が入ってしまいました。まさか小父上だつたとは。申し訳ございませぬ。」

平伏しながら自然に肩が震えてくるのを抑えきれない数馬。

「いや・そ・そうで・・・あろうとも・・・武士たるもの・・・常日頃一分たりとも余人に隙を見せてはならぬ・・・なに、痛いなどというのは修行が足りん証拠。儂のはな、年のせいじゃ・・・気にせんでよい。」

見栄を張る老人にこれ以上恥をかかせてはならないと数馬は本題を切り出した。

「本日、某が参上いたしましたのは・・・」

「ああ・・・その・・・ッ！・・・その話なら・・・静馬から聞いた・・・儂もな・・・ッ！手を尽くしておるのじゃが・・・何と申しても重罪人扱いの男じゃからな。ところで静馬には聞かんだが、

その九頭竜という男とおまえの関係は何なのじゃ。」

そこで数馬は静馬に話したことを鳥居にも話して聞かせた。同じ日に同じ話をするのだから二度目はスラスラと澀みなく口から言葉が出た。

「・・・そこで某ここへ参上いたす際、評定所へ立ち寄りその人物に会つてまいりました。お、その折、勝手乍ら、小父上の名を拝借いたしました。」

「何じゃと！このばか者が！勝手に人の名を使いおつて！・・・まあ良いわ。そちの悪さには散々泣かされたからの。今更腹を立てても後の祭りじゃ。それでお前の見たところその男は死なすには惜しい人間か？」

「小父上。あのような人物が日本にあと2人おりますならば、わが国は世界に名だたる大国になりましようぞ。」

「なんと！珍しいこともあつたものじゃ。お前がそのように他人を

誉めるとは。・・・ならば、お前が儂の立場であつたのなら、その男、何と処それがしするか？」

「もし某にそれだけの力がありますならば 外国からの

襲来に備え専門の役職を設置しそれにあの男を配し、直接外国人との交渉に当たらせませす。通詞のいらぬ外国人との折衝。これからの日本に欠かす事のできぬ重要課題です。そのような人物をみすみます死なすなどもつての外！一人の人間の命を救うだけで日本の将来が救えるやもしれぬのです。小父上、お願いいたします。どうか、九頭竜隼人と九頭竜藩をお救い下さい！」

いつになく真面目に弁をふるう数馬に、左馬介は痛さも忘れ、腕を組み、じつと考え込んでしまった。

と、その時。用人が日下部宗太郎の来訪を告げに来た。

初対面の義兄弟

嫡木数馬の名前で鳥居家に呼びつけられた宗太郎は、茉莉の縁談が壊れたのでは？とビクビクしながら座敷へ入った。

そこには鳥居らしき初老の侍と、男でも見惚れてしまうほどの若侍が対座していた。お互いにこやかに談笑しているところを見ると旧知の仲なのだろうと推測できた。宗太郎が用人によって紹介されると、すぐ若侍の方が自分は嫡木数馬であり、突然こんな形で呼び出し、申し訳なかったと謝った。

「此度は日本の一大事ともなりそうなことでしたので、内々で来て頂きました。」

引き続き数馬はすぐ本題に入った。しかし宗太郎にはちんぷんかんぷん。何故妹のことが日本の一大事なのだろうか？

「あの。実に不躰ながら・・・お尋ねの件はいかなる・・・」

「ああ！某としたことがつ。申し訳ござらん。・・・実はあなたのご友人、九頭竜隼人殿の一件でござる。」

「えっ！隼人が！隼人が罰を受けるのですか！」

宗太郎の面相が突如として変わった。

「いや、そうではござらん。そのことであなたに来て頂いたのです。実は最近、井上直殿と会う機会がありました。その折、九頭竜殿の話を伺い、先程某のそれがし一存で隼人殿に面会に行つて参りました。日下部殿、あの御仁は死なすには惜しい人物です！何としても助けたいと大目付、鳥居殿に助命嘆願をしていたのです。聞けばあなたとは竹馬の仲というではありませんか。私達は近いうちに義兄弟となるのです。その義兄上様が難儀しておられるのを黙って見逃すわけにはいきませぬ。ですから宗太郎殿！一緒に隼人殿を助けましょう！」

「えっ？私を兄と呼んで下さるのですか？てつきり私は縁談を白紙に戻して欲しいと告げられるのだばかり・・・かたじけのうございます。・・・嫡木殿！隼人は天才です！あいつのためなら私は、我

が命を差し出しても良いと幼少の頃より思っておりまして・・・」

男泣きする宗太郎に数馬と左馬介は顔を見合わせ頷いた。

「日下部殿。」

そこで初めて左馬介が口を開いた。

「はい・・・」

流れる涙を拭おうともせず、宗太郎は顔を上げた。

「そなたの心根こころね、しかとこの鳥居が受け取りましたぞ。きっとこの件は上様に上申いたし、九頭竜殿のお命お救いするべく、微力ながらこの鳥居力の限り尽力いたしましょう！」

「あ・ありがとう存じます！」

うれし泣きする宗太郎を数馬は別室に連れて行った。

内緒話

「宗太郎殿。これからはわたくし事の話をしていましてね。」

ニコツと笑いながら数馬は言った。

「は？」

感動の余韻が残る宗太郎は数馬の言わんとするところが把握できないようだ。

「茉莉殿のことですよ。」

「え？」

「実は某茉莉殿とは面識があるのです。」

「え？そんな筈は・・・」

訝しげな宗太郎に数馬は茉莉との一件を語って聞かせた。話が終わると宗太郎は言葉も出ないほど驚いた様子だった。

「あなたが驚かれるのも無理はありません。何しろ当の本人が一番驚いているのですから。ですが某のことは見合いの日まで妹御には内密にしておいて頂けませぬか。」

不審がる宗太郎に数馬は笑いながら言った。

「気の進まぬ縁談を自分の運命と諦めている茉莉殿の心根が直らないうちは某の正体を明かしたくないのです。イヤなものはいやだとはつきり意思表示し、その上で自分から進んで某の下へ興入れしてもらいたいです。それがたとえ富良風太郎であっても構いませんですから今は鎚木数馬と富良風太郎が同一人物だということは伏せておいて頂きたいのです。」

「そうでしたか・・・して、このことを知っているのは。」

「稲殿、直殿。あとは鳥居殿と某の兄でござる。」

「・・・分り申した。貴殿の仰るとおりにいたしましょう。・・・ところで鎚木殿。貴殿は妹をどう思っておいでですか？」

「某はずっと旅を共にいたしまして。」

と数馬は前置きしておいて、

「茉莉殿はとても優しく聡明です。自分の見合いの相手はいつしか茉莉どのであってくればいいと何度思ったことか。いやいや、正直に申しましょう。某は茉莉殿に惚れてしまいました。一生を供にするのは茉莉殿しかいないと心に決め、旅の後半はずっとそう思っておりまして。」

「なんと！ありがたい！自慢するわけではござらぬが妹は幼少の頃より母のいない子供でした。それなのに気は優しく美しい娘に育ちました。そこをご理解いただき誠に嬉しゅうございます。」

「お父上とあなたの育て方が良かったんですね。そういう茉莉殿を娶ることのできる某は天下一の果報者。」

「あ・りが・・とう・・ござる。」

数馬の両手を取って宗太郎はまた泣いた。その姿を見た数馬は、心底自分という人間は周囲の人々に恵まれているということを痛感した。

決断

それから一カ月後、九頭竜隼人の採決が下される事になった。それに先立つて数馬は、鳥居から老中達に事情を説明せよと命ぜられ、度々城中に上がっていた。

審問は主に九頭竜隼人助命嘆願の理由と、助命後の処遇についてである。数馬は手を変え品を変えた同じような質問に何度も答えた。それはまるで数馬自身が罪人であるかのようなやり方だった。それらは結果の出る前日まで続き、最後の説明を終えて城門から出たときにはぐったりと疲れ果て、見兼ねた糸八が駕籠やを雇ってきただけだった。

それほどの働きをしても当日の裁定に参列することのできぬ数馬は、じつと鳥居家の座敷で結果を待つ身であった。できることは全てやり尽くした。あとは上層部がどういった裁断を下すかにかかっていた。

評定の開始予定は巳の刻。たつぷり二時はかかるだろうと踏んでいた数馬だったが、意外に早く鳥居が戻って来たので驚いてしまった。

「小父上！」

「どうしたのだ。お前らしくもない。そのように慌てて。」

「結果は！九頭竜殿はどうになりましたか！」

「うむ。・・・そちの働きのお陰でな。九頭竜隼人は今日付けで無罪放免。加えて上様より外来国担当の役人に任ず、との職を与えられた。」

「え！？」

「生きてお国のために働いてくれと上様は仰せられたのじゃ。」

「あ・ありがとう・ございます！」

「そちの働きのお陰じゃ。僕はほんの少し口添えをしたまでのこと。」

・・良かったな。数馬。」

「は・はい！・・してこの事は？」

「日下部家にはすでに儂の配下の者を走らせた。」

「小父上！重ね重ねのご配慮・・」

あとは言葉にならない数馬。

「それにしてもそちは奇特的な男じゃ。何の得にもならぬのに一身に代えて他人を助けようとするとは。」

「小父上。それほどの人物なのですよ。九頭竜隼人という男は。それで奥方と九頭竜家は？」

「お構いなし。今まで通り忠義を尽くして欲しい。ということじゃ。」

「ありがとうございます！」

「既に役宅が充てがわれているゆえ、そちらに住むことになるだろう。」

「なんと、役宅まで！ それはそれは・・それで釈放はいつ？」

「儂がお構いなしの沙汰を聞いてからかれこれ一時ほど経ったからもう釈放されているのではないか・・これ！どこへ行く！数馬！

あれ！もう姿が見えぬわ。やれやれ相変わらず無鉄砲な男よのお。

じゃがそれが周りの人々の心を惹き付けるのであろう。得な男じゃ。」

鳥居が呼び止める間もなく数馬の足は役人達が住む日本橋界限に向かっていた。

再会

「九頭竜殿！隼人殿はご在宅か！」

奉行所の役宅に飛び込むように走ってきた数馬は隣近所にも聞こえるほどの大きな声で叫んだ。その声に呼応するかのように2人の男が奥から走り出てきた。いわずと知れた隼人と宗太郎である。3人は無言のまま再会を喜び合った。

すると奥からまた1人、今度は丸髷に結った女性が出てきた。

「あなた。そのようなところで鐺木様に失礼ではございませぬか？」

「おお！そうであつた！鐺木殿。これが某の家内、結でございます。」

「お初にお目にかかります。此度は主人共々……」

涙ながらに礼を言う結。その美しさは西国一ではなかるうかと数馬は思った。日本一としなかったのは数馬にとつての一番は言わずもがな、茉莉であつたからだ。

「ご新造。あなたのご主人を助けたのは某ではありませぬ。これも時世という大きな流れです。某はほんの少し手助けをしたまでのこと。これを機会に某も隼人殿や宗太郎殿のお仲間に入れていただきとうござる。」

「何と光荣な！私達の方こそ鐺木殿と近しゅうできる喜びで一杯ですのに！さあ、こちらで祝杯を挙げましょう！」

そう言つて隼人と宗太郎は数馬を促し、中へ入った。そこには結が乳母、九重から教わつたという手料理が所狭しと並んでいた。

「田舎料理で鐺木様のお口に合いますかどうか。」

遠慮がちに座を勧める結ににこつと笑いかけた数馬は、

「ご新造が作られたと言うのですか？この料理を？なんと、実に素晴らしい！」

と絶賛した。その笑顔と優しい言葉に顔を赤らめ下を向く結。その恥らう姿を見て数馬は、

「宗太郎殿。武家の姫君ともあろつお方が自ら料理をする。これからの日本は男も女子も上下身分の隔たりなく何でもやらねばなりませんね。」

と予先を宗太郎に向けた。

「と、茉莉に伝えておきましょう。」

宗太郎も負けじとやり返す。

「いやあ。はははは！ですがそれはまたの機会にして下さい。」

「無論。承知いたしておりますよ。」

その後、結も交え隼人の漂流中の話を夜の更けるのも忘れ、時には涙ぐみ、また時には笑いながら耳を傾ける数馬と宗太郎であった。

風太郎の手紙

九頭竜隼人という人物を介し、急速に親しくなった数馬と宗太郎はその後頻繁に会うようになった。その結果数馬は茉莉が異常なまでに部屋に引き籠もり、人に会うのを嫌がっているのを知った。具合は良くなつたはずなのに床上げができないらしいのだ。これには宗太郎ばかりか稲や直すなおにさえも原因がわからない。どんなに良い薬を処方しても一向に快復の兆しが現れないのだ。直たちはもう手の施しようがないと半ばさじを投げていたということだった。そこで数馬は茉莉へ文を書き、直すなおを通して渡してもらうことにした。勿論差出人は富良風太郎である。

『あれから既にふた月になろうとしておりますが、お加減は如何でしょうか。私は江戸に戻って以降、結構忙しい毎日を送っております。貴女あなたの具合が気になっておりましたが、直殿すなおよりご実家に戻られたと聞き及び、安堵いたしておりました。近いうちにきっと会いに行きますゆえ、その折にはまた元気なお姿を拝見したいと存じます。会える日を一日千秋の想いで待っている富良風太郎より。』

短い文章ではあったが、これは恋文だな。と苦笑いしながら封印し、必ず茉莉本人に渡してくれと直すなおに託した。これで少しは元気になるだろうと想いつつ。

ところがその文を手にした直後、茉莉は天国から地獄に一挙に突き落とされたようになってしまった。その様子は後ほど稲から数馬にもたらされた。

稲からの手紙

その日の夕刻。数馬は稲からの文を受け取った。それは走り書きのようでとても慌てて書いたものらしく、墨の色はまだらで文字は乱れ、およそ稲の性質からは想像できない粗雑なものだった。時節の挨拶は省略され、用件のみが記載されていた。

『茉莉様の容態が思わしくありません。先刻あなた様よりの文を受け取った折には大変に元気になりましたが、その後、殿様と若様より見合いの件を告げられると途端に泣き出す有様です。恐らくは富良風太郎様を想う余りのことと察します。しかしこのままではまた病がぶり返すのは明らかと井上様が診察のあと私に内密に教えてくれました。竊木様のご事情は重々存じております。なれどこの年寄りの願いをどうぞお聞きくださいますよう、どうぞあなた様のお力で茉莉様をお救い下さいませ。よろしくお願い申し上げます。

稲

（何たる事だ！）

数馬は見合いを密かに楽しみにしていた。それゆえこの文を読んで臍を噛むような悔しい気持ちがあった。数馬は稲の文をぎゅっと握りつぶした。あろうことか茉莉は風太郎を想う余り、再び床に伏せるかもしれないのだ。猶予がならないと判断した数馬は、見合いの日を待たず近日中に直接日下部家へ赴こうと決心した。

ところがその夜。竊木家にとって重大な事件が持ち上がった。そのために数馬の日下部家訪問の決意は実行不可能になってしまった。数馬の兄、竊木静馬がこの世を身罷みまかったのである。享年三十歳の若さであった。

静馬の死

子の刻頃、ようやく床に入った数馬は、佐々岡に叩き起こされた。静馬の様子がおかしいというのだ。脱兎の如く静馬の部屋へ飛び込んだ数馬は、虫の息の静馬に枕元に来るよう言われた。その傍には、やはり急に呼ばれた直ともう1人、数馬も見覚えのある直の兄、宗九がいた。数馬と宗九は互いに目礼すると、すぐ静馬の方へ向き直った。

「兄上！数馬です！」

ぐつと静馬の手を握ったのだが、既に静馬には握り返すだけの余力が残っていないかった。

「兄上！！」

「かずま・・・私は・・・もう駄目だ。・・・できることなら・お前の・花嫁を・・・この目で・見た・・・かった。・・・良いか、数馬・・・・あとは・・・あとのことは・・・お前に・・・頼んだぞ・・・・嫡木家を・・・たのむ・・・」

最後の力を振り絞ってそれだけ言うと、静馬は満足したような顔で息を引き取った。

「あ・・・兄上えええ！・・・私は、私は・兄上がおられたからこそ今まで生きてこられたのです！兄上がいなくなったら私は何を心のよりどころにすれば良いのですか！兄上！どうかどうか、今一度、目を開けて下さい！兄上ええええ！！」

静馬の身体を揺り動かし泣き叫ぶ数馬。見兼ねた直がそつとその肩に手を置いた。

「静馬殿はいつもあなたのお傍におられますよ。」

常日頃、

静馬殿は弟のお陰で今まで命を永らえていられるのだ。自分の命の火が消えぬうち、1つでも良いから弟のためになることをしたい。そう仰っておいででした。こたびの九頭竜様の一件は静馬殿にとつて一世一代の大仕事だったのでしょう。

先刻、静馬殿はも

しこのままあなた様と会えずに自分が死んでも決して悲しまないように伝えてくれと遺言を残されました。ですから数馬殿。」

「あ・兄がそのようなことを？」

「はい。」

「そうでしたか。・・・わかりました。取り乱して申し訳ない。もう悲しみませぬ。・・・兄上。兄上のご遺志はきっとこの私が！」

「数馬殿。不肖この井上宗九も嫡木家のお役に立てるよう尽力いたしますぞ。」

「井上殿！」

2人は昔からの親友の如く手と手を握り合った。

「数馬殿。私もお役に立てるよう兄同様尽力いたします。」

「直殿！」

涙で潤んだ目をしつかと開き、数馬は井上兄弟と固く誓い合った。

翌朝から静馬の葬儀の準備が始まった。といっても盛大なものではなく、身内だけのひっそりしたものだ。なれど静馬を慕う者達がひっきりなしに訪れるので、数馬は彼等の応対だけでぐったりとなってしまうほどだった。もちろん日下部宗太郎、九頭竜夫妻は率先して手伝いに来ていたし、井上兄弟も同様だった。唯一、数馬と風太郎の関係を知らない茉莉だけが疎外されたような形になってしまったのだが、それも仕方のないことだった。当然見合いは延期され、事情を知らなかったにせよ茉莉にしてみればその報を聞いた後、手放して喜んだのも無理からぬことだった。

新目付け誕生

慌しく初七日が過ぎ落ち着きを取り戻した鐔木家では、静馬の遺言通り、数馬の鐔木家当主就任の儀式が執り行われた。

静馬の名代で何度か城中に顔を出していたため顔見知りだったこともあり、実質的な儀式は型通り運んだのだが、届出書類の多さに数馬は辟易してしまった。よくこんな繁多な仕事を佐々岡はくそ真面目にやっているものだ、と本人を目の前にして愚痴をこぼす有様だ。

ようやく一月後に手続きが完了し、名実ともに目付け鐔木数馬の誕生となった。ただ通常の役所勤めとは違うため、今までとさほど変わらぬ毎日となりそうだった。

一応身辺が落ち着いたと思いきや、またぞろ鳥居が忘れていただろうと気を利かし、日下部家との見合い話を持ち出してきた。

数馬にしても忘れていたわけではなかったのだが、公的に忙しく、そこまで手が回るような状況ではなかった。それに静馬の49日もまだ済ませていないのに、という気持ちもあった。ところが古い先短いこの年寄りの、唯一の楽しみである縁組話をないがしろにするのか！と強く出られると、鳥居に借りのある数馬にとっては無下に断る事もできず、鳥居の言うがまま、見合いの日程を決められてしまった。しかし何か言い返さなくては気が治まらない数馬は、

「小父上、日下部殿はこの時期にこういう話をするということを承知しておられるのですか？」

「いやなに、全て儂に任す。ということで約定もとっておるので。構わん、構わん。」

「私といたしましたでは、できれば兄の喪が明けてからと致したいのですが・・・」

「いや、それはならん！駄目じゃ。お前は静馬の遺言を忘れたのか！お前の花嫁が見たかったと言ったではないか。ええい！面倒な！

良いか。見合いは三日後ぞ！まったく儂等の若い頃なぞは婚禮の晩にならんとお互いの顔を見ることすら出来なんだのに。お前は幸せ者じゃ！事前に見合いをさせて貰えるのじゃからの！」

ブツブツ言いながらサツサと勝手に事を決め帰って行く鳥居の後姿をため息まじりに見送りながら数馬は一人愚痴をこぼした。

「見合いなんぞしなくとも相手の顔など知っておるわ。」

ボソツと呟いた後、面と向かって言えぬ自分が憎らしくさえ感じた。

「旦那。」

突然下のほうから声がした。

「桑か！びつくりさせるなよ！」

ギョツとしてそちらを見ると桑八が神妙な格好で構えていた。

「へえ。すいやせん。ですが旦那。珍しい事もあったもんですね。

いつもならあつしが突然声をかけても驚いた事なんかなかったのに、一体どうしなすったんで？」

「う・うん。・・ちよ、ちよつとな。・・と、ところでお前、今の聞いたか？」

「何のこつてす？最近年ですかねえ、あつしやあ耳が遠くなっていけねえ。で、何の話で？」

「やつぱり聞こえたんだな。」

「大丈夫ですよ。鳥居様には口が裂けたって言いやしません。」

「頼むよ。あの爺さんには小せえ時分から頭が上がらねえんだ。」

「わかりやした。旦那の仰るとおりにいたしやす。」

元より桑八は数馬の不利になるようなことをする気も喋るきもなかった。

見合い

3日後は朝から抜けるような青空で、何か事を興そうとするには絶好の日和となった。

数馬の希望で見合いの場所は日下部家に指定されていたため、鐙木家では特に何も準備することはなかったが、新当主の一世一代の晴れの日とばかり、佐々岡は数馬のために袴かみしもと袴を新調していた。数馬はそれに袖を通すと普段通りの様相で別段供も付けず屋敷を後にした。その後を影のように付いて来る糸八の存在を感じながら。

そんな鐙木家とは対照的に、日下部家では天地がひっくり返ったような大騒ぎだった。準備だけでも大変なのに、当の茉莉が部屋に籠もったまま出てこないのだ。父や兄がいくらなだめすかしても全く効き目がない。とうとう主水もんどは怒り出してしまった。

宗太郎は事情を知っているだけに真実を言って茉莉を喜ばせたかったのだが、数馬との約束があつたために何度も口から出かかった言葉を飲み込んでいた。そこで用人が数馬の来訪を告げた時、当主である主水は挨拶だけに顔を出し、その後は頭痛がすると言つて部屋に引き下がり寝込んでしまった。宗太郎も焦るばかりだったが、事実を隠してもすぐにわかつてしまうことなので勇氣を持って数馬にあらましを告げた。

宗太郎から話を聞いた数馬はにこつと笑い、それなら時分が説得してみましよう、茉莉の部屋に足を運んだ。

廊下には途方に暮れた稲がしょんぼりと座っていたが、数馬の顔を見た瞬間、泣きつくように訴えてきた。

「大丈夫。私に任せて下さい。稲殿はお疲れでしょうから、向こうへ行つてお休みなさい。」

稲を労いたわつてから改めて茉莉の部屋に顔を向け、一呼吸つくところにいるであろう茉莉に向かつて話しかけた。

「茉莉さん。ここを開けて下さらぬか。約束通り、見舞いに来まし

た。私が誰かお分かりか？」

ところが警戒してか物音さえ聞こえない。

「茉莉さん。風太郎ですよ。あなたのことが心配ではせ参じたのです。某の声を忘れてしまわれたのか？どうかここを開けて下さい。」

「……風太郎様？……真の風太郎様のですか？」

「あなたに嘘を言つても仕方ないでしょう。某が本日まかり越したのは直殿よりあなたの見合い話を聞いたからです。居ても立つてもいられずとにかくあなたの本心を聞きたいと来てしまいました。正直に申します。……私はあなたに惚れている。一生添い遂げたいと思つています。あなたは私をどう思つておられますか。」

「風太郎様。そのような事をそのような大きな声で……」

「何も悪いことは申してはおりませぬ。それよりもあなたの返事を聞かせて貰いたい。」

「……わたくしは……わたくしもあなた様をお慕い申しております。」

微かだがはつきりした声が聞こえてきた。

「ならば私と夫婦になつてくれますか？」

「……はい。」

「それを聞いて安心いたしました。ならばあなたは見合いの相手に直接会つて、その旨を申し立てるのが礼儀でござろう。そうやってお父上や兄上に駄々をこねるような真似をして済まされるものではない。そのように礼儀もわきまえない様では行く末が案じられる。もしこのままあなたが拗ねた態度を取るのであれば、某はあなたとの事を今一度考え直す事にいたします。断腸の思いだがそれも詮無いことでしょう。」

きつぱりと断言した数馬。いや富良風太郎はあつという間に部屋の前から立ち去つた。次の瞬間、慌てたように襖が開き、涙で顔をくしゃくしゃにした茉莉が出てきた。

「お嬢様……！」

心配で休む事も出来ないまま廊下の隅に座つていた稻が叫んだ。

「ばあや！早う！早う！風太郎様が！」

「なりませぬ！風太郎様も仰つておられたではありませんか！ここは鎚木様とお会いになられ、礼を尽くすべきでございます。さあ、お着替えあそばしまして。若様もご心配なさつておられますよ。」

数馬の芝居が相当こたえたとみえて、茉莉は稲の言うがまま、鎚木数馬なる人物に会う決心をした。

対面

それから半時^{はんとき}ほどして、すっかり身支度を整えた茉莉が稲に手を取られ座敷に姿を現した。

数馬はわざと後ろを向いていたし、茉莉も下を向いたままだったので、お互いの顔は見えてはいない。だが数馬は茉莉の様子が手に取るようにわかった。

「茉莉。こちらが鎬木殿だ。此度^{ただひ}は隼人の一件で大変世話になったお方だ。お前も存じておろう。」

宗太郎の妙に明るい物言いが茉莉には憎らしく思えた。

「はい。・・・鎬木様。此度は兄の旧知をお救い下さりまことにありがとうございます。」

茉莉の挨拶に鎬木という男は何も答えない。何と失礼な男か、とすっかり記を強くした茉莉は、想いのたけを一気に捲し立てた。

「兄上！鎬木様！わたくし・・・わたくしにはお慕い申し上げているお方がございます！それゆえこのお話はなかったことに！」

「何だと！お前！この後に及んで何を血迷った事を！そこへ直れ！俺が成敗してくれる！」

いきり立つ宗太郎を見て数馬は内心この男は役者になれるのではないかと思った。

「あ・兄上。」

「その男の名前を最後に申せ！その男も俺が成敗してくれるわ！！そこまではつきり申すからには俺には聞く権利がある！一体何という男だ！新之介か！！」

「いいえ！違います！」

「では誰じゃ！」

「・・・ふ・・・ふうたろう・・・さま・・・」

兄がこのように激昂する姿を初めて見た茉莉は恐る恐る消え入りそうな声で答えた。

「ふらふうたろう？！何じゃ！そのふざけた名前は！古来、東昭神君公より拝し賜わりし直参旗本、日下部家の者とあろう人間がどのこ馬の骨とも分らぬような名前の男にうつつを抜かすとは！そこへ直れ！やはり儂の手で成敗してくれる！このような失態、戯言では済まされぬ！」

怒り狂った宗太郎が刀を鞘から抜いたとき、ようやく数馬が行動を起こした。

「宗太郎殿。もう許してやって下さい。妹御も必死の思いだったのでございましょう。のお、茉莉殿？」

そう言つて振り返った嫡木数馬なる人物の顔を見た瞬間、茉莉は言葉を失った。次第に身体が震えてくる。

「驚かせて申し訳ござらん。某が嫡木数馬でござる。」

「かかかかか・・」

「富良風太郎というのは某の仮の名。あなたと同じように家を慮り咄嗟に口から出た名前でござる。あなたもそうと分つていて某を風太郎と呼んでおられたのでしょうか。その後、自分の見合い相手があるただと分つたのだが、理由あつて黙つていたのです。この通り、謝ります。」

手を付き深々と頭を下げる数馬に宗太郎が慌てた。

「数馬殿！何もそこまでなさなくとも。貴殿は私達の為に。」

「いや、私達の間にとのような理由があるうとも、妹御には一切関係ない事です。結果的に茉莉殿を騙してしまいました。これだけは謝罪しておかなければ某の気持ちが悪くさせぬ。」

2人にやり取りを見ているうちに少しずつ落ち着きを取り戻した茉莉は、『お二人ともひどうございます！』とひと言叫ぶと一目散に自室へ戻り、再び襖を閉ざしてしまった。

根競べ

「嫡木殿。あの我儘な妹のためにあなたがそのような所に・・・」

「いや、これは全て某の責任。誠意を持って謝罪しなければならぬのです。」

茉莉の後を追いかけるように部屋の前までやって来た数馬は、宗太郎の言葉にそう答えた。

その後、時々中にいる茉莉の気持ちを解きほぐすように声をかけてみるのだが、固く閉ざしてしまった心は容易に解けるものではなかった。

どちらが先に根を上げるか、根競べですな。と言って茶菓子の代わりに宗太郎自ら酒と肴を持って来て一献やりましょう、と一緒に部屋の前に座り込んだ。

「それはそうと稲から聞きましたが、貴殿は妹を部屋から出すために何か齒の浮くような台詞せりふを言われたとか。一体何を言ったのですか？」

「齒の浮くような？・・・はて・・・某には思い当たる節はござらんが・・・」

「妹に惚れているとか、男が容易に口にせぬようなことを口走ったそうですな。」

「ああ。あれですか。確かに言いました。なれどあれは真まことのことです。おお！そうだ。」

とそこで何を思ったのか、急に数馬は声を高くして叫んだ。

「私は茉莉殿に惚れています。と言いました！それは嫡木数馬としてでも富良風太郎という男でもない。恋というものに目の眩くらんだ男の正直な気持ちでござった！しからはあれは芝居ではなく本音です！茉莉殿！そんな男の純情まで疑われるのか！宗太郎殿は齒の浮くようだと申されたが、私はそうは思いません！あなたが欲ほするなら

いつでも何度でも叫んでみましょう！惚れている！惚れている！
木数馬は日下部茉莉に惚れている！私は今この時の言葉に我が生涯を賭けてもいい！」

少しの間沈黙があつた。その後すーっと襖が開き今にも泣きそうな顔の茉莉が立っていた。

「もうお止め下さい。そのような大きな声で。」

「茉莉殿！」「茉莉！」

数馬と宗太郎が同時に叫んだが、茉莉の目には数馬の端正な顔しか映っていないようだった。それを察した宗太郎はそつとその場を離れた。次の瞬間数馬の身体は茉莉の部屋へ消えた。

2人の思い

生まれてこのかた女性の部屋じょしやうといえは母の部屋しか記憶にない数馬は、茉莉の娘らしい部屋に少々戸惑いを覚えた。しかしそれも僅かな時間のこと。すぐ目の前にいる娘の姿しか目に入らなくなつた。

「先刻も申しましたとおり・・・」

釈明しようする数馬をそつと制し、茉莉は自分の方こそ取り乱したりして申し訳なかったと謝つた。そして男である数馬に恥をかかせてしまったことを重ねて詫びた。

「いいえ。悪い事をしたのです。男女、身分の区別など超越して謝罪するのは至極当然の事。某それがしはそうように両親と兄に教えられてきました。」

その言葉には亡き両親とたった一人の兄に対する郷愁が感じられた。「わたくしの家とは大違い・・・わたくしは幼少の頃より女子おなこは耐え忍ぶものと教えられてきました。新之介様とのことも父が決定したことからと諦めておりました。それなのに何の前触れもなく嫡木様との縁談を決められてしまつて・・・」

小袖でそつと目頭を押さえる茉莉。

「ということはあの夜の行動はあなたにとって一世一代の反乱だったわけなのですね？」

「はい。」

「だがそのおかげで私達は自然なまま出会い、自分を飾ることなく相手を見ることができたのですね。」

数馬の熱い視線を真近に感じ、茉莉はうつとりした表情になった。

「は・・・い」

数馬は茉莉の手を取り、身体を引き寄せるとそつとその唇を吸つた。それがあまりにも自然だったので茉莉もされるがまま自分の身体を預けた。

「・・・このままずっとこうしていたい。」

思わずそう言つて茉莉はハツとした表情になつた。

「なれどそれでは示しがつかぬ。」

茉莉の変化に気付かぬ数馬は、一旦身体を離し再びそのつぶらな瞳を見つめた。

「嫡木数馬として改めてお願いいたします。某の妻になつていただけませぬか。亡き兄もあなたが嫡木家の人間になることを楽しみにしております。」

亡き兄という言葉は茉莉を突然現実に取り戻した。はにかみながらも居住まいを正すと悲しそうに言つた。

「あなた様のお兄様とは存ぜずお弔いにも参列いたしませんでした。改めてお悔やみ申し上げます。」

「かたじけのうござる。その兄がいまわの際きわにそう申しておつたのです。・・・今一度申します。某の妻になつて下さい。」

畳に頭をこすりつけるように平伏する数馬の肩にそつと手を置くと、
「折角のお申し出ではございますが、わたくしこのお話は受けすることは出来ませぬ。さきほども兄に申しましたが、わたくしには末を誓つた殿方がございます。たとえ添い遂げる事が出来ずともそのお方を裏切る事は出来ませぬ。」

思わぬ展開に啞然となつた数馬だったが、

「うつつむ！・・・いや、あなたは正直だなあ わかり申した。

某は見合いを断られた男として退散いたしましたよう。・・・では、御免。」

意外にもあつさり数馬は引き下がつた。襖に手を掛け再び茉莉の方へ振り向くと

「己おのれが感じた事、思つた事を率直に述べる事は非常に大切な事です。あなたも父上や兄上の意見に惑わされる事なく正直に生きて下さい。それではお達者で。」

颯爽と出て行く後姿は紛れもなく富良風太郎その人であつて。

1人の老人

それから数馬は口実を作つては日下部家に日参するようになった。もちろん誰にも見合いを断られたとは口外していないので、日下部主水や宗太郎は両手もつてを上げて喜んだ。茉莉だけが困つたような顔で出迎えていたが、それでも来てもらつては迷惑と言わないので、図に乗つた数馬はこれみよがしに宗太郎相手に酒を酌み交わし、果ては泊まり込んでしまふ事さえあつた。

宗太郎の妻、瑠璃の実父は天文方に出仕していた。その娘である瑠璃も幼少の頃から星空を眺めるのが好きだった。それゆえ天文の事には造詣が深く、数馬は話を聞いているだけでワクワクし、時の経つのも忘れてしまふほどだった。ところが宗太郎と茉莉にしてみれば内心面白くはない。宗太郎は女子おなこに学問は必要なし、という封建的な考えの持ち主だったし、茉莉は数馬、すなわち風太郎は自分に会いに来てくれるはずなのに、兄嫁と楽しそうに語らつている姿を見せ付けられているのだ。おまけに自分といえ、来た時と辞す時だけ挨拶する程度で、これが先日我が妻に！と熱望していた人と同一人物とは思えないような豹変ぶりである。したがって茉莉としては全くもって面白くない日々の連続になつた。その鬱憤うっぷんを晴らされる稲や腰元こそいい迷惑というものである。

ある日。いつものように数馬が日下部家を訪れると先客があつた。珍しいことに瑠璃の客らしい。数馬は隣の部屋で所在無くしていると、聞くとはなしに2人の会話が聞こえてきた。盗み聞きは良くないとわかつてはいたが、その内容に興味を惹かれ、直接襖を開けては失礼かと改めて廊下に出てから声をかけた。

「まあ！ 嫡木様！ お越し下さつているとは露知らず、ご無礼をいたしました。」

サツと立つて出てくる瑠璃を静かに制し、

「いや。某^{それがし}の方こそ無礼とは承知の上で声をかけてしまいました。」と改めてその人物を見た。

一見、普通の老人。しかしその目は眼光鋭く町人鬚にはしているが、なかなかの人物と見た。

「お初にお目にかかります。某^{それがし}鏑木数馬と申します。実は瑠璃殿に会いに参ったのですが、隣室で待つておりますうち、あなた様との会話を耳にし、いても立つてもいられず失礼とは存じたのですが図々しくお邪魔してしまいました。」

挨拶方々話しの邪魔をした詫びを言う数馬に、その老人は驚いたように後ろへ下がった。

「これはこれは。手前の方こそご無礼いたしました。私は伊能忠敬と申します。こちらの瑠璃様のお父上、小^{おの}此木様には一方ならぬお世話になりました者でございます。」

「瑠璃殿の・・・では天文方にご関係が？」

「はい。この度旅に出ることになりましたので、瑠璃様にもご挨拶をと思いまかり越した次第でございます。」

「旅？」

「鏑木様。伊能の小父様は50を過ぎてから星の勉強を始められたのですよ。それまではご実家^{たな}の店を切り盛りなさっておられたのです。旅というのはですね。日ノ本の地図を作るため、蝦夷地まで行くのだそうです。わたくしも案じているのですが、小父様の熱意はきつとお天道様も溶かしてしまうくらいだと思いますのよ。」

にこやかに伊能という老人の話に補足する瑠璃。

「地図・・・ですか?!これはすごい!50を超えられてからという話にも驚きましたが、地図を作るために蝦夷まで旅をするとは!」

「瑠璃様。50、50と人を年寄り扱いしないで下さいまし。手前はあの年になつて初めて自分のやりたいことを出来るようになったのです。ですから年は関係ないと自負しているのです。」

笑いながら瑠璃をたしなめる伊能老人。そこには世間の年寄りに見

られるようなやる気のなさは微塵も窺えない。それから3人は時の経つのも忘れ、はるか未知の世界について語り合った。おかげで数馬はまたしても日下部家へ泊まるはめになってしまった。だが伊能という老人が旅する本当の目的を数馬も瑠璃も生涯知る事はなかった。

じらしい

伊能忠敬が日下部家を辞し、数馬は宗太郎夫婦と夕食交じりの酒宴の後で久方ぶりに茉莉の部屋を訪れた。ところがいくら呼べども茉莉は返事をしない。腰元の小萩に聞くと、茉莉は部屋にいるはずとのこと。だが最近数馬が来ると決まったように部屋に閉じ籠り出て来ないのでどうしたものかと思案していたのだそうだ。これはしめた！と思った数馬は、再び茉莉の部屋の前に戻り、わざと皆に聞こえるような大声で叫んだ。

「瑠璃殿は素晴らしい方ですね！美人だし優しいし頭もいい！宗太郎殿が羨ましい！あのような女性（うつくしい）が存在するということはこれからの日ノ本の未来は明るいという事です！いやあ！瑠璃殿は素晴らしい！小萩、おまえもそう思わぬか？」

数馬はわざと素晴らしいを連呼した。すると勢いよく襖が開き、真つ青な顔の茉莉が姿を現した。

「か・かように申されるのなら！（あねうえ）義姉上と一緒になられたら宜しゅうございましょう！」

それだけ言うとサツと襖を閉めようとする茉莉の身体をグツと引き寄せ、中に入ると後ろ手に襖を閉める数馬。それを見て氣を利かせた小萩はすつとその場を離れた。

「な・何をなさいます！声を出しますよ！」

数馬の腕の中で必死にもがく茉莉。

「声？おお、どうぞご自由に。あなたの相手（それがし）が某である以上、この家の者達は誰一人助けには来ませんよ。たとえあなたのお父上や兄上でもね。むしろお転婆な娘をどうにかして欲しいと願っておられる。」

「いやっ！！」

尚も抵抗する茉莉に、

「静かにしなさい！これ以上のわがままはあなたに恥の上塗りをさ

せることになるのですよ。」

数馬のひと言は茉莉の抵抗を止めさせたばかりか、反対に泣かせてしまう羽目になった。

「あ・あなたが・いけないのです・」

「私が・」

「そうです・あれほどわたくしを妻にと仰っておきながら・来れば義姉上あねうしのところに入り浸りで・兄上が・かわいそうです！」

「何を言うのかと思えば・宗太郎殿も瑠璃殿の知性は認めておられるし、私が天文に興味があるのも承知の事。それに私はあなたに一度振られた男ですよ。他の男が好きだという理由で。それゆえそのように言われるのは心外ですし、おかど違いというものです。それともそっちの男じゃ埒が明かぬと私に鞍替えしたというのですか？そして関係のない瑠璃殿に対して勘違いの嫉妬をしている。」

「ち・違います！わたくしは嫉妬なんて！」

「今のあなたの行いや言動を嫉妬以外の言葉では表せない。エゲレスの言葉ではじらしいというそうです。」

「わ・わたくしは！」

そう言ったきり袖で顔を隠し泣いている姿をじつと見ていた数馬は、優しくその身体を引き寄せ、自分の腕の中にすっぽりと包み込んだ。「……正直に申せば、私はあなたにヤキモチを焼かれて嬉しかった。私は今でもあなたを妻に欲しいと思っている。ただ

あなたの気持ちに別の男にある以上、無理強いするつもりはない。それは今も同じだし、これから先も変わることはない。だがそれは私個人の考えであって嫡木家のものではない。私が兄の後を継ぎ家督を継いだ以上、子孫を残す義務がある。いずれどこぞの家中の娘と祝言を挙げねばならぬことはあなたも武家の娘なら承知しておられよう。それはあなたの身の上にも言えることだ。」

そこで数馬は茉莉の身体を離し、じつとその目を見つめた。まるでそこから茉莉の真意を探り出すかのように。

切り札

「茉莉さん。これが最後だ。私は武士である前に1人の男です。いつまでも女々しく降られた女の家に入りしていると云われたくない。今一度あなたに断られたらすっぱり諦め、この家には金輪際足を踏み入れないつもりです。」

私の妻になってくれませぬか。」

これが最後・・・そう言い切る数馬に茉莉の心は大きく揺さぶられた。

「最後？」

恐る恐る問いかける茉莉。それに対し静かに頷く数馬。

「・・・わたくしを心底好いてくださると？一度はあなた様の申し出を断ったわたくしなのに？」

「私が心底妻にしたいと思うのはあなただけです。そのようなことはこれからの私にとって取るに足りない小さなことです。」

噛み締めるような数馬の言い方にじつと下を向く茉莉。しばらくして顔を上げると目に一杯涙を溜めてにつこりと笑った。

「・・・初めてお会いしたあの夜からわたくしはずっとあなた様をお慕い申しておりました。・・・富良風太郎様と鏑木数馬様が同一人物と知ったときは、複雑な気持ちがいたしましたけれど、それでもあなた様を想う気持ちが揺らぐことはありませんでした。・・・改めてお願い致します。わたくしをあなた様のお嫁にして下さい。」

「え？・・・ま・まことですか！茉莉さん、某の頬をつねって下さい！　イタツー！真だ！いやっほう！！」

思い切り茉莉の身体を抱き上げ、ぐるぐるとその身体を回したの数馬は突然立ち止まった。力任せに身体を回され、目が回ってしまった茉莉だったが、ふと数馬の身体が小刻みに震えていることに気付いた。

「お寒うございますか？」

「あなたからまた断られるのではないかと・・・急にそんな気がしてきて恐ろしくなつたのです。・・・私の腕の中にあながいることが信じられないのです。・・・この場面を何度夢に見たことか・・・」

数馬は茉莉の顔と自分の手を交互に見ながらとても信じられないという思いに囚われていた。「夢ではございませんのよ。わたくしは今本当にあなたの腕にすっぽり包まれておりますわ。」

決意を表明したことで急に茉莉は大人びた口調になった。その時点で数馬は既に尻に敷かれていたのかもしれないが、今の2人はそのことに気付いてはいなかった。

「・・・生涯離しはしない・・・宜しいか。」

「わたくしも生涯あなた様の傍を離れませぬ。」

ひしと抱き合う2人の様子を、わずかに開いた襖の陰から宗太郎と瑠璃はホツとしたような表情で眺めていた。

祝言

それからほとんど拍子に話が進み、仲人を買って出た鳥居左馬介の采配の下、祝言の日がやってきた。

数馬は武家のしきたりも大切とは考えたのだが、今日この日を無事迎えられたのは身分の上下関係なく自分達のために骨身を惜しまず尽くしてくれた人達と思い、その全員を招待することにした。宗九・直兄弟、稲はもちろんの事、新之介ははるばる川越から野菜をどっさり手土産に出席した。初め、新之介は江戸の土を踏む事にかなり躊躇していたが、数馬の尽力により天宮家と5年ぶりに和解した彼は、数馬の説得により出席することによりやく承知したのだった。また数馬の異色ともいえる友人である糸八は、恐れ多いと固辞したが、茉莉にどうしても！とせがまれ、落ち着かない様子で膳の前に座っていた。隼人夫婦はにこにこしながら宗太郎夫婦と語り合っている。彼等にも間もなく第一子が誕生することで喜びもひとしおである。しかしせっかく生まれてくる子供は同時に両親以外祝ってくれる身内がない、という淋しい運命も背負っていた。

三々九度の固めの盃を済ませると、喜びと酒に酔ったのか上機嫌の主水が『高砂』を詠うと言い出した。日下部家の人々は揃って止めたのだが、数馬はせっかくお義父上が詠ってくださるのだからと言ったのが運のつき・・・唄が始まってすぐ数馬は自分の失敗に気付かされた。音痴などという言葉では言い表せないほど主水の唄はひどいものだった。たまりかねて隣を見ると、茉莉はじめ日下部家の関係者全員が小さくなっていた。その様子を見て数馬は思った。（自分達の子供が音痴だったならそれは日下部家の血筋だな。）と。その後、宴は滞りなく進み、お開きの時刻になった。招待客はそれぞれの思いを胸に帰宅し、嫡木家の使用人たちも今日だけは早めに自室に引き下がった。

あるじ
主の部屋へ通された茉莉は、今日からこの家が自分の居場所なのだ
と改めて痛感した。

2 度目の初夜

数馬と夜を過ごすのは初めてではないのに、主の部屋にその姿がないのを確認すると何故かホツとする茉莉だった。だがいつまで待っても数馬は入ってこない。静寂が辺りを覆っていく。疲労と部屋の中が程よく暖かいたため、茉莉は自分でも気付かないうちに座ったまま眠ってしまった。ようやく数馬が部屋に戻った時には茉莉はその状態で熟睡していた。その姿に申し訳ないことをしたと思いつつ、布団にそつとその身体を横たえてやった。

「疲れたんだろう。ゆっくりお休み。」

そう呟くと自分もその隣にごろりと横になった。2つの寝息が1つになった時、2度目の初夜が静かに過ぎていった。

それから瞬く間に10日が過ぎたが、茉莉は何年も前から嫡木家にいるような懐かしい気持ちになっていた。逆に数馬の方が婿に来たような落ち着かない様子で、佐々岡に渋面を作らせている有様だった。

「あなた。今宵は井上様のお宅へ参られるのですよ。なれどお早めにお戻りになられますよう。」

「おお！左様！本日でしたな。さすが茉莉さん！」

「あなた！その茉莉さんはお止めくださいませ。わたくしはあなたの妻になったのですよ。それではわたくしがあなたを尻に敷いているように思われてしまいますわ。」

「ふむ。なるほど・・・まあ良いではないか。誰に何と言われようと俺が幸せ者なのは真^{まこと}のことなのだからな。・・・では行って参る。」

「爽やかに出仕するその後姿にフツとため息を漏らす茉莉。これも幸せということなのだろうか、と感じてしまうのだった。」

井上兄弟

『お供します。』という小者を歸し、着流しに大小といういでたちで井上家に向かう途中、1人の浪人が道端にうずくまっていた。『もし。どうかなされたのですか？』

困っている人をそのまま見過ごすことのできない性格の数馬はすぐ声をかけた。

「急に差込みが・・・」

「それはいかん！丁度良い。某、これより馴染みの医師のもとへ参るところゆえ、連れて行つて進ぜよう。」

浪人に肩を貸し、歩調を合わせながら歩く数馬に、

「かたじけない。某は村岡小太郎と申す者。ゆえあつて浪々の身・・・」

「村岡殿。詳しい話は後だ。ほら痛みの余り脂汗がにじんでおられるぞ。まずは手当てが先決。」

「直殿。あなたの診立ては如何か？」

1人客間で盃を空けていた数馬は、渋い顔をして入ってきた直に聞いた。

「ええ・・・このところに炎症を起こしています。なるべく早く取り除いてやらねば危うい事になりかねない。」

自分の右腹を指差す直に不思議そうな顔を見せる数馬。直にはそれが可笑しかったのか初めて笑顔を見せた。

「ここを切つて膿を出すんですよ。」

「切る？腹を？誰がそんな大それた事を？」

「もちろん私ですよ。あと誰がいるんです？私がやるしかないでしょうねえ。」

「おぬしが？！そんな！」

「ええ。兄が麻酔をかけて私が執刀します。今まで何度もやってい

る手術ですから大丈夫ですよ。 そうですね。一時程^{いっとき}で戻れると思いますから、待っていて下さいますか？」

そう言つて立ち上がる直に慌てて声をかける数馬。

「直殿……頼む！」

「はい。」

にこやかに客間を出て行く直に数馬は改めて井上兄弟の凄さを感じた。

約束通り、一時^{いっとき}を少し回つたところで直は戻つて来た。晴れ晴れとした顔は手術が順調にいったことを意味していた。

「あれ？先刻からあまり進んでいませんね。一体どうしたんです？」

「どうしたつて、手術と聞いて落ち着いていられる人間はそうはいないと思うが。」

「え？そうかなあ。私はいつこうに平気ですが。では改めて。」

ぐいつと盃を干す直はいつもの彼だ。

「おぬしは凄いなあ。こんな状況でも普段通りに飲み食いできるなんて。」

「しかしこれが本来の私の仕事ですからね。私は出島で蘭方医学を学び、手術にも何度か立ち会っています。兄は外科医でもあります。が、麻沸湯という麻酔薬ができてからはもっぱら私が執刀し、兄は麻酔を担当しているのです。あのご浪人ももう大丈夫でしょう。後遺症で熱が出るかもしれませんが、兄がその後の処置をしてくれま

すから、今宵は気兼ねなく飲み明かしましょう。」

「あなた方兄弟には敬意を表するよ。だが今日は失礼する。人の生死に係っている時に酒など飲んではいられないだろう。」

「いや、今日は私が数馬殿に頼み事があつたのです。私の話を聞いて頂けまいか。」

「頼み事？」

一旦立ち上がりかけた数馬だったが、直の言葉に改めて座り直した。

漁火太郎

2人で3合ほど空けたところで直は盃を置いた。だがどう話を切り出したものかと考えあぐねている様子だ。元来気は長い方の数馬であつたが、酔いが回っていたのか痺れを切らしてしまった。

「直殿。いかなされた。」

「はあ。実は、その、何と申しましょうか・・・」

直は困り果て数馬から視線を外した。視線の先に滝登りする鯉と一輪の牡丹が描かれた掛け軸がかかっている。それを見た途端、直は大きな声を上げた。

「牡丹！ええ！左様です。牡丹なのですよ！！」

「牡丹？あのボタツとした花の牡丹かい？」

「はい。あ、いや、その牡丹ではなくて・・・あ、やはりその牡丹です。」

「何だか一向に話の道筋がわからんな。いったいその牡丹がどうしたというんだ。」

「え？お分りにならない？」

「さっぱり。」

直にしてみれば数馬がなぜ悟らないのかが不思議なようだ。だが分らぬものは天地をひっくり返しても分らない。数馬は正直にそれを口にした。

「では末だご公儀には届いておらぬのですね。最近市井しせいを騒がせている漁火とか申す押し込み一味のことは。」

「漁火？いいや。俺は知らない。初耳だ。して、そ奴等はいかなる輩やからなのだ？」

「金持ちの商人ばかりを狙い、その姿を見た者は全て一刀両断に切り捨て、金品を奪い去って行く。近年稀に見る悪党集団です。加えて盗みに入つた家々には必ず牡丹の花を一輪残して行くという小憎らしい奴等です。」

「なんてこつた。とんでもねえ奴等だ！それでその姿を見た者で生き残っている者は本当にいねえのかい？」

「はい、あの、あ、いや、殺されず運良く生き残った者がたった一人おることはおつたのですが・・・」

「それは不幸中の幸い。で、その者は？
どうした？顔色が悪いが。」

「いえ、わたくしは大丈夫です。ええ、確かに幸運だったのですが、その者。名はお絹と申しまして、札差し天満屋の一人娘なのです。が、しかし・・・」

そこで直は言い澀んだ。

「何だ。齒切れが悪いな。はっきりしてくれ。さきほどのお主とは雲泥の差だぞ。そのお絹が如何いたしたのだ？」

数馬の語気が少し荒くなる。

「はい。・・・実はそのお絹が盲めしいなのです。」

「めしい？目が見えぬというのか！」

「はい。そのおかげと申しましょうか。それゆえ此度は災難を免れた次第なのです。」

「ううむ！　だがたとえ盲めしいであつても何かは感じたのではないのか？　そういう者達は常人より優れた感覚を持つと聞いたことがあるぞ。」

「はい。お絹の証言によりますと、首領らしき者は太郎と呼ばれ、次に二郎、三郎となっていたこと。人数は6名、すなわち六郎までいたということ。その連中はどうかやら話し方に特徴があつたようで、絹は口でどうこう説明することは出来ないが、もう一度聞けばはっきり断言できると申しております。数馬殿の仰る通り、盲人達はあるかに別の感覚が発達しております。実際六郎と呼ばれた男がいたかどうかは分りませぬが、足音で6名いると感じたそうです。」

「ううむ。なるほど！
それにしてもおぬし、俺が知らぬ事を一介の医者がなにゆえそれほど詳しく知っているんだ？」

「はあ。またしても、と思われるかもしれませんが、お絹は私の患

者でして・・・」

「ほう！おぬしは武家だけではなく町人も診るのか？」

「病に身分の上下は関係ございませんので。」

「偉い！その通りだ！それでこそ医者^{いしや}の鑑^{かん}！というもの！

し、誰かを介して知ったのであるう？その天満屋とは。」

「はあ。」

「誰だ？」

「数馬殿の知らない方です。」

「俺の？まあいい。いずれにしても町方^{まちかた}の仕事だ。俺には関係ない。」

隼人の一件で直の性格を知った数馬は、どうすればその口を割らす事ができるのかその術^{すべ}を取得していた。要するに自分に関係ないことは一切口出ししないぞ、という姿勢を見せることだ。案の定、直はいとも簡単に数馬の仕掛けたワナにひっかった。

14年前の真実

「・・・静香という娘から聞きました。」

名前を言った途端、直の顔は真っ赤になった。どうやら酒のせいばかりではなさそうだ。

「女か。しておぬしとその娘とはどういう関係・・・！もしかすると・・・」

黙って頷く直。

「おぬしも隅には置けんなあ。で、武家娘か・・・そうか・・・察するにその娘の家に出入りしていたのが天満屋で、そういう関係でおぬしのことが判り、お絹が患者として来た、というわけか。」

「はい。」

直の声は今にも消え入りそうだ。

「ゆくゆくは夫婦めおとになるのか？」

「そのつもりです。」

「左様か・・・それでその一味は？」

「はい。天満屋を襲ったのが7日前。その後は足取りさえ掴めない状態のようです。」

「余罪はあるのだな？」

「江戸にその姿を現してからちょうど2月ふたつきになりますが、天満屋を含み3軒おおだなの本店が襲われています。」

「2月前ふたつきということは、俺がおぬしとであつた頃だな。それにしても公儀も知らぬとは職務怠慢か・・・現在いまは北町か・・・」

「そこで数馬殿にお願いがあるのでです。天満屋の仇かたきを討つていただけませぬか！」

「何だと！」

「数馬殿に漁火一味を捕えて頂きたいのです！」

「馬鹿なことを言っな！俺は奉行所の人間ではない！」

「それは重々承知しております。あなたが目付けであるということも。それを承知でお願いするのです！江戸で一番の剣の使い手であるあなたにしか出来ない事なのです！」

畳に額を擦り付け^{こす}るように頭を下げる直。

「・・・そこまでしておぬしを駆り立てるものは何だ？」

「は？」

「俺に土下座まがいのことをしてまで仇^{かたき}を討つてくれと頼む理由だ。」

「

「実は・・・」

と直がぼつりぼつり話し出した内容は驚くべきことだった。絹という娘、実はさる武家の落とし種なのだということ。14年前にお手つきになった女中が赤子を孕^{はら}んだまま天満屋へ払い下げになり、そこで絹を産んだ。それは周知の事実だったが、不憫に思った本妻の娘がお絹親子を屋敷に出入り自由とし、そのまま現在に至っているということだった。

「・・・その武家娘がおぬしの想い人というわけか。」

答える代わりに直の顔が再び真つ赤になった。

「していずれのご家中だ。」

「はあ。・・・直参旗本、柴田日護守殿のご息女です。」

「直参？　おいおい。おぬしまた大変な娘と恋仲になったものだな

あ！」

「はあ。何ともこればかりは・・・」

「静香殿もおぬしの患者だったという事かい？」

「いいえ！静香殿のお父上が兄の患者でした。ある日、代診として

柴田家を訪れた際、一目ぼれをしてしまって・・・」

「で？手を付けた、か？」

「と・・・とんでもない！私達はそんなことはしておりません！」

額に筋を立てていきり立つ直。

「すまん、すまん！冗談。冗談だ。おぬしは俺とは違う、ということとを忘れていた。

話を戻そう。その静香殿にお絹の両親の

仇を討つて欲しいと頼まれたんだな？」

「はい。ところが私は医学以外何の心得もない男です。そこで数馬殿にお願いしたいのです。」

「しかしそれは奉行所管轄であろう。」

「その奉行所が心許ないのであなたに頼んでいるのです。どうかこの通り！！」

再び土下座する直に、数馬は大きなため息をついた。

お絹

それから五日後。直から例の浪人の容態が安定したと知らせが入り、数馬は城下がりのついでに井上家へ立ち寄った。ひよんなことから係わり合いになったのだが、行きがかり上、気になっていたということもあった。

宗九の弟子に案内されて病室に行くと、村岡は布団の上に座り背中を向けてづーづーとほおずきを吹いていた。弟子が数馬の来訪を告げると、ぱあっと明るい顔をこちらに向けた。先日とは正反対の精悍な顔付きになっていた。

あの折は大変お世話になりました。と丁寧な挨拶から始まり、井上兄弟の素晴らしさを昏々と述べられ、数馬は身内が誉められているかのような錯覚を覚えとてもいい気分になった。

「ところでお身体の具合は如何ですか？」

話が一段落したところで数馬は話題を変えた。

「ええ。この通り。アイタタタ・・・」

元気なところを見せようと力んだ村岡だったが、傷がまだ痛むと見えて腹を押さえた。

「無理はなさらぬほうが良い。某も直から連絡を貰い気になって立ち寄ったまでのこと。お元氣になられたのであれば何よりでござる。」

「空元氣は通じませぬな。ハハハハ！痛っ！」

2人は目を見合わせて笑った。ひとしきり笑った後、フツと真面目になって数馬が切り出した。

「お手前は上方のご出身ですか？」

「はい。しかし上方言葉が出ぬよう心がけているつもりでしたが、やはり判りますか？」

「言葉の端々に上方訛りが感じられる。」

「仰る通り、某は堺出身でござる。」

「江戸にはいつ？」

「半年ほど前です。浪々の身ゆえ、知人のつてを頼って江戸へ参り仕官の口を捜そうと思っておりますが、当てにしていた者が既に他界しており、仕方なくその日暮らしをしていた毎日でした。」

「なるほど。ご苦労なさっておりますのだな。……ならばご家族は今も堺に？」

「いいえ。某は独り身。親兄弟も既にありません。天涯孤独の身でござる。何やら身边調査のようござるな。あ、氣に障つ

たのならお許し願いたい。どこの馬の骨とも判らぬ者をお助け下さつたのですから、いろいろ聞きたいとお考えになるのは至極当然の事でございます。どうぞ何でも聞いて下さい。」

「これは済まぬことを。某の方こそ村岡殿のご事情も考えず失礼いたしました。……ところで。そのほおずき、なかなかお上手ですな。」

「これですか。これは亡くなった母に幼少の頃教えてもらいました。この庭に生なつていたので懐かしくなって取って貰ったのです。」

「母御前ははいせに……羨ましいですな。某には母の記憶がありません。物心付いた頃には兄と2人でしたし、兄もそういったことには疎い上に身体が弱く、つい先日他界いたしました。それゆえ某は母に何かを教えて貰ったことはありません。」

「それは申し訳ないことをいたしました。」

軽く会釈する村岡に数馬は親しみを覚えた。

「そうだ！某にほおずきの吹き方を教えていただけませぬか？」

「え？はあ。それは容易たやすい事。……では貴殿を使って申し訳ないが、その一番大きなほおずきを取って下さい。そう。それがええ。ほなええですか。」

村岡は顔と顔がくつつくほど数馬を傍に近づけた。一瞬何とも名状し難い良い匂いが周囲を包んだ。夢見心地の表情になった数馬を不思議そうに見る村岡。

「如何なされた？」

「いい匂いがするのです。貴殿は匂い袋を所持されているのですか？」

「匂い？」

「花の香りです。」

「いいえ。そのような物は持っておりません。・・・ほら、あそこ
の花の香りが漂っているでしょう。某はずっとこの部屋におりま
したから気が付きませんでした。」

「ああ、そう言われてみればそうですね。・・・まあいい。さあ始
めましょう。」

どんなに些細なことでも興味を覚え、習得するためには全霊を傾け
る数馬の姿勢に村岡は感心してしまった。その成果はすぐ現れ、4
〜5回も吹くと上手に音が出るようになった。

「ほう！貴殿は素晴らしい感性をお持ちだ。通常の早さではないで
すぞ。」

「そんな、誉めないで下さい。しかしこれはなかなか難しい代物で
すな。もっと簡単に出来るかと踏んだのですが。」

「某が見た限りでは一番優秀な生徒ですよ。」

それを聞くと数馬はにこつと笑った。剣の修行でもこんなに苦労し
た事はなかったからだ。とはいっても凡人にはほおずきの方が簡単
なのだが。

その時、暮六つの鐘が鳴った。

「お！これは長居をしてしまった！村岡殿。お疲れになられたでし
ょう。申し訳ありません。また近いうちに寄らせていただきます。」

この次はまた違う遊びを教えて下さい。」

数馬と村岡は互いに握手を交わし別れた。しかしこの後2人が井上
家で再会することは2度となかった。

ほおずき（２）

柴田家を辞す道すがら直に誘われ数馬は村岡の見舞いがてら井上家に立ち寄った。ところが何やら門弟たちが右往左往している。直の顔を見かけるとその中の１人が慌てたように走ってきた。

「大変です！村岡さんがいなくなりました！」

「何だつて！私が出かける時にはぐっすり寝ていたはずだぞ！」

「はあ。それが半時はんとき程前の回診の時までは確かに布団に寝ておられたのですが、先ほど部屋をのぞいたらこれが枕元に。今全員で辺りを探しているのですが、なかなか見つからないのです。あのお体ですからそう遠くまでは行っていないと思うのですが。先生！一体どういたしましょう・・・」

半べそを掻きながら門弟が差し出したのは小判が１０枚とほおずき１つであつた。小判をくるんだ懷紙には急に用事が出来たから。と挨拶もなく出て行く非礼を詫び、診療代として少々の金子きんずを置いていく。残った分は研究費に充てて欲しい、といった内容が記されていた。しかし出て行く理由については何も書かれてはいなかった。

「馬鹿な！まだ傷が癒えていないのに、今無理をしたら命取りになり兼ねん！何という無茶な人だ！・・・みんなで今一度、手分けして探すんだ！いいな！絶対見つけて連れ帰るんだ！」

門弟は直の怒りを一身に受け、慌てふためきながら奥へ引込んだ。その後姿を見送ると懷紙を握った手にぐっと力を込め、直は悔しそうに下を向いた。するとその手から真つ赤なほおずきがぼろりと零れ落ちた。それを素早くすくい上げた数馬の鼻腔をあの花の香りが通り抜けた。

灯籠組

ハツと数馬の脳裏に閃き^{ひらめき}が走った。それは漠然としたものだったが、数馬は突然走り出した。後ろから直が何か叫んだのも気付かず、一気に奉行所に駆け込んだ。

与力達の制止を振り切って町奉行の前に立ちはだかり、自分は目付け鐙木数馬であると名乗り、極悪人の逃亡を阻止するため即刻西国への陸路及び海路を遮断するよう訴えた。

初め町奉行は今月の月番は北町だからと渋い顔を作ったが（数馬はそれとは知らず南町奉行所に駆け込んだのだった）相手が目付けであることと、極悪人の逃亡と聞いてすぐさま行動に移った。捕り方に下知を下し、自らも数馬と共に馬を引き品川に向かった。但し、与力の1人を北町奉行所に連絡係として走らせた事は賢明な処置だった。

連絡を受けた北町奉行も南に遅れるな！とばかりに捕り方を手配し、同様に馬を飛ばした。

南北両奉行所が総出となって品川にたどり着いたとき、丁度その日最後の西国行きの船が出港するところだった。突然出航禁止が出された船長は怒り狂ったように抗議したが、相手が奉行所ではそれ以上文句も言えず、ぶつぶつ文句を言いながらも引き下がった。

表向きは駆け落ちしようとした若い男女の探索という名目で船改めが行なわれたが、一緒に乗り込んだ数馬が1人の男を見つけたことで搜索は打ち切りとなった。

男は数馬に声を掛けられると観念したように頷いた。奇妙な事にその男には若い男の連れがあり、その男と一緒に船を下りた。訳の判らぬうちに出航許可が下された船長は、更に文句を言いながら船を出した。お祭り騒ぎのような捕り物はあっという間に終わり、旅人はそれぞれに品川を後にした。人がまばらになった頃にはとっぷりと日が暮れていた。

もう遅い時刻ということで船宿の一室を借りるとものものしい
雰囲気の中、両奉行を従えた数馬が尋問の指揮を執ることになった。
考えてみれば2人の奉行は目前にいる男達の正体もわからぬまま対
座しているのだ。気の毒としか云いようがなかったが、急を要する
捕り物だった為致し方ないことだった。

「何の捕り物だったのか既にご承知ですか？」

「……わかっております。」

声を掛けられた男が答えた。

「……お身体の具合は如何です？」

男はハツとしたように腹を押さえた。油汗が滲んでくる。

「井上が案じていましたよ。今無理をすれば命に関わると。」

「……井上^{せんせい}医師には申し訳ないことをしたと思っております。
なれど……こうするより他なかったのです。」

「なにゆえです？奉行所はまだ見当さえつけていなかったのに。」

「奉行所？……フツ。奉行所なぞ恐れるに足りませぬ。某が恐れ
たのは貴殿でござる。先日見舞いに来られた貴殿を見て危ないと思
じ、このような軽挙に出てしまいました。」

恐れるに足りない奉行所、と聞いて両奉行は色めきたった。だが数
馬の一睨みで2人共慚然とした表情で黙り込んだ。

「見舞いといつても某との会話は世間話の域を超えてはいなかった。
それゆえ何の変哲もなかったはず。」

「匂いですよ。他の誰もが気付かなかった匂いを貴殿は嗅ぎ付けた。
」

「匂い？そういえば匂い袋を所持しているかと訊ねました。それか
らこれ。」

そう言つて懷からつぶれたほおずきを出す数馬。

「あなたが残して行ったこれにも残り香がありました。この匂いで
もしや、と思い奉行所に駆け込んだのです。」

刀直入に伺います。あなたは灯籠組の首領ですね？」

村岡殿。単

突然今市井を混乱に陥れている大盗賊団の名前を聞かされた両奉行

は腰を抜かさんばかりに驚いた。村岡達は一瞬ギョツと身体を固くしたが、狼狽した様子もなく真っ直ぐ数馬を見た。

「……仰るとおり、間違いありません。某は灯笼組の首領、漁火太郎。これは六郎です。」

「他の者達は？」

「おそらく何処へか逃げたものと。」

「連絡は取っておらんのか？」

「仕事が終わると一定期間全ての連絡を絶ちます。それゆえ彼等が今どこにいるのか一切わかりませぬ。これは某の看病のため行動を共にしてくれておりましたが、捕まると分つていれば……」

必死に村岡の身体を支える若い男の姿に、数馬はふと違和感を覚えた。

「もしか六郎殿は口がきけぬのか？」

「……はい。これは生まれつき口がきけませぬ。それが不憫で片時も離さずおいたのですが。まさか盗賊の一味になるとは思わなかったでしょう。」

空いた方の手で六郎の頭を撫でる村岡。その姿は残忍な人殺しとは思えない程自愛に満ちている。だが病み上がりの身体に西国への逃亡は酷であった。たとえ強靱な身体を持ち主であろうとも体力の衰えは火を見るよりも明らかだったのだ。村岡の顔から徐々に血の気が失せ、額からは油汗が滲み出してきた。

「片山殿！申し訳ないが医者を呼んでくれまいか！事情は後ほど説明する！牧瀬殿、あなたは布団を敷いてくれ！六郎！おめえ足を持って！俺は頭を持つから村岡さんを早く横にするんだ！」

両奉行に命じ、六郎と共に村岡の身体を横たえたと数馬は手ぬぐいで額の汗を拭ってやった。

「直ほどの腕ではないと思うが、医者呼びにやったからもう少し辛抱してくれ。六郎、水を入れた桶を持ってくるんだ！熱が出てきた！」

「……数馬殿……」

「大丈夫。六郎はあんたを置いて逃げ出すような男じゃない。そんな奴なら傷ついたあんたを置き去りにしてさっさと逃げてるさ。安心してゆっくり休むんだ。」

「すまぬ……あの子の……本当の名は……兵吾。……村岡兵吾……某の弟……」

かなり長時間苦痛に耐えていたのだろう。村岡はそれきり意識を失った。

その後の診察にも目を開く事なく、村岡はされるがままになっていた。予想通り、六郎、つまり兵吾は村岡の傍を片時も離れようとはしない。食事も摂らず、かわや厠へ行く以外は決して動かなかったのである。

神か仏か直か

診察を終えた医師が数馬を外に連れ出した。村岡兄弟は両奉行がきつちり見張っているので安心だろうと数馬は医師の後に続いた。「いかがですか？ 具合は。」

「あの処置は一体どなたがしたのですか？」

「どなた、とは？」

「恥ずかしながら手前の手には負えません。あの処置を施した方ではないと・・・」

「なんと！・・・実はあの者は井上直という医師の患者で、あれは井上が自ら行なった処置でございます。」

「井上？！ではあの麻沸湯の井上殿のご舎弟か！これは何とした事を！ 鎚木様、即刻井上殿をこれへ呼んで下され！あの者を救えるのは井上兄弟をおいて他にはございません！」

後になってみれば、医師梅庵の判断は正しかった。村岡の傷は内部で炎症を起こし、腸が癒着していたのだ。数馬は自分の権力をこの時ばかりは最大限に利用し、両奉行がお互い協力し合い、即刻井上兄弟を連れてくるよう命じた。

その間、梅庵が手当てをしていたのだが、傷口を覆った布が交換するたびたちまち血で真っ赤に染まっていく様を見るにつけ、数馬は人の命というものを考えさせられた。つまり、たとえ極悪非道の限りを尽くした悪人であっても、目の前で苦しんでいる者を見殺しにしてはならぬということを痛感したのだ。いずれ獄門が免れない者ばかり、である。

兵吾は絶えず村岡の額に滲む汗を搾った手ぬぐいで拭っていた。口の利けぬ弟とどのように生きてきたのか、ふと数馬は村岡の人生を思った。どのような事情で悪の道に身を転じてしまったのか。なにゆえ江戸に出てまで悪事を働いたかをである。

「鎚木様！井上殿はまだでしょうか！早くしないとこの者の命

が持ちません！」

梅庵の言葉に数馬はハツと現実に取り戻された。梅庵の言葉にはありありと苛立ちが感じられたが、数馬とてどうすることもできない。何とか持たせてくれと頼み、たまらず宿の外に出てみた。刻一刻と命の火が消えていく村岡。日ごろあまり信心深くない数馬であったが、この時ばかりは神仏両方に祈った。

井上兄弟（２）

井上兄弟が南北両奉行直々のお供で品川の船宿に着いたのはそれから二時^{ふたとき}ほどたつてからだつた。

村岡の命は最早風前の灯だつた。一応手術の準備はしてきた直だが、何しろ満足な手術ができそうにない環境で行なわなければならないのだ。そのためいつもより余計に準備に手間取り、実際手術が始まつたのは更に一時^{いっとき}後だつた。

初め兵吾は絶対村岡の傍から離れまいと必死に抵抗していたのだが、直に村岡を死なせたいのか！と怒鳴られると仕方なくあてがわれた部屋に引き下がった。しかし座つていても落ち着かない様子で、音がするたび腰を浮かせていた。

「兵吾。井上兄弟に任せておけば大丈夫だ。俺はあの２人の腕を知つている。村岡さんは必ず良くなる。だからお前も信じるんだ。」泰然自若としている数馬をジロリと睨んだ兵吾だつたのだが、逆に冷静な数馬の目に見つめられるとその視線を逸らした。そんな姿にいじらしさを感じフツと笑みがこぼれる数馬。

「案ずるなど言つても今のお前には無理な話だな。・・俺はお前の兄さんが羨ましい。お前のような兄想いの弟がいて。先だ

つて病で亡くしたが、俺にも兄がいた。あの頃の俺は周りから見たら丁度お前と同じ目をしていたのかも知れぬな。大丈夫だ。

兄さんは絶対助かる。信じるんだ。良いな。」

力強い数馬の言葉に素直に頷く兵吾。

それからどれほどの時が流れたであろうか。外が白々と白み始めた頃、ようやく人の動く気配がした。それまでは時折金属らしきもののこすれる音が聞こえていたが、今回は明らかに手術の終わりを告げるものに相違なかった。案の定、手術着を脱いだ直が疲れたような顔で２人の前に姿を現した。それを見てサツと立ち上がる兵

吾。

「大丈夫。村岡さんは随分強靱な身体の持ち主のようですね。先日
の手術もそうでしたが、今日のはもっと凄かった。それを難なく耐
えてしまったのですからね。感服いたしましたよ。」

そう言いながらチラツと曰くありげな目を数馬に向けた。そうとは
気付かない兵吾は気が抜けたのかヘタヘタと座り込み、疲労も手伝
つてかそのまま気を失った。慌てた数馬だったが直に心配する事は
ないと言われ、促されるままに外へ出た。外は少々肌寒かったが、
疲れた頭には心地好かった。

告白

「村岡さんの具合ですが・・・」

兵吾の前では見せなかつた苦渋の皺が直の眉間に現れ、村岡の容態が必ずしも良好だとは言えない、ということ物語っていた。

「危ないのか？」

数馬はいち早くそれを悟った。

「それが、何とも・・・ 確かに強靱な身体と精神力を持っていることは既に申し上げたとおりなのですが、半月もしないうちに2度の大手術を受けたのですから・・・それに今日は治りかけていた腸が癒着していて腸閉塞を起こしていたんです。江戸からここまで道のりをどのようにして来たのかはわかりませんが、かなり無理をしたのだと思います。傷口も開きかけていましたし、通常なら一日でこれ程までにはなりませんからね。あとは村岡さんの気力がどれ程のものか・・・それにかかっているとしか申せません。」

「・・・つまり。生きたいという執念があるかどうか、という事か。」

「ええ、そうですね。まさにその通りだと思います。凡人なら手術中に死んでいたでしょう。それほど大変な手術だったのです。」

事も無げに言う直に、今更ながら感服してしまう数馬だった。

「うつむ・・・俺はおぬしの腕を信じている。月並みなことを言うようで申し訳ないのだが、何とか助けてやってくれ。兵吾の事を思うとそれしか言えんのだ。」

数馬は顔の前で手を合わせ直を拝んだ。

「そんな！やめて下さい！あなたに拝まれても私は全能の神ではありません。あとは真の神頼みまことをするしかありません。」

「すまぬ。だが今の俺の心境はおぬしが神様なのだ。」

がつくりとうな垂れる数馬に直はひと言だけ言った。

「一緒に祈りましょう。全能の神仏に・・・」

覚醒

半醒半睡はんせいはんすいの状態はなはだで村岡はうなされながら5日後にようやく目を覚ました。周囲には氣遣わしげな表情の直、兵吾、数馬の姿があった。

「せ・・・んせい？」

弱々しい声に本人が一番驚いたようだ。

「ご気分はいかがですか？」

「は・い。・・すこ・し。・何というか・・・雲の・・・う・えを・・・あるいているような・・・」

「それは仕方ありませんよ。やっと地上に戻って来たのですから。」
「？」

「村岡さんは現世とあの世の間をさまよっていたのですよ。そしてとうとう三途の川を渡らず戻って来られたのです。そのような気分になるのは至極もつともな事です。」

「さんず？」

フツと村岡の口元がほころんだ。事情を全く知らない直は何も考えずにそう言ったのであろうが、村岡には皮肉に聞こえたのだらう。

直は直で村岡の笑みが安堵のものと解釈し、傷口を診ますからと創部側の布団をはいだ。包帯として巻いていたサラシを外すと、しばらく患部をみていたが、やがてホツとした表情になった。

「もう大丈夫です。このまま安静にしていれば10日ほどで起き上がることが出来るでしょう。」

直の言葉に兵吾の身体が大きく揺れ、声なき声で泣き出した。突然のことに数馬と直は目を丸くした。しかし村岡は慣れているのか、力を入らない手でその身体に触れた。

「ひょうご・・・お前、みなさ・・・まに・ご・めいわくを・・・かけていたのではあるまいな。・・・この方々は私のいのちを・・・2度までも・・・救ってくださった方々なのだ。・・・夢々失礼のないよ

う……いつまでもメソメソしていてどうするのだ。……最後までしつかり己を見据^{おのれ}えるのだ。……わかったな。」

村岡の叱咤に兵吾はビクリと反応した。数馬にはその意味がすぐにわかったが、直にとつては意味不明なセリフにしか聞こえなかったようだ。

「大丈夫ですよ。20日もすれば床上げができますから。」

「いいえ……わたしは……わたしと弟は……すぐにでも江戸へ……参らねばならぬのです。……実は……」

力を振り絞って起き上がろうとする村岡を数馬が制した。

「村岡さん。今は何も考えず傷を治すことが先決です。あとの事はそれから考えましょう。」

「しかし……それでは貴公にごめいわくが……」

「あなたは非常に大切な方だ。それはご自分でも承知しておられるでしょう。ですから直殿の許可が出るまでは当方の指示に従ってもらわねばならない。不服でしょうが、どうかそうして下さい。」

軽く頭を下げる数馬。村岡の閉じた目からツーンと涙が流れた。

「かたじけ……ない。……もつとはやく……貴公のような……お人に巡り会っていたなら……」

同調するように再び兵吾が泣き出した。

花は桜木人は武士

それから一月あまり後、品川の船宿から南町奉行所に身柄を移ひうつされた村岡兄弟は、数馬の特別な計らいで裁決が下されるまでの間、小石川の養生所で暮らすことになった。

取調べに対し彼等は一切隠し事はしなかった。村岡達一味は元々それぞれが上方の浪人の出で、その日暮らしの貧乏生活を強いられていた。加えて数年前に起きた火事のため家族と住まいを失くした彼等は、ある商人の用心棒として雇われていた。だがひよんなことから百姓達の一揆の先導をしたと疑われ、役人に負われるはめになったのだ。逃亡生活をしているうちにやけになった1人がどうせ捕まるならでかい事をしてやろう。と独断で押し込み強盗をしてしまった。それがまんまと成功したため賛同した他の者達に釣られるように村岡兄弟も押し込みをするようになった。たまたま小太郎という名前と一番の年長ということで首領に祭り上げられたのだという。押し込みに入った先に牡丹の花を残したのは仲間の一人が自分達の存在をより印象付けようと偶然庭に咲いていた牡丹の花をわざと落としたのがきっかけだった。それが人の口に上がるようになってたため常用することにした。だが押し込みも5度、6度と回を重ねるうち役人の詮議が厳しくなり上方にはいられなくなつて一念発起、江戸で大儲けをしようと下つて来た。村岡は下見も兼ねて他の仲間よりも早く江戸に入った。そして仲間が揃うのを待つて最初に押し込んだのが絹問屋の上州屋、次が材木問屋の越後屋、三度目に入つたのが札差屋の天満屋であつたということだった。逃げた仲間達の行方は知らないということだったが、いずれ落ち合う場所は決めたあつたらしく、村岡は事細かに供述した。それゆえ彼等の捕縛は時間の問題だろうと思われた。

そんなある日。1人の娘が奉行所を訪れた。娘は目が見えない

らしく若侍に付き添われてやって来たのだった。ところがその場の
雰囲気は尋常のものではないことを瞬時に察知したのか、若侍の後
ろに隠れたまま奉行に名を聞かれても黙ったまま答えようとしない。
若侍の励ましの言葉で漸く小さな声で『絹』とだけ言った。その日
は天満屋の遺児、お絹に直接村岡兄弟を会わせようという面通しの
日だった。そして絹を連れて来た若侍というのが他ならぬ数馬本人
だった。村岡達は絹を見ても何の反応も見せなかったが、奉行の言
葉にハッと身体を固くした。

「天満屋の娘？ そんなはずは！」

思わず発した声に今度は絹の身体が即座に反応した。

「この人です！ この人がお父つつあんとお母さんを！！」

それまで白州の雰囲気には怯えていた娘とは思えない程の大声で村岡
達を指差し、その前に立つと村倉を掴んで思い切り揺すった。

「あんたのせいであんたの！・・・」

そのまま号泣する絹。

「・・・すまぬ・・・」

村岡はたったひと言詫びた。

「村岡さん。この娘はお絹といつてね、あんた達が天満屋で押し込
みを働いている間中ずっと押入れに隠れていたんだ。そして耳であ
んな達のしていることを視ていたそうだ。人数は6名。聞き慣れな
い言葉を話し、その中の1人は身体の具合が悪いのか、ひどそうに
していた。とね。俺はその話を聞いた後、あんたの失踪を知っても
しや、と思った。まさか直感が当たるとは思いも寄らなかったんだ
が、あんたが直の元を黙って去らなければ未だに下手人が判らず暗
中模索していたと思う。」

あらかじめ発言の許可が奉行から出ていたので、数馬は絹の言葉を
補った。

「・・・天知る地知る我知る人知る・・・天網恢恢祖にして漏
らさず・・・やはりあなたには敵いません。お絹さん。私は
そなたの言う通り、ご両親を仇敵です。逃げ惑うあの人達を容赦な

く切った男です。・・・武家であれば敵討ちというところだが・・・この上はお奉行に言上し、一刻も早く獄門台に上がるからそれで気を鎮めて頂けまいか。」

再び泣き出す絹の背中を撫でながら優しく語り掛けるその姿には、灯籠組の首領として世間を震撼させた盗賊の影は微塵も感じられなかった。

それから半月後。灯籠組の首領として名を轟かせた村岡小太郎、兵吾兄弟は異例の早さで小塚原の露と消えた。最後の姿を見届けようと刑場に赴いた数馬は、

「花は桜木、人は武士。とはよくいったものだ・・・」

と2人の散り際の見事さに改めて感服し、形見となったほおずきを見つめた。そのほおずきもまた、元の主の死を悼むかのように干からびて黒く変色していた。空を見上げると眩しいばかりの太陽が燦燦と輝いていた。

江戸花夢幻

世間を震撼させた難事件を一刀両断に解決した数馬であったが、その後の文献には灯籠組の名前も、増してその事件すら記録されていない。混乱に乗じて第二、第三の灯籠組の出現を恐れた幕府が傾きつつある権力で強引に事件そのものをうやむやにしてしまったのだ。それゆえ目付け鎗木数馬の功績はどこにも記されていない。

その後、日本は時代の流れによって、止む無く出島以外の場所でも外国船を受け入れるようになった。しかし庶民の暮らしは益々ひどくなるばかりで、一揆や打ちこわしが各地で多発するようになった。のちに天保の飢饉と称される大飢饉が日本全土を襲いそれに拍車をかけた。そんな中で幕府の期待を担った水野忠邦が老中に任ぜられ、政治改革を行なった。いわゆる天保の改革である。片や文化面に於いては、蘭学者の弾圧が始まり、渡辺崋山や高野長英といった人物が相次いで投獄されるという時代の流れからの逆行も垣間見えた。

世の中が新しい時代へ向かいつつある頃、1人の老人が今まさに終焉の時を迎えようとしていた。

「父上！しっかりして下さい！私は父上が頼りなのです！父上！」
「……静馬。何を言うのだ。……お前には佐保がいるではないか。……それに……儂の枕元には母上が迎えに来ておる。……わかつておる。茉莉。……あと少し待つておくれ。……静馬。よいかいぞ。……これから日ノ本は大きく変わる。……お前も時代に乗り遅れるでないぞ。……大きな声では言えぬが、幕府はあと数年で倒れる。……お前も心しておくが良い。じゃがな、お前の身体には代々目付けの家柄としての血が流れている。その鎗木家の当主としての精神を忘れるでないぞ。……よいな……」

それはある時代を疾風の如く駆け抜けた男。鎗木数馬の年老いた姿

であつた。妻、茉莉との間に三男三女を儲けたが、その最愛の妻も10年前にこの世を去つていた。

嫡男静馬は3人姉妹の後に授かつた男子だっただけに、周囲が甘やかして育ててしまい、長じた後も些か頼りないところがあつた。それでも何とか父親のようになりたいと剣の修行に勤しみ、学問、武芸全般において優秀な成績を修めた。それに両親から受け継いだ容姿の美しさも加わつて、嫡木姉弟といえは武家は元より、町人に至るまでその名を轟かせた。

そんな静馬も年頃になり、嫁を迎えることとなつた。相手は同じ直参旗本、山野部家息女佐保である。この娘、器量は平凡だが、学問、取り分け算術に秀でており次の世代を担う女性と殊に数馬が望んだのであつた。

祝言を無事済ませると数馬は即隠居し、同じく隠居した宗太郎、九頭竜隼人等と共に自由気ままな余生を送つていた。ところが寄る年波には勝てず、宗太郎、隼人を次々と病で亡くすと、生きる氣力を失つたのか、数馬も一挙に老け込んでしまった。その数馬のもとにとうとうお迎えがやって來たのだつた。

「何です？父上！」

おろおろする静馬。

「見苦しいぞ、静馬。うるたえるでない。・・・全てはひと時の花のように儚い夢よ・・・」

そう呟くと、数馬は静かに息を引き取つた。享年80歳。1861年の春のことであつた。

この年、皇女和宮が公武合体の道具として江戸へ下つたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246d/>

夢・幻（うたかた）の花

2011年4月23日23時24分発行